

わ せ と ち 2
早稲枋Ⅱ遺跡
第6次調査

— 市内遺跡発掘調査報告書 4 —



2003. 3

岩手県宮古市教育委員会

わ せ と ち 2
早稲栃Ⅱ遺跡
第6次調査
— 市内遺跡発掘調査報告書4 —



遺跡遠景航空写真(南→)

Photo. 1

2003. 3

岩手県宮古市教育委員会

序

海と山の幸に恵まれた三陸地方の沿岸部には、数多くの遺跡が所在しており、私たちの住む宮古市にも、先人たちが残した貝塚、館跡、そして集落跡など469ヶ所もの遺跡があることが知られています。

これらの遺跡は、数千年前の縄文時代から古代、さらに近世までの長きにわたる宮古の歴史を、現代の我々に語り伝えてくれる貴重な財産であります。私達はこれらの遺跡を、正しい認識とともに、後世に伝え残していく責務があると考えております。

本書は、個人住宅の建築工事に伴う早稲栃Ⅱ遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。

報告書として刊行することにより、この遺跡の調査記録が、地域史の資料として活用されることを望むとともに、埋蔵文化財への理解がなお一層深まることを願うものです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および本書の刊行にあたり、ご協力、ご支援を賜りました関係者の皆様に対し心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成15年3月

宮古市教育委員会
教育長 中屋定基

例 言

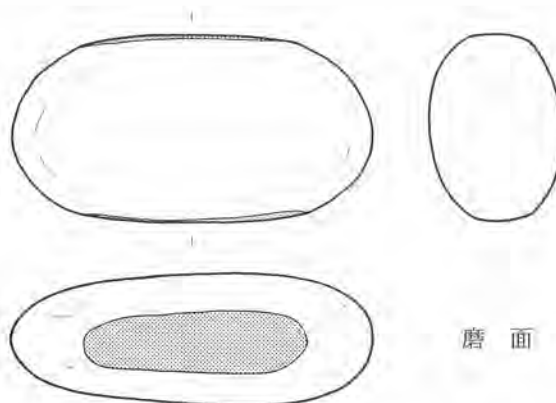
1. 本書は、宮古市早稲栃地区に所在する早稲栃Ⅱ遺跡の第6次発掘調査報告書である。
2. この調査は、個人住宅の建築工事に伴う事前調査であり、平成9年度の市内遺跡発掘調査事業として実施されたものである。
3. 調査主体は宮古市教育委員会であり、発掘調査及び報告書の執筆・編集は、社会教育課主任文化財調査員竹下が担当し、その他担当職員がこれを補佐した。
4. 本書は、概説編と本編から成る。概説編では調査の概要を解説し、本編は調査内容の詳細を報告したものである。
5. 調査の平面記録は公共座標第X系を基準とし、座標値 $X=-36,000,000\text{m}$ 、 $Y=+96,000,000\text{m}$ を原点とした相対座標を用い、座標値にRX、RYを付した。またレベル数値は標高値を示している。
6. 本遺跡の遺跡コードはLG24-0020であり、遺跡略号はWTⅡとした。
7. 土層の観察、表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著 1990年度版）を使用した。
8. 遺構の面積は、プランメーターを用いて1/10、1/20の原図で測定した。
9. この発掘調査によって出土した遺物及び調査記録資料は、宮古市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺物の表示は、次のとおりとした。



胎土に繊維を含む土器



磨 面

目次

序

例言・凡例

目次

I 概説編	1
II 本編	5
1 序章	〃
(1) 調査に至る経過	〃
(2) 調査の経過と概要	〃
(3) 調査体制	6
2 立地と周辺の調査	7
(1) 遺跡の位置と立地	〃
(2) 周辺の遺跡	10
(3) 第1次～第5次調査	12
3 調査内容	15
(1) 調査地区	〃
(2) 基本層序	〃
(3) 第4号竪穴住居跡	21
(4) 第5号竪穴住居跡	29
(5) 第6号竪穴住居跡	56
(6) 土坑	69
(7) 遺構外の遺物	70
4 まとめ	73
参考文献・報告書	75
報告書抄録	76

挿図・写真・表 目次

挿図目次

Fig. 1	遺跡位置図(1:50,000)	7
Fig. 2	地形分類と遺跡分布図(1:50,000)	8
Fig. 3	周辺遺跡分布図(1:15,000)	10
Fig. 4	調査地区と周辺地形図(1:5,000)	12
Fig. 5	第1次～第6次調査区全体図(1:400)	13
Fig. 6	基本土層模式図	15
Fig. 7	第6次調査地区全体図、土層断面図	17
Fig. 8	第5次・第6次調査区土層断面図	19
Fig. 9	第4号竪穴住居跡(JH04)平面図、土層断面図	22
Fig.10	第4号竪穴住居 炉跡平面図、土層断面図	25
Fig.11	第4号竪穴住居跡 床面出土土器	26
Fig.12	第4号竪穴住居跡 出土遺物	27
Fig.13	第5号竪穴住居跡(JH05)平面図	29
Fig.14	JH05埋土層位関係図	30
Fig.15	JH05 A1～A5, F1層平面分布図(1:100)	30
Fig.16	JH05 A層遺物・礫出土状況(1:100)	30
Fig.17	第5号竪穴住居跡 土層断面図	30
Fig.18	第5号竪穴住居跡 土層断面図	32
Fig.19	第5号竪穴住居跡 柱穴P1,P2土層断面図	32
Fig.20	第5号竪穴住居跡 柱穴P3～P9土層断面図	34
Fig.21	第5号竪穴住居跡 炉跡平面図、土層断面図	38
Fig.22	JH05炉跡構築面、旧炉跡平面図、土層断面図	39
Fig.23	JH05-A平面図	40
Fig.24	JH05-B平面図	41
Fig.25	第5号竪穴住居跡 出土遺物	45
Fig.26	第5号竪穴住居跡 出土遺物	46
Fig.27	第5号竪穴住居跡 出土遺物	48
Fig.28	第5号竪穴住居跡 出土遺物	49
Fig.29	第5号竪穴住居跡 出土遺物	50
Fig.30	第6号竪穴住居跡(JH06)平面図	56
Fig.31	第6号竪穴住居跡 埋土、柱穴土層断面図	57
Fig.32	第6号竪穴住居跡 柱穴土層断面図	58
Fig.33	第6号住居跡 炉跡平面図、土層断面図	59
Fig.34	JH06-A I 平面図	61
Fig.35	JH06-A II 平面図	61
Fig.36	H06-B平面図	61
Fig.37	第6号竪穴住居跡 出土遺物	66
Fig.38	第6号竪穴住居跡 出土遺物	67
Fig.39	第7号・8号土坑 平面図、土層断面図	69
Fig.40	第7号土坑出土土器	70
Fig.41	遺構外出土遺物	71
Fig.42	遺構外(VI層上半)出土遺物	72
Fig.43	竪穴住居跡の変遷図	74
Fig.44	第5号竪穴住居跡 埋土A層出土遺物	75

写真目次

Photo. 1	遺跡遠景航空写真(南→)	内表紙
Photo. 2	発掘調査の様子(北西から)	1
Photo. 3	表土を取り除いた状態(南から)	2
Photo. 4	発掘された竪穴住居跡(南から)	2
Photo. 5	第4号竪穴住居跡(南から)	2
Photo. 6	第5号竪穴住居跡(南西から)	3
Photo. 7	炉跡[複式炉](東から)	3
Photo. 8	第6号竪穴住居跡(西から)	3
Photo. 9	炉跡[複式炉](北西から)	3
Photo.10	遺跡から出土した土器	4
Photo.11	遺跡から出土した石器	4
Photo.12	遺跡周辺垂直写真 1979年撮影	9
Photo.13	崎山地区航空写真 1985年撮影(南西→)	9
Photo.14	調査地区周辺航空写真(南南東→)	9
Photo.15	第1次調査地区(1988年)(東→)	14
Photo.16	第2次調査地区第1号竪穴住居跡(南→)	14
Photo.17	第5次調査地区第3号竪穴住居跡(南→)	14
Photo.18	第1次～第6次調査地区 1985年撮影(南→)	18
Photo.19	第6次調査地区 調査前の状況(西→)	18
Photo.20	基本土層堆積状況(南東→)	18
Photo.21	第4号竪穴住居跡(JH04)(南→)	23
Photo.22	JH04検出状況(南→)	23
Photo.23	JH04埋土断面(南西→)	23
Photo.24	JH04床面遺物出土状況(南→)	23
Photo.25	JH04柱穴P2埋土断面(南→)	23

Photo.26	JH04炉跡検出状況(南→)	25
Photo.27	JH04炉跡埋土断面(南西→)	25
Photo.28	JH04炉跡(南西→)	25
Photo.29	JH04炉構築面(南→)	25
Photo.30	第4号竪穴住居跡(JH04)出土遺物	28
Photo.31	第5号竪穴住居跡(JH05)(東→)	31
Photo.32	JH05検出状況(北西→)	31
Photo.33	JH05埋土A層遺物出土状況(西南西→)	31
Photo.34	JH05埋土断面(西南西→)	31
Photo.35	JH05埋土断面(南西→)	31
Photo.36	JH05 P4, 壁下溝A, B(南→)	36
Photo.37	JH05 壁下溝埋土断面(南→)	36
Photo.38	JH05 P1埋土断面(南→)	36
Photo.39	JH05 P2B埋土断面(北西→)	36
Photo.40	JH05 P2B埋土断面(北西→)	37
Photo.41	JH05 P3A埋土断面(南→)	37
Photo.42	JH05 P4完掘状況(西→)	37
Photo.43	JH05 P4埋土断面(南→)	37
Photo.44	JH05 P5埋土断面(南→)	37
Photo.45	JH05 P6, P7埋土断面(南→)	37
Photo.46	JH05 P8埋土断面(南→)	37
Photo.47	JH05 P9埋土断面(南西→)	37
Photo.48	JH05複式炉(南東→)	42
Photo.49	JH05複式炉(西→)	42
Photo.50	JH05複式炉(北→)	42
Photo.51	JH05複式炉C区画埋土断面(南西→)	42
Photo.52	JH05複式炉C区画E層(北西→)	42
Photo.53	JH05複式炉埋土断面(Sec.B-B')(南東→)	43
Photo.54	JH05複式炉埋土断面(Sec.A-A')(西→)	43
Photo.55	JH05複式炉O区画焼土F(南→)	43
Photo.56	JH05複式炉 炉石立面(南→)	43
Photo.57	JH05複式炉焼土Kf層(北西→)	43
Photo.58	JH05複式炉構築面(南→)	43
Photo.59	JH05複式炉旧炉構築面(南→)	43
Photo.60	JH05複式炉旧炉埋土M1,M2,Mf層(南西→)	43
Photo.61	JH05出土遺物	51
Photo.62	JH05出土遺物	52
Photo.63	JH05 B, A5層出土遺物	53
Photo.64	JH05 A4層出土遺物	54
Photo.65	JH05 A2, A1層出土遺物	55
Photo.66	第6号竪穴住居跡(JH06)(南→)	62
Photo.67	JH06複式炉(南→)	63
Photo.68	JH06埋設土器(南→)	63
Photo.69	JH06炉跡埋土断面(南西→)	63
Photo.70	JH06埋土b層土器出土状況(西→)	63
Photo.71	JH06炉構築面(南→)	63
Photo.72	JH06焼土N(南→)	64
Photo.73	JH06 P1(南→)	64
Photo.74	JH06 P2(西→)	64
Photo.75	JH06 P3(南→)	64
Photo.76	JH06 P4(南→)	64
Photo.77	JH06 P5(南西→)	64
Photo.78	JH06 P6(南西→)	64
Photo.79	JH06 P7(南→)	64
Photo.80	JH06 P8(南→)	65
Photo.81	JH06 P9(南→)	65
Photo.82	JH06 P10(南→)	65
Photo.83	JH06 P11(西→)	65
Photo.84	JH06 P12(北→)	65
Photo.85	JH06 P13(南→)	65
Photo.86	JH06 P14(南→)	65
Photo.87	JH06 P15(南→)	65
Photo.88	JH06出土遺物	68
Photo.89	南東部トレンチ第7, 8号土坑(南西→)	70
Photo.90	第7号土坑(北西→)	70
Photo.91	第7号土坑出土土器	70
Photo.92	遺構外(VI層上半)出土遺物	72

表目次

Tab. 1	第1次～第5次調査結果一覧表	12
Tab. 2	第1次～第6次調査基本土層対応表	20

I 概説編

はじめに

早稲栃Ⅱ遺跡^{わせとちⅡ}の発掘調査は、遺跡内で住宅が建てられることになったため、工事に先立って緊急に行われたものです。住宅が建つ部分が工事によって失われてしまうため、そこにどのようなものが残されていたかを調査し、内容を確認して記録することが行われました。

この報告書は発掘調査の結果をまとめたもので、「概説編」では調査のあらましなどについて解説しています。また「本編」では、調査で出土した遺物や検出された住居跡などの遺構について、さらに詳しく報告しています。

(1) 調査のあらまし

発掘が行われた場所は、崎^{さきくわ}ヶ崎^{さき}の慈苑老人ホーム^{じえん}の西約100m、国道45号線から北西に500mほど入ったところです。(→10ページ)

南向きの緩やかな斜面で、近くには沢が流れ最近まで畑として使われていました。この畑には縄文時代の土器や石器などが見られ、以前からここが遺跡であることが知られていました。

早稲栃Ⅱ遺跡では、昭和63年の第1次調査から平成6年までに5ヶ所で発掘調査が行われてきました。いずれも住宅の建築などに伴う事前調査ですが、これまでの調査によって今から

4,500～4,000年ほど前(縄文時代中期の後半)の^{たてあな}竪穴住居跡や炉の跡などが発掘され、^{しゅうらく}集落遺跡であることがわかってきました。今回の調査は早稲栃Ⅱ遺跡の第6次調査となり、これまでの調査地区の北側に続く部分、遺跡のほぼ中央部で調査が行なわれました。(→12ページ)

調査の結果、3棟の竪穴住居跡が発掘されました。この住居跡は、出土した土器から縄文時代中期の終わり頃のものであることがわかりました。(→73ページ) 縄文時代の土器は、時期によって文様の表し方やデザインなどが変化し、それぞれの時期で特徴のある土器が作られました。そのため、土器を見るといつ頃のものかわかるのです。今回の調査では、さらに古い時期の縄文時代前期の土器も発掘されています。(→72ページ)

発掘された3棟の住居跡は、同時に建っていたものではなく、古い住居が埋まった所に新たに建てられたり、同じ住居でも建て替えが行なわれていました。つまり、当時の人々は長い間この場所で生活を続けていたことになり、ここが居住に適した暮らしやすい場所だったことを物語っています。



発掘調査の様子(北西から) Photo.2

(2) 調査の経過

調査ではまず始めに、発掘する範囲を決めて表土(畑の耕作土)を取り除きます。そして少しずつ土を掘り下げながら、土の色や硬さの変化を観察していきます。

右の写真は、表土を取り除いた状態です。あまりはっきりとはしませんが、土の色が変わっている部分が見え始めています。写真の奥の方(北側)では黒い土と褐色の土が見られ、その境は丸い形になっていることがわかりました。褐色土の部分には、土器や石がたくさん入っており、石がまとまって出ている所もありました。



表土を取り除いた状態(南から) Photo. 3

発掘調査を進めて行くと、縄文時代の人々が残した土器や石器(遺物)、竪穴住居跡などの遺構が埋もれていたことがわかってきました。

調査では、遺物が出た状態や土の変化を記録しながら、少しずつ土を掘下げていきます。

右の写真は、竪穴住居跡に埋もれていた土が取り除かれた状態で、約4,000年の時を経て、今再びその姿を現した縄文時代の住居跡です。



発掘された^{たてあな}竪穴住居跡(南から) Photo. 4

上の写真で、褐色の土が丸く広がっていた所に竪穴住居があり、石がまとまって出た部分には炉(囲炉裏)が見つかりました。炉は3ヶ所見られ、住居跡の床にはいくつもの柱を立てた穴があります。調査された竪穴住居跡は3棟で、写真手前(南側)の炉跡の近くに、もう1棟の住居跡(第4号竪穴住居跡)がありました。南側の住居跡(第6号竪穴住居跡)が使われなくなり、埋まってしまったところに、また新しい住居が作られ、重複した状態となっていました。(→17ページ)

(3) 竪穴住居跡

・第4号竪穴住居跡 この住居跡は、直径4mほどの円形の竪穴住居跡で、調査された住居跡の中で最も小さなものです。床の面積は約10㎡(3坪)で、6畳間ほどの広さがあります。

炉は石で囲まれ、住居跡の南端にあります。炉の中は石で仕切られており、中に焼け土がありました。炉の位置や作り方はこの時期だけに見られる特徴的なものです。(→21ページ)



第4号竪穴住居跡(南から) Photo. 5

・第5号竪穴住居跡

この住居跡は、直径7mを越す円形の住居跡で、この遺跡では最も大きなものです。

住居跡の床面には、大きな穴が見えますが、これは柱を立てるために掘られた穴で、東西にほぼ対称の位置に配置されています。(→29ページ)



第5号竪穴住居跡(南西から)

Photo. 6

炉は幅1.7mもある大きなもので、炉の中には仕切りの石があります。このような炉を^{ふくしきろ}複式炉と呼んでおり、石で仕切られた炉と前庭部といわれる部分からできています。この炉では前庭部は^{ぜんていぶ}失われていますが、この部分を含めれば長さ2.5mほどの炉になると推定されます。(→38ページ)



炉跡[複式炉](東から) Photo. 7

・第6号竪穴住居跡

東西幅6.4mの楕円形の住居跡で、南側に複式炉が作られています。

床面には、15ヶ所もの柱穴があり、炉のほかに焼け土も二ヶ所見られました。この住居跡では、建て替えが3回行なわれており、そのために柱穴が多く残されたのです。(→56ページ)



第6号竪穴住居跡(西から)

Photo. 8

この住居跡の複式炉は、長さ2m、幅1.4mの大きさで、石によって三区画に仕切られています。南側が前庭部で、焼土は中央の区画にありました。また、炉の北には土器の破片が円形に埋め込まれていました。(→59ページ)



炉跡[複式炉](北西から) Photo. 9

これら3棟の住居跡は、互いに一部で重なった位置にあり、各々異なる時期に建てられたものです。

(4) 出土した遺物

この調査では、縄文時代の早期の末、前期の初め頃、そして中期の後半の遺物が出土しました。最も多いのは中期の終わり頃の土器で、住居跡の埋土や床面から出たものです。

土器に描かれた文様は、時期によって変化するため様々なデザインのものがあり、形や大きさも用途に応じて色々なものがあります。

石器では、木の実などの硬い物を磨り潰すために使われた道具が多く見られます。これは「磨石」と呼ばれる石器で、浜石のような楕円形の石を加工したもので、平らに磨り減った部分があります。また、「擦切磨製石斧」^{すりきりませいせきふ}という大きな石斧も出土しました。



出土した土器

Photo.10



出土した石器

Photo.11

Ⅱ 本 編

1 序 章

(1) 調査に至る経過

この調査は個人住宅の建築工事に伴い、宮古市大字崎楯ヶ崎第7地割字^{おにごえ}鬼越地内において実施された事前調査である。住宅建築の計画については、農地法第5条の許可申請に対する関係課の意見聴取に際して、その施工範囲等を知ることとなったもので、工事予定地は埋蔵文化財包蔵地「早稲栃Ⅱ遺跡」の範囲内に位置していた。この遺跡では昭和63年から5次にわたる事前調査が行われており、特に平成6年に行われた隣接地の調査では、縄文時代の竪穴住居跡・土坑などが検出されていた。

宮古市教育委員会では工事予定地が埋蔵文化財包蔵地であり、これまでの調査で竪穴住居跡などの遺構が確認されていることを工事主体者に伝え、その取扱いについて事前協議を行った。その結果、住宅建築範囲及び擁壁設置部分について事前調査を実施する必要があると判断され、工事主体者は埋蔵文化財包蔵地「早稲栃Ⅱ遺跡」に係る土木工事について、文化財保護法第57条の2の規定による届出書を提出し、これに対し岩手県教育委員会からは「工事着手前に発掘調査を実施すること」の旨、指導が通知された。

調査の実施にあたり、期日・調査費等について検討することとなり、内部協議及び県教育委員会との協議の結果、平成9年度の市内遺跡発掘調査事業としてこれを実施することとなった。

(2) 調査の経過と概要

発掘調査は、214㎡の敷地のうち住宅及び擁壁設置部分の135㎡を対象とし、平成9年(1997)4月7日から開始された。周辺は最近まで畑地として利用されており、対象地区の南半にはかつてビニールハウスが設置されていた。また調査区の中央には落差60cmほどの段差があり、緩斜面を平坦化して数段の畑として耕作が行われており、これによって旧地形の一部が改変されている状況が見られた。

調査作業は、調査区の設定、着手前の状況記録、標高・座標杭の設置から始められ、表土除去作業へと進められた。表土中にも遺物が含まれており、特に調査区北側の上段部分からは縄文中期後半の土器など比較的多くの遺物が出土した。調査区北端では表土厚は10cmほどであったが、中央の段差部分では最大40cmほどの盛土が見られた。

表土、盛土を除去し遺構検出を行ったところ、北側の上段部分では表土直下から土器・礫の分布が見られた。さらにこれを取り囲んで住居跡と考えられる弧状の土色の変化が確認され、段差の肩には石組みの一部が検出された。また南半の下段部分では、不明瞭ながらほぼ円形の黒褐色土の落ち込みが検出され、南西部では火山灰を混ざる土層が見られた。この他に、段差にほぼ直交する溝状の土色変化が明瞭に識別され、また南東部の擁壁部分のトレンチでは礫を混ざる土層が見られた。

平面での土層変化をさらに詳細に観察するとともに、明瞭に検出された溝状の落ち込み部分の精査を開始したところ、これは南から東に屈曲して段差に沿って伸びるL字状の溝となり、底面は基盤土に達しており、パワーショベルの爪の跡と柱穴状のピットが見られた。ピットの埋土にはビニールなどが含まれており、これらはビニールハウスの設置に伴う攪乱であることが確認された。

耕作等による攪乱はある程度予想されていたが、基盤土に至るほどの掘削が行われていることは予期しておらず、この攪乱によって住居跡の一部と炉の南端が失われていることがわかった。また、調

査区南半でもビニールハウス設置に伴うピット状の攪乱坑が点在することが確認されていった。

攪乱坑の確認とともに、調査区南半で検出されたほぼ円形の黒褐色土の落ち込みの精査を始めた。埋土を取り除くと炉跡、床面、壁が検出され、直径3.9mほどの竪穴住居跡であることが確認された。この遺構の名称は、第5次調査の遺構番号を継承して第4号竪穴住居跡とした。

第4号竪穴住居跡の精査と併せて、調査区北半部で見られた土器や礫の出土状況及び堆積土層の平面分布の記録を行い、この部分の遺構精査を始めた。その結果、遺構は直径7m前後の竪穴住居跡であることが確認され、これを第5号竪穴住居跡とした。検出面で見られた土器・礫は竪穴の埋土中に廃棄された遺物であり、石組は複式炉となった。柱穴には二時期の重複が認められ、柱穴配置も整然とした住居跡であったが、その南端部は攪乱により失われており、北端部は調査区外となっていたため、全容を把握するには至らなかった。

第4号竪穴住居跡では、炉跡の構築状況の確認、床面下と竪穴周辺の精査を行ったところ、下位の面から新たに炉跡、柱穴が検出され、第4号住居跡と重複する別の竪穴住居跡が存在することが明らかになってきた。暗褐色土中の遺構であるため平面での埋土の識別に難渋し、壁の確認は北東部と西壁の一部のみに止まったが、複式炉を伴う住居跡となることが確認され、これを第6号竪穴住居跡とした。この遺構では柱穴配置が複雑で一部の柱穴で重複が見られたため、遺構構成の検討については整理作業での課題となった。

調査区南東部のトレンチでは、第5次調査で一部調査区外となっていた第7号、第8号土坑が精査され、これらの土坑の全体規模・形状が確認された。

その後、各遺構の床面構築状況の確認と遺構下の堆積土層の記録などを行い、6月30日に調査を完了した。この第6次調査では竪穴住居跡3棟、土坑2基などが精査され、早稲枋Ⅱ遺跡が縄文時代中期末葉の集落遺跡であることが改めて確認される結果となった。

(3) 調査体制(平成9年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	浦野光廣	宮古市教育委員会社会教育課長	
事務担当	田鎖春雄	〃	社会教育課社会教育係長
	野崎政博	〃	社会教育課社会教育主事
調査員	竹下将男	〃	社会教育課主任(発掘調査、報告書担当)
	高橋憲太郎	〃	社会教育課主任
	鎌田祐二	〃	社会教育課主任
	加納由美	〃	社会教育課主事
	阿部 豊	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員
	工藤剛司	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員
発掘調査作業員	伊藤安文	工藤イネ	佐伯裕則 館崎登 中嶋正裕 福士祐二 古館友三 吉田昭
資料整理作業員	中嶋正裕	平山早予子	福士祐二 前川友宏

なお、発掘調査にあたり建築施主の中里哲雄様、旧地権者の小林門太様からご協力を賜りました。記して心より謝意を表します。

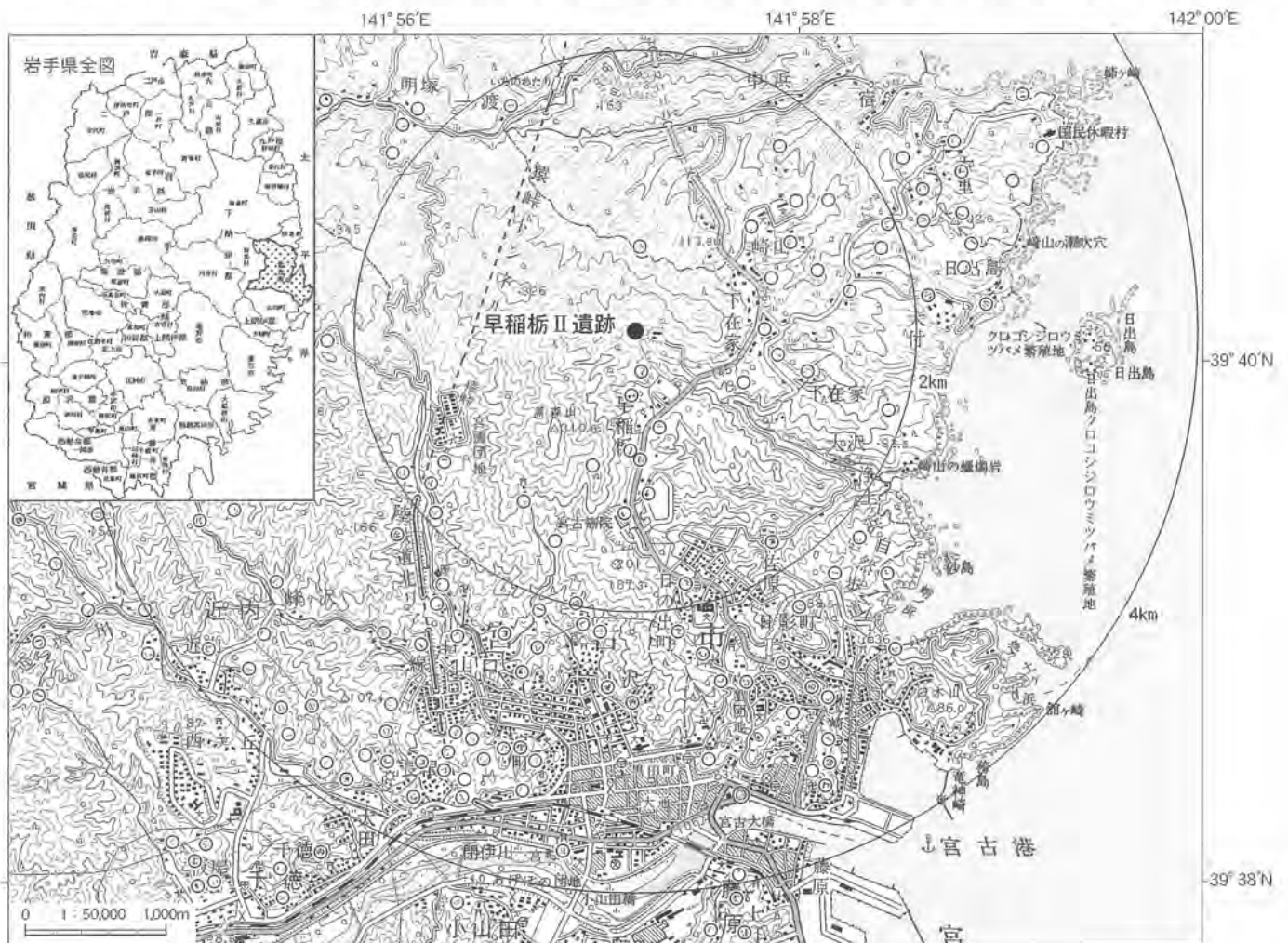
2 立地と周辺の遺跡

(1) 遺跡の位置と立地

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、中心市街地は閉伊川の河口部に形成されている。市域の総面積は339km²であり、南北・東西それぞれ約20kmの不整四角形を成し、東部には宮古湾が深く入り込み、重茂半島が太平洋に張り出している。市の東西は、本州の最東端である鮎ヶ崎(東経142°04′)から南西部の長沢牧場(東経141°45′)に至り、西に新里村と境を接する。南北は南の山田町に続く川代地区(北緯39°29′)から、北部の亀ヶ森(北緯39°43′)に至る範囲で、田老町、岩泉町と隣接する。

市内の地形は多くの部分が丘陵・山地で占められ、平野と低地は北上山地から東流する閉伊川の流域と山田町から北流する津軽石川の流域、及びこれらの支流域に僅かに見られるのみである。宮古湾から津軽石川に至る津軽石断層を境として、東部には十二神山(731m)を最高位とする重茂半島の山地帯がある。またその西部は、北上山地から続く丘陵・山地となっており、これらが閉伊川によって南北に分断されている。山地帯の縁辺に形成された丘陵地は、小河川により樹枝状に開析され、その末端は尾根状を呈する。これらの丘陵縁辺や山麓緩斜面には多くの遺跡が分布しており、市域では469箇所¹⁾の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

早稲橋Ⅱ遺跡(LG24-0024)は、宮古市北部の崎^{さき}嶽^{がき}ヶ崎地区に所在し、市街地から国道45号線を4kmほど北上し国道から分岐して北西に500mほど入った山間地に位置している。遺跡は通称メクスレ沢の最



遺構位置図 (1 : 50,000)

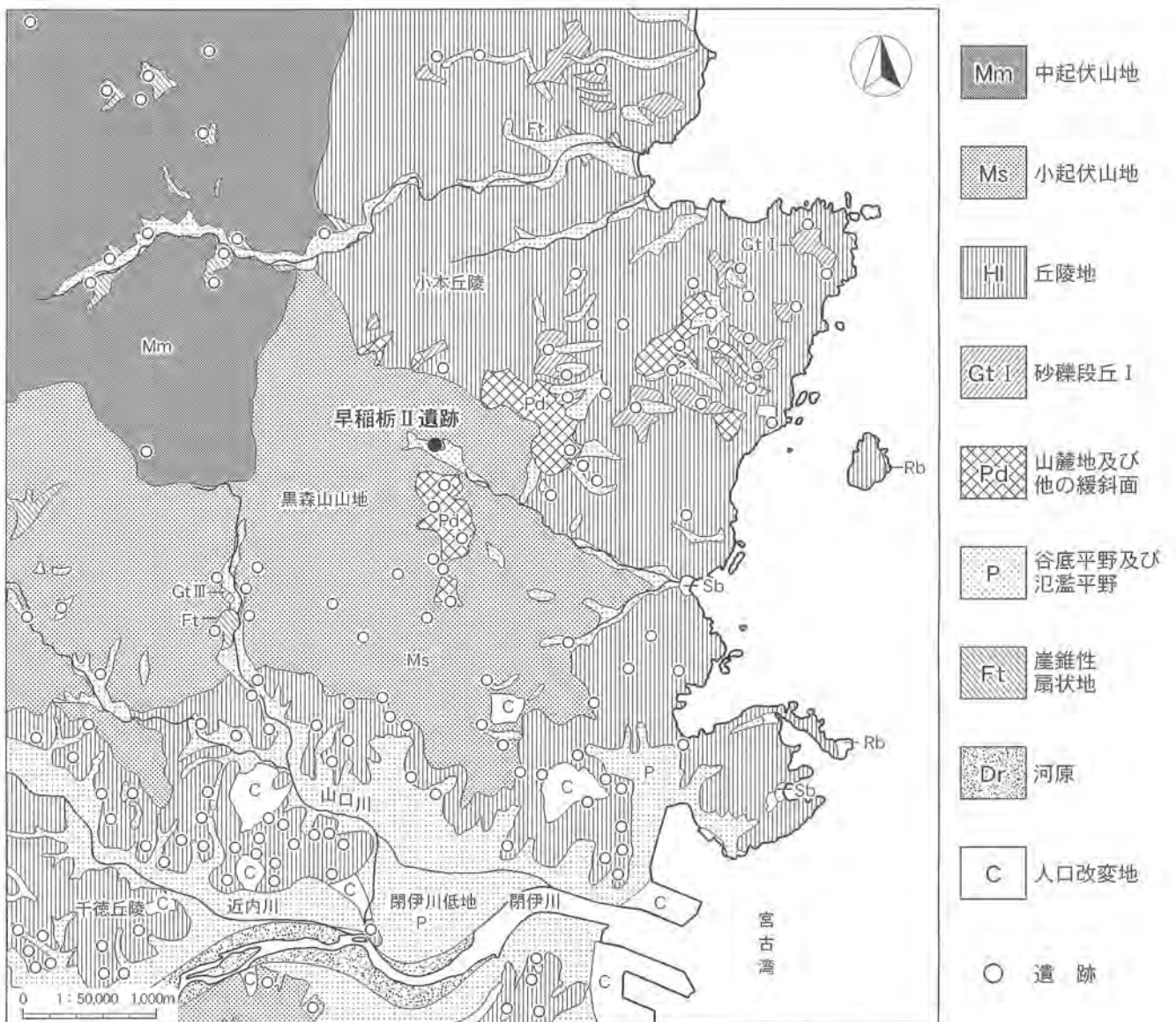
Fig. 1

上流部にあり、この沢を下ると約2kmで大沢海岸に至る。

早稲栃Ⅱ遺跡は北上山地東縁の黒森山山地の南東部に位置し、地形分類では小起伏山地中の谷底平野に立地する。黒森山山地の南は千徳丘陵を経て閉伊川低地に至り、その東は小本丘陵を介して太平洋に至る。小本丘陵と丘陵上の山麓緩斜面、砂礫段丘には、崎山地区の諸遺跡が濃密に分布しており、本遺跡の南に見られる山麓緩斜面にも早稲栃糠森遺跡、早稲栃Ⅲ、Ⅳ遺跡が存在する。

遺跡の南西には標高310mの黒森山、北東には標高248mの館ヶ森があり、これらの山陵間を流下するメクサレ沢によって山地・丘陵が開析され、谷底平野が形成されている。この沢は黒森山の北麓に源を発し、やや東流して遺跡付近で南東方向に流路を変え、ここからほぼ一直線に大沢の浜に流れ込んでいる。

本遺跡はこの沢の北側の南東向き緩斜面に広がっており、標高は120~140m、その傾斜度は4°から6°ほどで、遺跡の範囲は約100×230mとなっている。遺跡西方の沢の源流部にも緩斜面が見られるが、傾斜度はやや急でその広がりも狭小である。一方、遺跡南東の沢沿いは開田されており、沢との比高は本遺跡よりも小さいが、同様な谷底平野の緩斜面が続いていたものと見られる。



GtⅢ 砂礫段丘Ⅲ Sb 浜 Rb 磯

地形分類と遺跡分布図 (1:50,000)

Fig. 1



遺跡周辺垂直写真
1979年撮影
photo.12



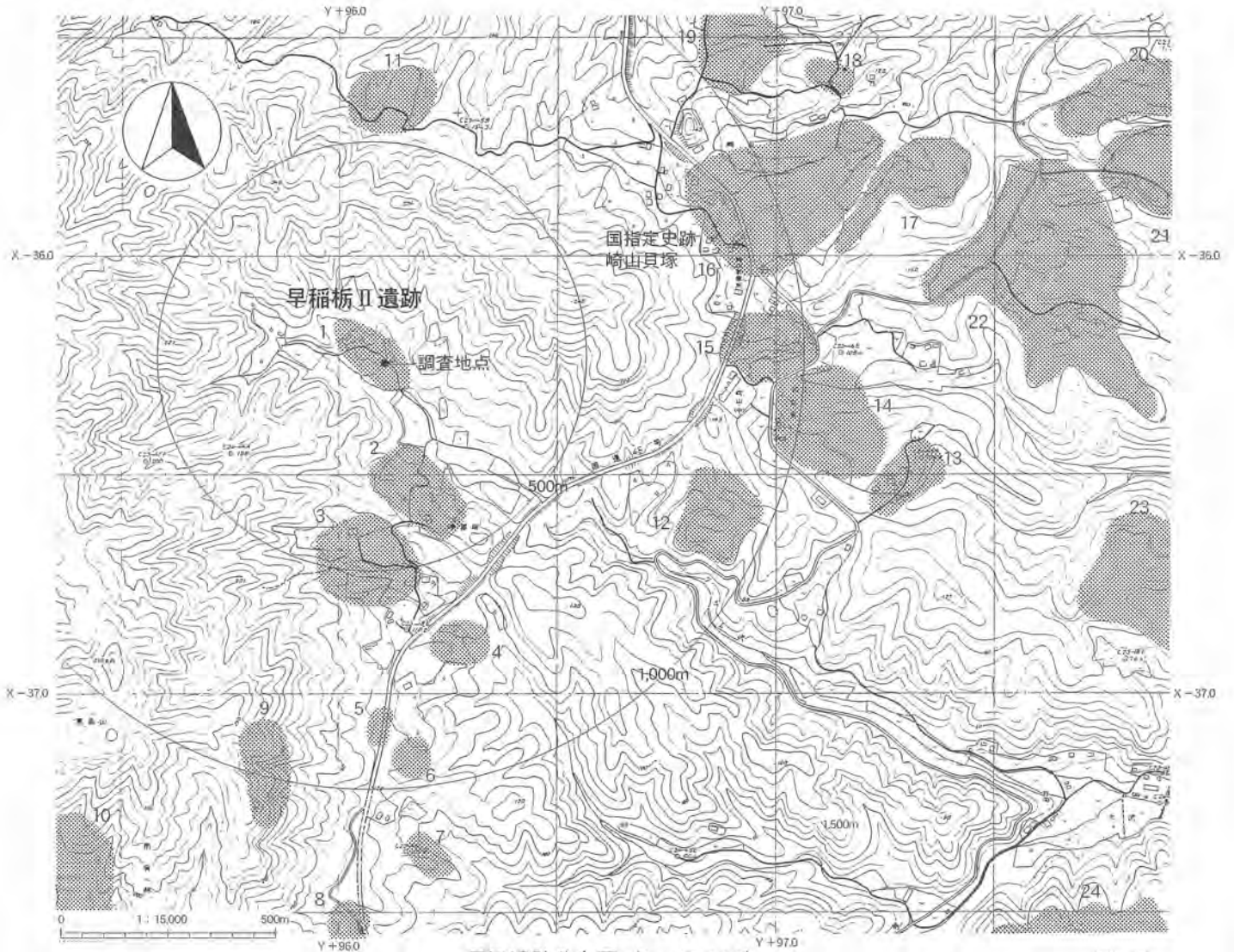
崎山地区航空写真
1985年撮影
(南西→)
photo.13



調査地区周辺航空写真
(南南東→)
photo.14

(2) 周辺の遺跡

本遺跡の西方を除く周辺地域には、崎山・崎嶽ヶ崎地区の諸遺跡が所在し、これらの遺跡は主に丘陵地、山麓緩斜面、砂礫段丘に立地している。本遺跡から半径500m圏内には、早稲栃糠森遺跡・早稲栃Ⅲ遺跡があり、メクサレ沢を隔てて南に広がる緩斜面に位置する。早稲栃糠森遺跡では縄文時代前期末、中期後半の土器が濃密に分布しており、南東向きの緩斜面に集落が存在する可能性が考えられる。この遺跡の南に隣接する緩斜面及び尾根上には早稲栃Ⅲ遺跡があり、尾根上部分では発掘調査により縄文時代前期、中期後半、平安時代の竪穴住居跡などが確認されている。



周辺遺跡分布図 (1 : 15,000)

Fig. 3

番号	遺跡名	遺跡コード	時代	番号	遺跡名	遺跡コード	時代
1	早稲栃Ⅱ (わせとち2)	LG24-0020	縄文(前, 中期)	13	塚場(つかば)	LG24-0142	縄文(後期)
2	早稲栃糠森 (わせとちぬかもり)	LG24-0040	縄文(前, 中期)	14	下在家Ⅱ (しもざいけ2)	LG24-0130	縄文
3	早稲栃Ⅲ (わせとち3)	LG23-0369	縄文(前, 中期)・平安	15	下在家Ⅰ (しもざいけ1)	LG24-0018	縄文(中期)・近世
4	早稲栃Ⅳ (わせとち4)	LG24-0081	縄文	16	崎山貝塚 (さきやまかいづか)	LG24-2079	縄文(前期～後期)
5	南沢Ⅰ (みなざわ1)	LG24-1000	縄文	17	千束長根 (せんぞくながね)	LG14-2183	縄文(前期～後期)
6	早稲栃Ⅴ (わせとち5)	LG24-1010	縄文	18	トロノ木Ⅱ (とろのき2)	LG14-2150	縄文(中期)
7	早稲栃Ⅵ (わせとち6)	LG24-1020	縄文(中期)	19	トロノ木Ⅰ (とろのき1)	LG14-2048	縄文(中期)・近世
8	寒風 (さむかぜ)	LG23-1349	縄文(晩期)・古代	20	萩沢Ⅱ (はぎざわⅡ)	LG14-2157	縄文(前, 中期)・古代
9	黒森 (くろもり)	LG23-1326	古代	21	大付 (おおづ)	LG14-2291	縄文(前期～晩期)
10	黒森山 (くろもりさん)	LG23-1332	古代	22	白石 (しろいし)	LG14-2195	縄文(中, 後期)
11	長平 (ながひら)	LG14-2071	縄文(中期)	23	長磯 (ながいそ)	LG24-0177	縄文(前, 中期)
12	大石 (おおいし)	LG24-0057	縄文	24	平松Ⅰ (ひらまつⅠ)	LG24-1166	縄文(前, 中期)

本遺跡から半径500m～1,000m圏内には、南に早稲栃Ⅳ・Ⅴ遺跡、南沢Ⅰ遺跡、東に大石遺跡、下在家Ⅰ遺跡、長平遺跡、崎山貝塚(国指定史跡)の縄文時代の遺跡が所在する。この中でも崎山貝塚は、縄文時代前期初頭から後期前葉の遺構、遺物が確認されており、崎山・崎嶺ヶ崎地区における縄文時代の拠点集落のひとつと考えられる遺跡である。南北斜面の貝塚では、多くの動物遺存体・骨角器・土器などが出土しており、台地上には中期中葉(大木8b式期)に中央広場・環状溝を伴う特徴的な集落構造が形成されている。

さらに1,000m～1,500m圏内には、南に早稲栃Ⅵ遺跡、寒風遺跡、東方には塚場、下在家Ⅱ、千東長根、トロノ木Ⅰ・Ⅱ遺跡が分布し、縄文時代前期から晩期の遺物が見られる。早稲栃Ⅵ遺跡では、縄文時代中期中葉(大木8b式期)の竪穴住居跡1棟、時期不明の粘土採掘坑、伏焼炭窯跡などが確認されている。また、寒風遺跡では古代の竪穴住居跡が検出されており、縄文時代晩期の土器も出土している。これらの遺跡ではいずれも尾根上から住居跡が検出されている。下在家Ⅱ遺跡では、時期は特定されていないが、土坑の埋土からムラサキインコガイを主体とする混貝土層が検出され、この混貝土層からは鉄製釣針が出土している。トロノ木Ⅰ遺跡では、縄文時代中期中葉(大木8b式期)の複式炉を伴う竪穴住居跡が3棟、近世の建物跡・井戸跡、時期不明の伏焼炭窯跡が各1基調査されている。

本遺跡から1,500m以上隔てた地域には、萩沢Ⅱ、大付、白石、長磯、平松遺跡などが所在する。萩沢Ⅱ遺跡では製鉄炉1基と伏焼炭窯跡3基、大付遺跡では縄文時代中期中葉(大木8b～9式期)の竪穴住居跡2棟、晩期の屈葬人骨1体、弥生時代の竪穴住居跡1棟などの遺構が検出されている。白石遺跡では6次にわたる調査が行われ、縄文時代中期末葉(大木10式期)から後期前葉にかけての集落遺跡であることが確認されている。これまでに竪穴住居跡26棟、土坑77基などが調査されており、住居跡は遺跡のほぼ中央の第2次～5次調査区に集中し、環状ないし馬蹄形の集落が想定されている。

このように本遺跡の周辺には多くの遺跡が分布しているが、これらの中で本遺跡と近接した時期の遺構が調査されている遺跡は以下のとおりである。近隣遺跡から順に掲げると、本遺跡の南500mほどの地点にある早稲栃Ⅲ遺跡、東北東約1kmに崎山貝塚、南に約1.2kmの早稲栃Ⅵ遺跡、北東約1.2kmにトロノ木Ⅰ遺跡、東に約1.5kmの白石遺跡、同じく東に約2kmには大付遺跡があり、これらの遺跡では縄文時代中期後半の大木8b～10式期の竪穴住居跡が確認されている。

〈参考報告書〉

岩手県企画開発室	1974『北上山系開発地域土地分類基本調査』		
宮古市	1980『宮古の自然』		
宮古市教育委員会	1979『大付遺跡』	宮古市埋蔵文化財調査報告書1	
"	1983『宮古市遺跡分布調査報告書1』	"	3
"	1985『宮古市遺跡分布調査報告書3』	"	6
"	1986『宮古市遺跡分布図-昭和60年度版-』	"	9
"	1987『寒風・早稲栃Ⅵ遺跡発掘調査報告書-』	"	12
"	1988『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群(堀合館)』	"	14
"	1988『崎山遺跡群Ⅱ-昭和62年度発掘調査概報-』	"	15
"	1989『トロノ木Ⅰ遺跡-第1次～第7次発掘調査報告書-』	"	17
"	1990『崎山遺跡群Ⅳ-平成元年度発掘調査概報-』	"	23
"	1991『崎山遺跡群Ⅴ-平成2年度発掘調査概報-』	"	26
"	1995『崎山貝塚-範囲確認調査報告書-』	"	44
"	1996『大付遺跡-平成5、6年度発掘調査報告書-』	"	48
"	1997『白石遺跡-第6次発掘調査報告書-』	"	50
"	1997『早稲栃Ⅲ遺跡現地説明会資料』		
"	2001『宮古の遺跡発掘史-20世紀のみやこ考古学-』第12回ふるさとの歴史展解説図録		

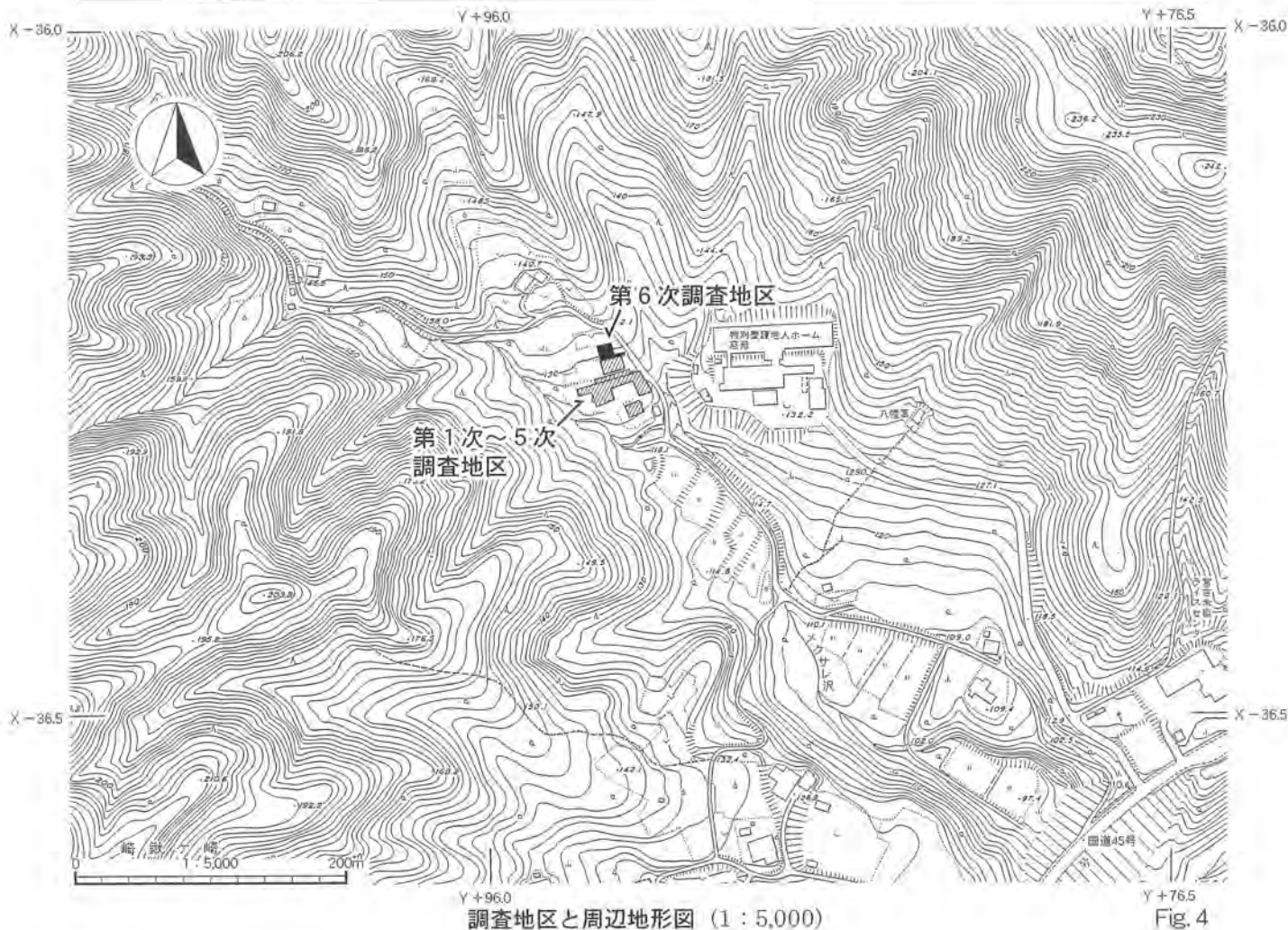
(3) 第1次～第5次調査

早稲枋Ⅱ遺跡では、昭和63年(1988)から平成6年(1994)にかけて5次にわたる調査が行われている。これらの調査は住宅建築・擁壁設置工事に伴う事前調査で、第6次調査区の南に隣接する地区で実施されている。第5次調査までの結果、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡、中期中葉の石囲炉、前期から中期の遺物包含層などが確認されている。

第1次～第5次調査結果一覧

Tab.1

調査回数	検出遺構	調査面積	調査年	調査地点	報告書
第1次調査	石囲炉2基(第2・3号炉：縄文中期) 遺物包含層(縄文前期、中期) 土坑1基(第1号土坑：縄文時代 性格不明)	250㎡	1988	崎嶽ヶ崎 第7地割 字鬼越 2番5	『早稲枋Ⅱ遺跡第1次・第2次発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書39 1992.3
第2次調査	住居跡1棟(第1号住居：縄文時代) 土坑2基(第2・3号土坑：縄文時代 性格不明) 馬埋葬土坑1基(共伴遺物なし)	100㎡	1991	"	"
第3次調査	竪穴状遺構1基(第2号竪穴状遺構 性格不明) 土坑1基(第4号土坑：縄文時代) 小ピット5基(P1～P5：共伴遺物なし)	112㎡	1992	2番10	『崎山遺跡群Ⅶー平成4年度発掘調査概報ー』 宮古市埋蔵文化財調査報告書40 1993.3
第4次調査	土坑2基(第5・6号土坑：時期性格不明) 遺物包含層(縄文前期、中期)	90㎡	1993	2番13	『崎山遺跡群Ⅷー平成5年度発掘調査概報ー』 宮古市埋蔵文化財調査報告書41 1994.3
第5次調査	住居跡1棟(第3号住居：縄文中期) 土坑4基(第7～10号土坑：縄文時代) 小ピット17基(P6～P22)、炉跡1基	133㎡	1994	"	『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰー早稲枋Ⅱ遺跡・崎山貝塚ー』 宮古市埋蔵文化財調査報告書47 1995.3
第1～5次	住居跡2棟 竪穴状遺構1基、土坑10基 石囲炉2基、炉跡1基、小ピット22基 縄文時代遺物包含層 馬埋葬土坑1基	685㎡		崎嶽ヶ崎 第7地割 2番5、 10、13	宮古市埋蔵文化財調査報告書39,40,41,47 1992～1995



第1次調査で検出された2基の石囲炉は、不整楕円形および円形を呈し、規模は直径1.3m、0.8mで、周辺の遺物から縄文時代中期(大木8b式期)に特定されている。第2次調査の第1号竪穴住居跡は、周溝・柱穴の一部と炉跡が検出されたもので、全体の規模・形状は不明である。住居跡に伴う炉跡は2.1×0.85mの長楕円形で、炉内には焼土2ヶ所と炉石の一部が確認されている。第3次調査では竪穴状遺構と報告される落ち込みが検出されているが、柱穴が見られず壁も極めて緩やかに傾斜しており、性格は不明である。

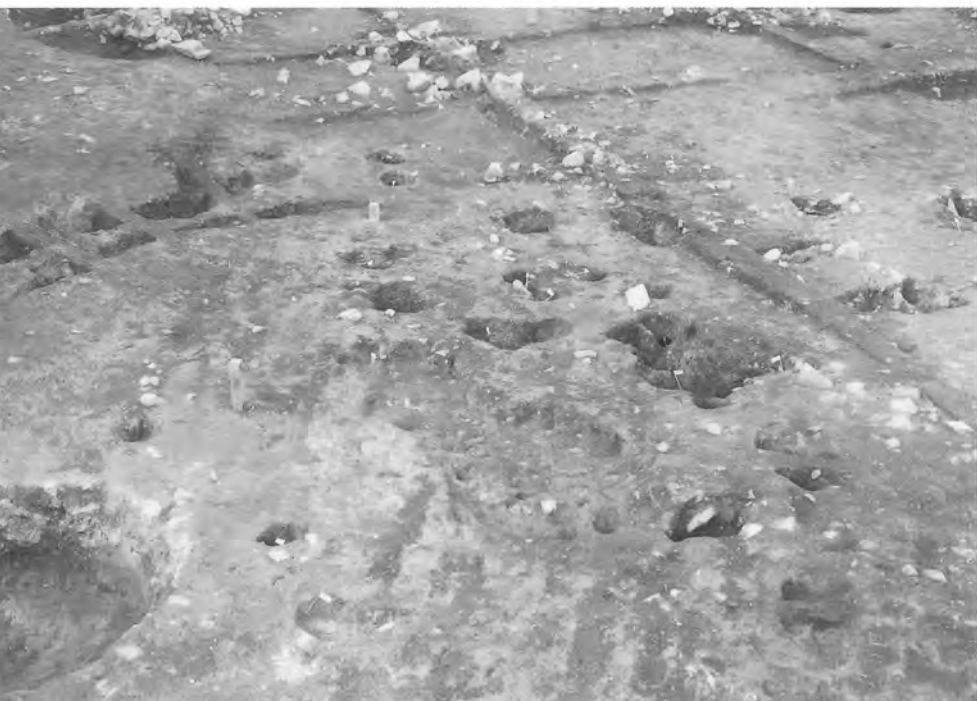
第4次調査では、縄文時代前期前葉及び中期後半(大木8b~10式期)の遺物包含層が確認されており、第1次調査の包含層と同様の時期の土器が出土している。第5次調査で検出された竪穴住居跡は一辺4.3mの隅丸方形の複式炉を伴う住居跡で、埋土最下層から中期末葉(大木10式期)の土器が出土している。複式炉は床面の南半中央に設けられ、長さは1.9m、巾1.2mで石囲炉二区画と石囲の前庭部から成る。また、第7号土坑では前期(大木2b式期)の土器が確認されている。



第1次～第6次調査区全体図 (1:400)



第1次調査地区(1988年)
(東→)
photo.15



第2次調査(1991年)
第1号竖穴住居跡
(南→)
photo.16



第5次調査(1994年)
第3号竖穴住居跡
(南→)
photo.17

3 調査内容

(1) 調査地区

調査地区は特別養護老人ホーム慈苑の西約100mに位置し、第5次調査地区の北側に隣接する畑地である。この畑地は日照条件の良い南東向きの緩斜面で、南西のメクサレ沢から北東の道路に至る東西約50mの中に広がり、かつては南側の第3次調査区付近までの南北約100mの範囲が畑として利用されていた。1988年の第1次調査以来、この畑地の南半部は宅地化が進み、現在は北半部のみが旧来の地形状況を保っている。調査地区は、旧来の畑地範囲の北東部に位置し、標高は129m前後で南西の沢との距離は約50m、比高は2mほどとなっている。

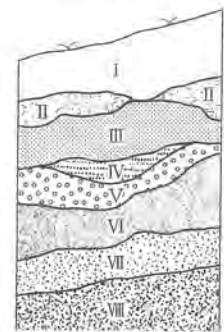
調査地区は10.5×11.6mのやや南北に長い矩形の範囲と、南東部に張り出した幅1.5m、長さ9mのトレンチから成る。なお、遺構検出面の標高は127.8～129.3mである。

(2) 基本層序

基本堆積土層の観察・記録は主に調査地区の西端断面で行った。層序・層名については、第5次調査までの結果を総合して検討し、各次調査の基本土層との相互関係を整理した。

I層 褐色砂壤土(10YR4/4SL)を基本土とし、暗褐色壤土(10YR3/4L)が粒状5%、黄褐色砂壤土(10YR5/6SL)が粉状に3%混入する。軟質で粘性・しまりともに弱く、粉粒状構造を呈する。層厚は10～30cmほどで、II層との層理面は調査区の北半部で細かな凹凸を成し、南半部の一部では下位層に至る掘り込みが見られ、縄文時代の土器などの遺物を含む。

最上位の表土層で、耕作により攪乱されており、層理面の凹凸は耕作痕と考えられる。なお、調査地区の南辺付近にはI層上に暗褐色砂壤土のM層が部分的に見られるが、これは第5次調査の排土の一部である。



基本土層模式図

Fig. 6

II層 暗褐色壤土(10YR3/3L)を基本土とし、黒褐色壤土(10YR2/3L)が3%粒状、黄褐色砂壤土(10YR5/6SL)が1%粉状に混入する。軟質で粘性・しまりともに弱く、粉粒状構造を呈する。III層との層理面には細かな凹凸と木根状の入り込みが見られる。層厚は最大20cmほどで、調査区の西側に断続的に堆積しており、ビニール、石灰が混入している。II層はその混入物から近來の耕作土と考えられ、I層形成前の耕作面を構成する土層である。

III層 黒褐色シルト質壤土(10YR2/3SiL)を基本土とし、褐色砂壤土(10YR4/4SL)が5%粉状に混入する。また白色、黄褐色、赤褐色の粗粒砂ないし細礫が3%ほど含まれている。やや軟質で粉状構造を呈し、層厚は最大で20cmほどあり縄文土器を含んでいる。下位層との層理面には顕著な凹凸は見られない。調査区の北東部及びトレンチの東半部を除く範囲に堆積しており、部分的に上位からの攪乱を受けているが、ほぼ当初の堆積状況を保っている土層と考えられ、遺構検出が可能となる層である。

IV層 暗褐色壤土(10YR3/4L)を基本土とし、黄褐色シルト質壤土(10YR5/6SiL)及び明黄褐色シルト質壤土(10YR6/8SiL)が粒状及び塊状に3～5%混入する。やや硬質で粒塊状構造を呈し、微量の木炭粉と縄文土器、礫が含まれる。この層の分布範囲は調査区の南縁付近に限られ、混入土のシルト質壤土は縄文時代前期の十和田中振火山灰とみられる。粒塊状の混入状況から、二次的な堆積層の可能性が考えられる。

V層 暗褐色シルト質壤土(10YR3/4SiL)を基本土とし、黒褐色シルト質壤土(10YR2/3SiL)が3%粉状に混

入する。やや硬質で粉状構造を呈し、2～10cmほどの亜角礫を多く含む。遺物の混入はなく、調査区南東のトレンチ東半に見られる。

- VI層 黒褐色シルト質壤土(10YR2/3SiL)を基本土とし、暗褐色砂壤土(10YR3/4SL)を3%粉状に混入している。やや硬質で粉状構造を呈し、白色、黄褐色の粗粒砂ないし細礫が7%ほど含まれている。層厚は10～20cmで、VII層との層理面にはやや大きな凹凸が見られ、微量の木炭粉と縄文土器がその上半部に含まれる。調査区西端の土層断面では、北半部でVI層上面に遺物が見られ、焼土混土(F層)の皿状の堆積が確認されている。
- VII層 褐色砂壤土(10YR4/4SL)を基本土とし、黄褐色砂壤土(10YR5/6SL)を2%粉状に混入する。硬質でしまりがあり、粉状構造を成す。層厚は20cmほどで遺物、礫は含まれない。下位の基盤土に至る漸移層である。
- VIII層 黄褐色砂壤土(10YR5/6SL)の純層で硬くしまりがあり礫を含む。基盤を成す土層で、調査区の北東部では表土直下に見られ、南西隅のテストピットでは地表から80cmの深さで確認されている。これらの標高差と土層断面の状況から基盤層の傾斜は南西ないし南向きに7°前後となる。

・基本土層の対応関係

第1次から第6次調査までの基本土層について、各次調査の報告からその相互関係を整理し、全体的な土層の堆積状況を検討した。第3次調査区を除く各調査区はほぼ連続しており、隣接する土層断面の対応と記載内容から層序・堆積範囲の把握を行った。なお、各次調査の基本土層は第1・2次がI～VIII層、3次はI・II層、4次はI～VI層、5次がI～VIII層に分層されている。

表土層のI層は、5次調査までのI層に対応する。層厚は総じて10～40cmほどであるが、第5次調査の南辺部では最大75cmとなっており、耕作平坦面を形成するために一括盛土された状況を示している。

II層に対応する土層については、第5次調査区では表土下に断続的に堆積する軟質土層(II層・III層)がある。これらはいずれも調査区西端の一部に堆積するもので、特に5次のII層は部分的な堆積層となっている。堆積状況などから、これらの層は盛土前の旧耕作土の一部とみられ、層序的には本次調査のII層に対応すると考えられる。

第4次調査では調査区の西端にII層の堆積が見られ、第5次調査の報告書では5次II層と4次II層の対応関係が記されている。これらの層は土色・土質が共通しており同一層の可能性も考えられるが、調査区内では堆積範囲が局部的で平面的な連続性が確認されていないことから、これらは層序としての対応関係を示しているものと考えられる。さらに第4次調査の報告書では、4次II層が第1,2次調査のA II(II)層に対応するとしている。

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
盛土 M	10YR5/6 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	軟質、粉状構造、礫
表土 I	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土5%粒状 10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	軟質、粉粒状構造、縄文土器
暗褐色土 II	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%粒状 10YR5/6 黄褐色砂壤土1%粉状	軟質、粉粒状構造、土器、ビニール
黒褐色土 III	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR4/4 褐色砂壤土5%粉状	やや軟質、粉状構造、縄文土器
火山灰混土 IV	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色シルト質壤土及び 10YR6/8 明黄褐色シルト質壤土3～5%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造、縄文土器、木炭粉微量、礫
焼土混土 F	10YR2/3 黒褐色壤土	5YR4/8 赤褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
礫混土 V	10YR3/4 暗褐色シルト質壤土	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、礫多量
黒褐色土 VI	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土3%粒状	やや硬質、粉状構造、縄文土器、木炭粉微量
褐色土 VII	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状	硬質、粉状構造
黄褐色土 VIII	10YR5/6 黄褐色砂壤土	—	硬質、礫

土層観察表



第6次調査区全体図、土層断面図

Fig. 7



第1次～第6次調査地区
(南→) 1985年撮影
photo.18



第6次調査地区
調査前の状況
(西→)
photo.19



基本土層堆積状況
(南東→)
photo.20

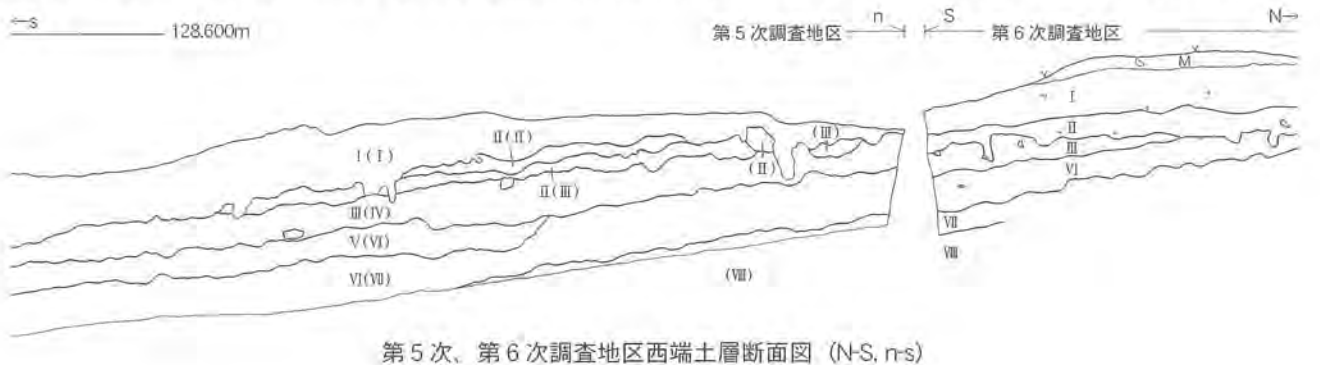
Ⅲ層については、第5次調査のⅣ層と同一層と考えられる。5次Ⅳ層は、黒褐色粘質土で同調査区の西半に堆積しており、土層の平面分布、断面ともに6次Ⅲ層と整合し、土色・土性も共通する。

第5次調査報告書では、5次Ⅲ層については4次Ⅲ層が対応するとしているが、5次Ⅲ層は前述のとおり部分的に堆積する土層で、調査区の南辺には見られず、南に隣接する第4次調査区ではⅢ層がその西半に堆積していることから、これらの層には平面的な連続性が乏しく、その対応関係には疑問がある。一方、4次Ⅲ層の平面分布は5次Ⅳ層との連続性を有し、下位層との層序関係からこれらの層は対応するものと考えられる。但し4次Ⅲ層には礫が含まれるという相違があり、この点では同一の層とは断定できないが、直下の含礫層(4次Ⅳ層)からの混入礫の可能性も考えられる。また、第4次調査の報告書では、4次Ⅲ層は第1,2次調査のAⅢ層に対応するとしている。

Ⅳ層については、隣接する第5次調査区において、本次調査で平面検出された、層の範囲と連続する位置で同様な土層が確認されている。(第5次報告土層断面A-A')これは「暗い暗褐色粘質土を基本土とし、明黄褐色のシルトを含む」土層(5次Ⅴa層)で、この混入土も十和田中振火山灰とみられる。

第5, 6次の調査結果からこの火山灰混土の堆積範囲は、第8号土坑付近から西へ12m、南北は第3号竪穴住居跡の北側1~3mほどの部分となる。5次Ⅴa層は層厚20cm前後で、層界面は凹凸を成しており、層序は5次Ⅳ層(6次Ⅲ層)と黒褐色土層(5次Ⅶ層)との間に位置し、北西部では礫を含む暗褐色土(5次Ⅵ層)の上位に接して堆積している。5次Ⅴa層の下位には、「黒褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を含む」土層Ⅴb層が見られる。土層断面では堆積範囲がⅤa層と重複し、部分的な堆積層であることから、火山灰混土の細分層の可能性も考えられるが、混入土の土性が判然とせず、対応関係については不明である。また、5次Ⅴa, Ⅴb層と遺構との関係は、第3号竪穴住居跡と第7号土坑がⅤa層を掘り込んでおり、第8号土坑及び小ピット7は各々Ⅴa, Ⅴb層に覆土されている。なお、第1~4次調査では火山灰とみられるシルト質土を混入する土層は報告されていない。

Ⅴ層については、第5次調査で調査区の北西部を除く範囲に礫を含む暗褐色粘質土(5次Ⅵ層)が見られた。その平面分布は第6次調査のⅤ層と連続性を有し、含礫層はこの層のみであることから、これらは同一層と判断される。第5次調査のⅥ層は、層厚20~50cmほどで南東部で厚く堆積しており、



第5次、第6次調査地区西端土層断面図 (N-S, n-s)

第5次調査地区北端土層断面図 (w-e)

第5次、第6次調査土層断面図

Fig. 8

層理面には凹凸が見られ、5次Va、Vb層(6次IV層)と黒褐色土層(5次VII層)との間に層位する。

第4次調査では、Ⅲ層・Ⅳ層に礫を多く含んでいるが、4次Ⅲ層は前述のとおり5次Ⅳ層との対応関係が考えられることから、6次Ⅴ層とは4次Ⅳ層が対応する。第4次調査報告書では、4次Ⅳ層は第1,2次調査のAⅣ層に対応すると記されているが、同調査で礫を多く含むとされる土層はⅤ・Ⅵ層であり、4次Ⅳ層はこれらの層との対応が考えられる。

Ⅵ層については、層相及び土層断面の整合性から、第5次調査のⅦ層と同一層と考えられる。なお、第1次から第4次調査においては、これに対応する土層は確認されていない。

Ⅶ層は、第5次調査の土層断面との対照によれば、「Ⅶ層の漸移層」と報告されている5次Ⅷ層に連続するとみられるが、これは黄褐色土を基本土としており6次Ⅶ層とは土色を異にし、基盤土に相当する土色となっている。また、本層は4次調査の漸移層であるⅤ層に相当し、第1,2次調査の基盤土上に見られるⅦ層に対応すると考えられる。

Ⅷ層は第1～4次調査で報告されている「地山層」に相当し、4次調査のⅥ層褐色砂礫層、3次調査Ⅱ層の褐色シルト質土層、第1,2次調査のⅧ層に対応する。これらの基盤土は砂礫、シルト質土、砂壤土となっており、調査地区により土性の変化が見られる。

以上の基本土層の対応関係をまとめると、下表のとおりとなり、これらの土層の堆積状況を概括すると、次のようになる。基盤土は調査地区により砂礫からシルト質土などの変化が見られ、その上位には褐色ないし暗褐色土の漸移層(Ⅶ層)が見られる。さらにこの上位には、第5次、第6次調査地区では黒褐色土(Ⅵ層)が堆積し、その後、第6次調査地区の南東部から南側の広い範囲に、礫を多量に混ざる黒褐色ないし暗褐色土層(Ⅴ層)が形成される。第5次と第6次調査地区が接する付近には、この礫混土の上に十和田中振火山灰とみられるシルト質土を混入する暗褐色土層(Ⅳ層)が堆積する。この火山灰混土は他の調査地区では確認されておらず、部分的な堆積層となっている。

さらにこれらの上位には、第3次調査地区を除く広い範囲に黒褐色土(Ⅲ層)が堆積し、その上には断続的に軟質の黒褐色ないし暗褐色土層(Ⅱ層)が見られ、これらの土層を表土が覆っている。

これまでの調査地区における基本土層の堆積過程について、部分的な堆積層を除いて要約すると、下位から基盤土→漸移層→黒褐色土層→礫混土層→黒褐色土層→表土層となる。礫混土層は、多量の礫の混入をもたらす自然営為により形成されたものとみられ、その上下の黒褐色土層は安定した状況の中で堆積した土層と考えられる。

第1次～第6次調査基本土層対応表

Tab. 2

第6次	第5次	第4次	第3次	第1・2次
I	I	I	I	I
II	II	II	——	A II(II)
	III	——	——	——
III	IV	III	——	A III
IV	Va	——	——	——
	Vb	——	——	——
V	VI	IV	——	V
	——	——	——	VI
VI	VII	——	——	——
VII	——	V	——	VII
——	VIII	——	——	——
VIII	——	VI	II	VIII

(3) 第4号竪穴住居跡(JH04)

住居跡の位置は、隣接する第5次調査地区に近い本調査区の南半で、検出面はⅢ層上面、標高は128m前後、傾斜は南向きに2～3°ほどの極めて緩やかな斜面に立地する。第5次調査の第3号竪穴住居跡の北西に位置し、これらの住居跡の中心間の距離は6.4m、壁間の距離は最も近接する部分で2.2mあり、床面の標高差は60cm前後となっている。

住居跡の検出状況は、現表土Ⅰ層及び旧来の耕作攪乱を受けているⅡ層を除去した段階で黒褐色土の堆積が部分的に見え始め、さらにその周辺を土層観察しながら平面状況の確認をしたところ、Ⅱ層の暗褐色土が部分的に入り込んでおり全体形状は不明瞭であったが、黒褐色土の北東部が周辺の暗褐色土に対して弧状を成して識別されたことから、ほぼ4mほどの円形の遺構となることが想定された。

セクションベルトを設定し遺構の精査を始めたところ、南端部に炉石が確認されこれに続く床面上にも遺物が見られたため竪穴住居跡であると判断され、壁の精査、床面、柱穴の検出作業を続行した。

埋土は黒褐色土及び暗褐色土で構成され、A1、A2層に分層される。A1層の上部には検出面で見られたⅡ層の攪乱が観察され、一部では床面近くまで至っていた。A1層は黒褐色壤土(10YR2/3L)を基本土とし、暗褐色壤土(10YR3/4L)が混入するやや軟質の土層で、黄白色粗粒砂・礫・土器を含む。埋土の主体を占める土層で層厚は20cmほどあり、竪穴の東側の一部を除くほぼ全面に見られる。A2層は暗褐色壤土(10YR3/4L)を基本土とし、黒褐色壤土(10YR2/3L)を混入するやや軟質の土層で、A1層同様黄白色粗粒砂・礫・土器を含む。

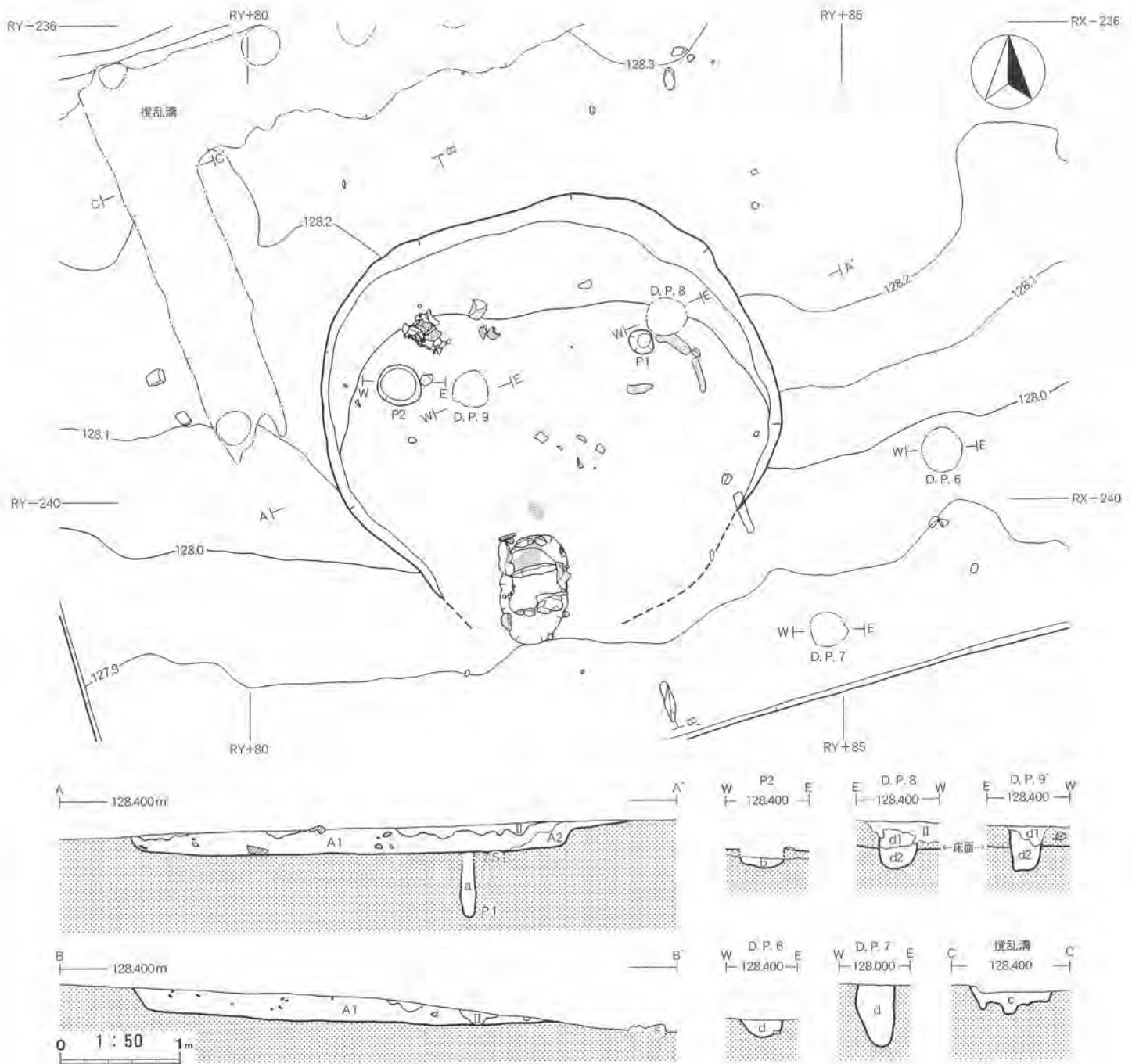
住居跡の平面形については、南辺部では壁の立ち上がりの確認できず、床面構築土、顕著な硬化面も見られなかったため、この部分の床面範囲は炉の位置及び南北土層断面からの推定となっている。確認された壁上端の平面形と規模は、直径3.9mの円弧内に納まる不整形を成しており、北側及び東側の壁では長さ1.6mほどの直状の部分が見られる。北東部の壁は弧状となって東側の直状壁に続き、南端でやや屈曲する。西側の壁はほぼ弧状であるが、南西部でやや屈曲して炉跡方向に壁が伸びる。直状となっている北及び東側の壁の方向はほぼ直行しており、やや屈曲する部分が5ヶ所見られる。全体的な平面形は不整の円形に近いものとみることできるが、直状及び弧状の壁が屈曲部を介して形成されており、直状部と屈曲部が存在することから、その形状は弧状部分を含む不整多角形を呈すると言える。

壁は40～60°の角度で立ち上がり、壁高は北東部で最も高く24cmとなっている。壁の精査は北東部では比較的明瞭に埋土と壁が識別されたが、西半部ではこれらの土性差異が少なく混入物や硬さの変化で壁を把握したもので、最終的には下位層の精査段階で壁位置を再確認し確定した。壁下端は上端とほぼ並行しており、床面の形状も壁上端の平面形と相似する。

床面は若干南に傾斜しており、南北の高低差は最大12cmほどあり、竪穴中心部の標高は127.96m、床の面積は柱穴・炉の部分を含め9.85㎡となっている。床面の確認作業は貼り床など床面構築土が見られず、特に西半部では壁の確認と同様に難渋したが、炉跡と遺物の出土状態などから床面を把握し、下位層の調査の際に床面下を精査し確定した。床面東半部では礫が検出され、一部は竪穴外に位置していたことから、重複する遺構の存在が予測された。精査の結果、これらの礫は下位の竪穴住居の炉石の一部であることが確認され、炉石上端部に接する面を本住居跡の床面としていたと見られる。

柱穴P1、P2については、本住居跡の床面精査の段階では確認できなかったもので、下位に重複する住居跡の精査の際に検出されたものである。重複する住居跡については第6号住居跡の項で詳述するが、その柱穴配置などの検討結果からこれらの柱穴が本住居跡に帰属するものと考えられ平面図に図示した。

P1は、第6号住居跡(JH06)の炉を精査した際に検出された柱穴で、炉の一部とその埋土を掘り込んで形成されており、JH06の炉跡埋没以後の時期に属するものである。JH04の床面北東部に位置しており、



第4号竖穴住居跡(JHO4)平面図、土層断面図

Fig. 9

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
竖穴埋土 A1	10YR3/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造、礫、土器
竖穴埋土 A2	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造、礫、土器
P1埋土 a	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造、土器、木炭粉2%
P2埋土 b	10YR3/2 黒褐色シルト質壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状 2.5YR4/8 赤褐色壤土2%粒状(焼土粒)	やや硬質、粉粒状構造、土器、木炭粉1%
D.P.6埋土 d	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%粉状	軟質、粉状構造
D.P.7埋土 d	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土2%粉状	軟質、粉状構造、石灰
D.P.8埋土	d1	10YR3/4 暗褐色砂壤土 10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	軟質、粉状構造、ビニール
	d2	10YR3/4 暗褐色砂壤土 10YR2/3 黒褐色壤土5%粉状	軟質、粉状構造
D.P.9埋土	d1	10YR3/4 暗褐色砂壤土 10YR2/3 黒褐色壤土5%粉状 10YR4/3 にぶい黄褐色壤土3%粉状	軟質、粉状構造、針金
	d2	10YR3/4 暗褐色砂壤土 10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	軟質、粉状構造
攪乱溝埋土 c	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色壤土5%粉状 10YR4/6 褐色シルト質壤土2%塊状 10YR2/2 黒褐色壤土1%粉状	軟質、塊状、粉状構造、ビニール

土層観察表



第4号竖穴住居跡(JHO4)(南→)

Photo.21



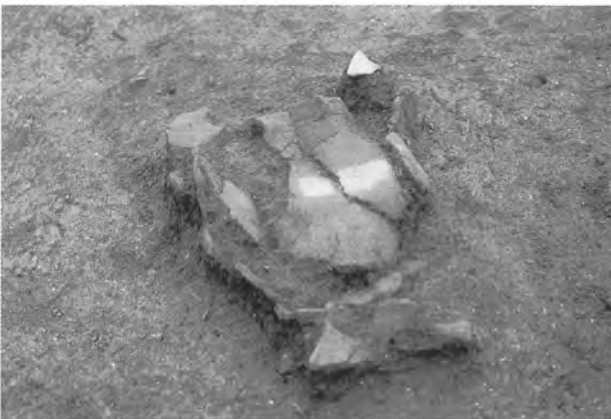
JHO4検出状況(南→)

Photo.22



埋土断面(南西→)

Photo.23



床面遺物出土状況(南→)

Photo.24



竖穴P2埋土断面(南→)

Photo.25

口径は20cm前後で不整形を成し、検出面からの深さは56cmとなっている。埋土は暗褐色壤土(10YR3/3L)を基本土とし褐色壤土(10YR4/6L)が混入しており、土器、木炭粉を含み柱痕は見られない。

P2はJH06の床面を精査した際に検出された柱穴で、JH04の床面北西部に位置する。口径36cm前後の楕円形を呈し、深さは検出面から8cmである。埋土は黒褐色シルト質壤土(10YR3/2SiL)を基本土とし暗褐色壤土(10YR3/4L)及び赤褐色焼土粒(2.5YR4/8L)が混入しており、土器、木炭粉を含み柱痕は見られない。なお、JH04とJH06の床面の標高差は6～12cmで、P1、P2のJH04床面からの深さは各々65cm、16cmとなる。

床面に見られるD.P8、D.P9は、埋土にビニール・針金を含んでいることから近來の攪乱孔と考えられ、D.P6、D.P7も埋土の類似性と混入物から同様の攪乱孔とみられる。また、JH04北東のL字状の溝はビニールハウス設置に伴う攪乱で、底面に重機の爪の跡が見られ溝内には攪乱孔が並んでいることから、D.P6～9もビニールハウス設置に伴う攪乱孔と考えられる。

P1はJH06炉跡の埋没以後に形成された柱穴であるが、JH04とJH06の間には遺構面は存在せず、JH04以降の時期には近來の攪乱孔が見られるが、埋土の比較などからP1は攪乱とは言い難い。従って、P1はJH04に帰属すると考えられる。P2については、下位の住居跡の柱穴配置を検討した結果、JH06に伴う可能性が少ないと考えられたこと、またP1との柱穴配置関係からJH04に伴うと判断した。P1、P2は床面北半の東西に配置され、その間隔は柱穴の中心間で2.08mあり、P1、P2を結ぶ線は北側の直状の壁にほぼ平行し、床面中心から50cmほど北側に寄っている。炉と柱穴との位置関係は、炉の中心とP1及びP2との距離が各々2.27、2.07mとほぼ等しくなっており、P2を頂点とする二等辺三角形を成している。

柱穴P1、P2は炉が位置する床面南半の空間からやや距離を置いた北半部に配置されており、この2基の柱穴に据えられた柱の上に棟木を設け、垂木によってこれらを支持する構造の上屋を想定することができる。

炉は床面の南端部に位置する。幅60cm、長さ90cmの隅丸長方形で、長軸を南北方向とする石囲い炉である。炉石は部分的に断続しており、一部が抜き取られた可能性も考えられたが、精査の結果その痕跡は確認されず、検出された状態の炉石配置で使用されていたものとみられる。炉の底面は幅40cm、長さ50cmほどで、東西方向に配置した長さ40cmほどの細長い石によって南北二つの区画に区切られている。北側の区画(C区画)は西及び北に逆コの字状に炉石を配しており、南側の区画(O区画)では東及び南にコの字状に炉石を配し、O区画南列の炉石から緩やかに立ち上がり炉の上端南縁に至り、炉石配置は全体にS字状となっている。検出面で見られる主な炉石の数は11点で、この内2点は花崗岩であり、その大きさは長さ10～40cm、幅が7～15cmほどである。これらの他に比較的小きな礫が部分的に見られるが、炉の周縁を完結する配置とはなっていない。炉の面積は0.46㎡で、床面積に対する炉の占める割合は4.6%である。また、各区画の底面の大きさはC区画が35×15cm、O区画は40×25cmほどで、深さはC区画で10cm、O区画が13～19cmとなっている。

炉跡埋土の上半部は竪穴埋土のA1層で覆土され、f1層及び底面上には暗褐色土(b層)と黒褐色土(a層)が堆積しており、b層には木炭・焼土粉が含まれている。炉の底面下には黒褐色土の構築土が見られ、層厚は5～10cmほどで、これにより炉石を固定し底面を形成している。炉の構築当初の掘り込みは幅75cm、長さ1mの凹凸のある楕円形を成し、C区画西縁、O区画東縁及び南縁の炉石部分で深く掘り込まれており、最深部は検出面から24cmとなっている。

焼土は炉C区画の底面に検出されている。これは赤褐色焼土粉を含む焼土混土(f1層)で、層厚は最大3cm、やや軟質でC区画の西寄りに分布する。また、炉の北約20cmの床面には焼土粉を2%ほど含む焼土混土(f2層)が見られる。



JHO4炉跡検出状況(南→) Photo.26



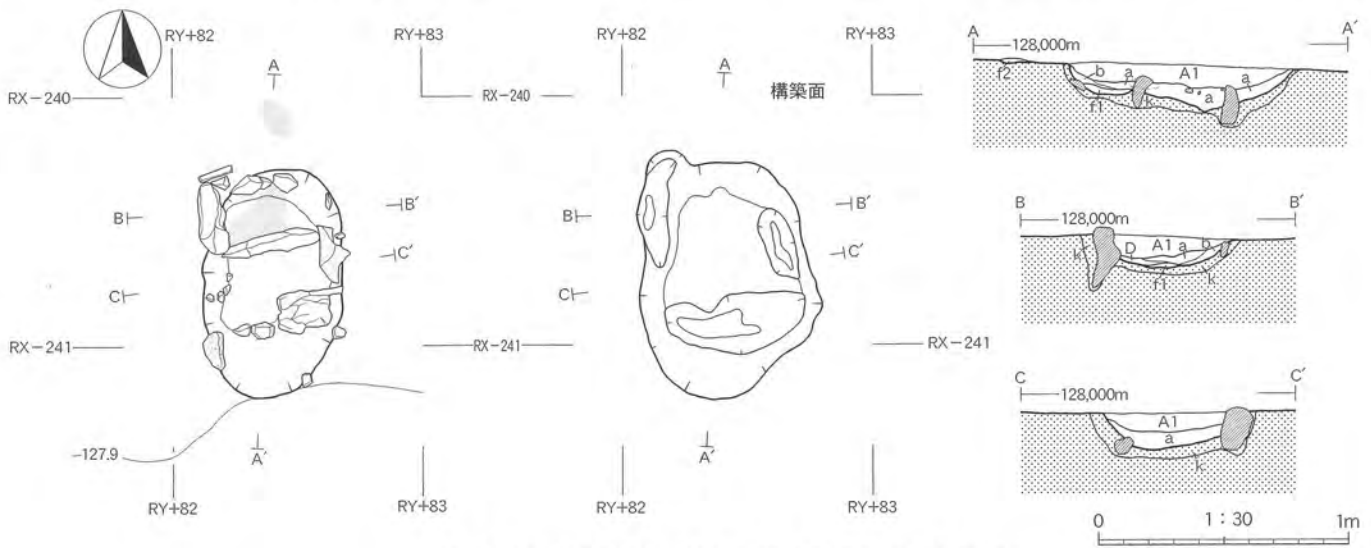
炉跡埋土断面(南西→) Photo.27



JHO4炉跡(南西→) Photo.28



炉構築面(南→) Photo.29



第4号竖穴住居跡(JHO4) 炉跡平面図、土層断面図

Fig.10

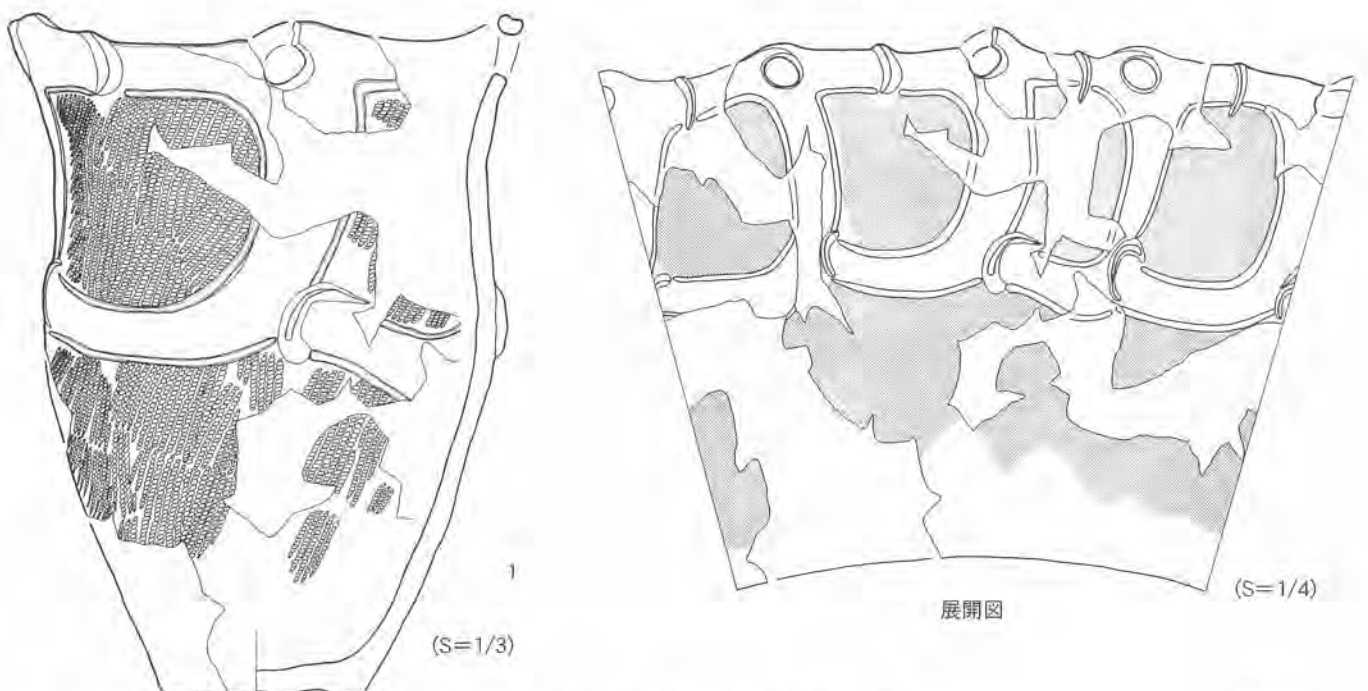
層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
竖穴埋土 A1	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
炉跡埋土 a	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
炉跡埋土 b	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色壤土3%粉状 5YR4/8 赤褐色壤土2%粉状(焼土粉)	やや硬質、粉状構造、木炭粉
焼土混土 f1	10YR2/2 黒褐色壤土	5YR4/8 赤褐色壤土5%粉状(焼土粉)	やや軟質、粉状構造
炉構築土 k	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR5/8 黄褐色シルト質壤土3%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造
焼土混土 f2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	5YR4/8 赤褐色壤土2%粉状(焼土粉)	やや硬質、粉状構造

土層観察表

・出土遺物

遺物は床面北西部から深鉢形土器一括と底部破片、また炉跡周辺などから土器小片が出土し、埋土A1層中にも遺物が見られた。1～7は床面出土の土器である。1は柱穴P2の北東30cmほどの位置から、口縁部を北西に向け倒れた状態で一括出土したもので、土器全体の7割ほどが残存していた。器高27.7cm、口径20.4cm、底径7.8cm、器厚8mm前後、底部厚8～12mmの深鉢形土器で、やや外反する口縁部からほぼ直立する胴部上半を経て、胴部中位で径を増して胴張りし底部に至る。口縁部の無文帯には、円孔を伴う橋状突起が4ヶ所、その間に逆C字状の隆帯が口唇部から垂下して付されている。文様帯は胴部上半に施され、口縁部突起からJ字状に入り込む無文帯によって区画され四単位の文様構成となっている。J字状の無文帯の末端には口縁部と同様のC字状の隆帯が付され左方の無文帯に接し、接続するJ字状無文帯と口縁部無文帯によって区画された部分には縄文が施され、幅5mmほどの浅い沈線で周縁されている。縄文(RL)は胴部下半にも施され、条は縦位に近い斜位となっている。大木10式の土器である。2は1の土器に隣接して出土した底部破片で、底径8cm、器厚7.5mm、底部厚10mm、施文原体はRLである。3は炉跡周辺から出土した浅鉢型土器の肩部で、微隆帯で楕円形に区画された無文帯が見られる。4は口縁部小片で弧状の沈線区画内に縄文が施されている。5、6は撚糸文Rが縦位に施文され、6には楕円形の刺突列点が見られる。7は縄文(LR)と断面が凸型の調整隆線が施され、大木8b式とみられる。8、9はP2の埋土から出土した小破片で、弧状の沈線区画内に縄文(LR)が施されている。

10～26はA1層から出土した遺物である。10は炉跡埋土直上のA1層から出土し、横位の無文帯が見られ、浅い沈線による区画内に縄文が施されている。11はA1層下半出土の口縁部突起部分で弧状の沈線区画内に縄文が施されている。12～16は同一個体の破片とみられ、円形ないし弧状の無文帯が入り組んだ文様構成となっており、これによって区画された縄文(RL)施文部分には楕円形の刺突文がある。口縁部は大波状を成し、突起部分の内面には断面山型の微隆線が付されている。17は小型土器口縁部で、口縁に沿って沈線と逆C字状の刺突列点があり、胴部に無文帯が入り込み沈線区画内に縄文(RL)が施されている。18～20は弧状の浅い沈線によって無文帯と施文帯が区画され、縄文(RL)が施さ

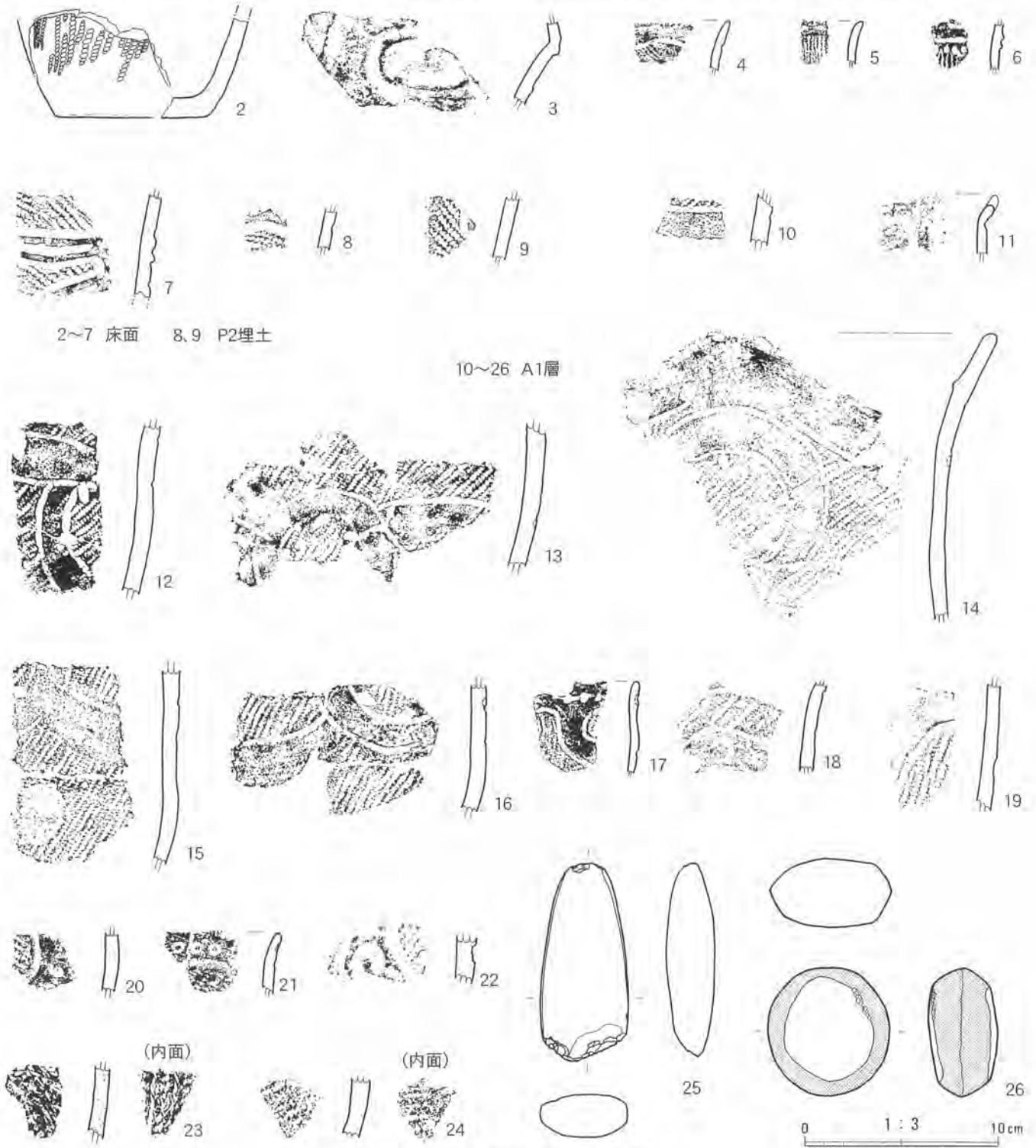


第4号竪穴住居跡(JH04)床面出土土器

Fig.11

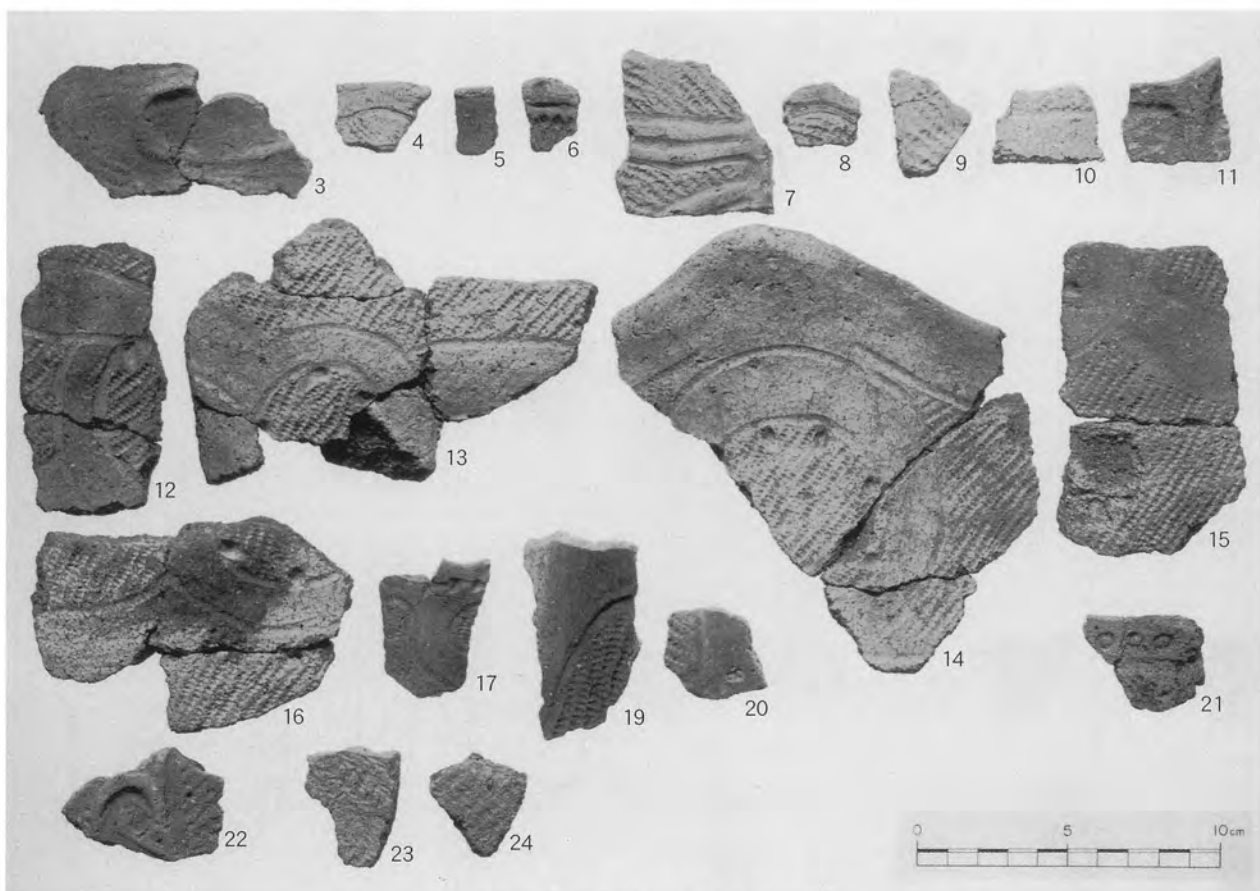
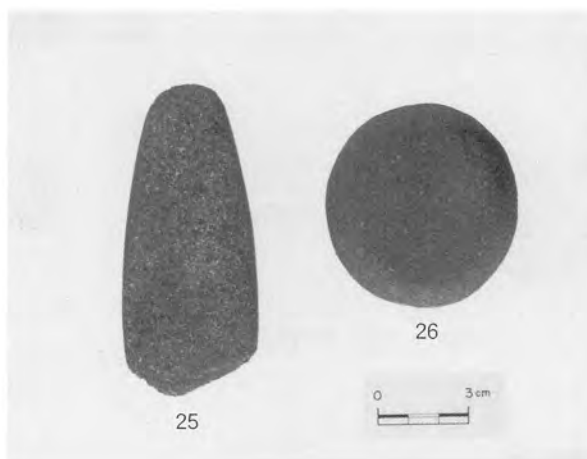
れている。21は口縁部に管状工具で直径7mmの円形刺突文が施文され、体部は浅い弧状沈線により区画され縄文(RL)が施されている。22は調整隆線による渦状文が施され、大木8b式とみられる。23、24は内外面に縄文が施されたいわゆる縄文—縄文土器で、胎土に繊維を微量含む。25は長さ102mm、幅43.6mm、厚さ25.5mm、重量186.3gの石斧で、欠損品を再加工したものとみられる。26は厚さ35mm、直径62.6~66.6mm、重量238.2gの側縁に磨面をもつ扁平円形な磨石で、断面形は外側縁が稜線を成し算盤玉状となっている。

出土遺物は縄文時代早期末及び中期中葉から中期末の土器が見られるが、大木10式がその主体を占め、床面一括土器の出土状況などから、第4号竪穴住居跡の帰属時期は大木10式期と考えられる。



第4号竪穴住居跡(JH04)出土遺物

Fig.12



第4号竖穴住居跡(JH04)出土土器

Photo.30

(4) 第5号竪穴住居跡(JH05)

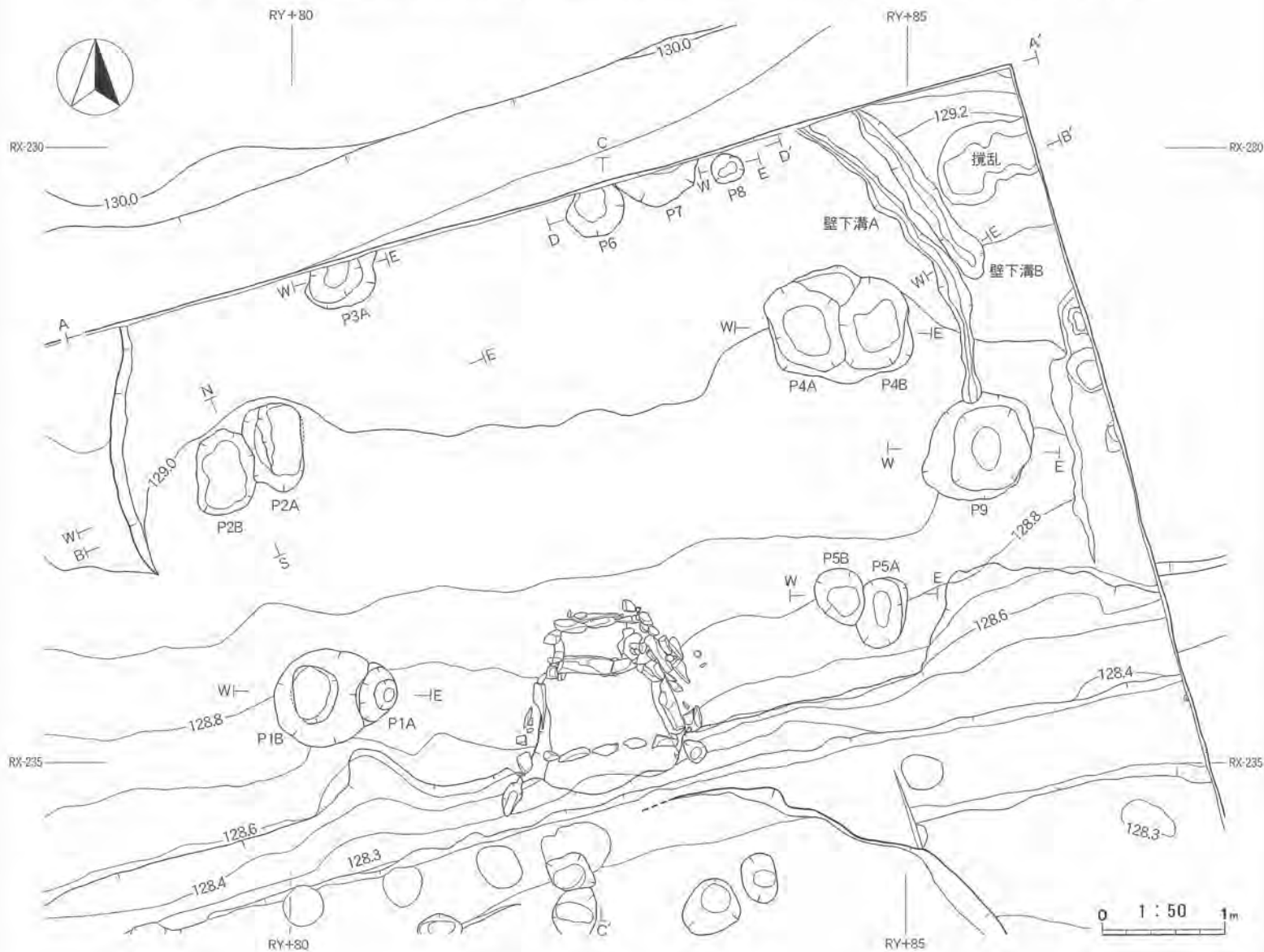
調査区の北半部に位置する住居跡で、南向きに5°ほど傾斜する標高129m前後の緩斜面に検出された。住居跡の北端部は調査区外となっており、南端部は耕作に伴う地形改変で攪乱を受け失われている。

第5号住居跡は調査区南半の第4号住居跡(JH04)の北北東に位置し、これらの住居跡の中心間の距離は約7m、壁間の距離は最も近接する部分で2mと推定され、床面の標高差は1m前後となっている。また、第5号住居跡の南には第6号住居跡(JH06)があり、これらは攪乱により各々の南北端が失われているが、この部分で重複していたとみられ、JH05とJH06とは時期を異にする住居跡である。

遺構検出面は、基盤土が西に傾斜しているため東方ではⅦ層の基盤土漸移層、西方ではⅢ層黒色土となっている。調査区北辺では地表下15cm前後の面で土色変化と土器・礫の分布が見られ、全体的な検出作業の結果、炉の石組みの一部と東辺部の遺構形状が確認された。

埋土はA、B層に大別される。上位のA層は住居跡の北東部に堆積しており、A1～A5層に分層される。Fig.15、16に示すとおり、細分各層の堆積範囲は部分的なものとなっており、これらの層には多くの遺物と礫が含まれている。また、埋土の層位関係は土層断面と平面分布からFig.14のとおりとなる。埋土の主体は下位のB層で、この層によって住居跡の床面は完全に覆土されている。

埋土最上位の黒褐色土A1層は、A層分布範囲の東端部に1.2×2.2mほどの広がり方で検出されており、



第5号竪穴住居跡(JH05)平面図

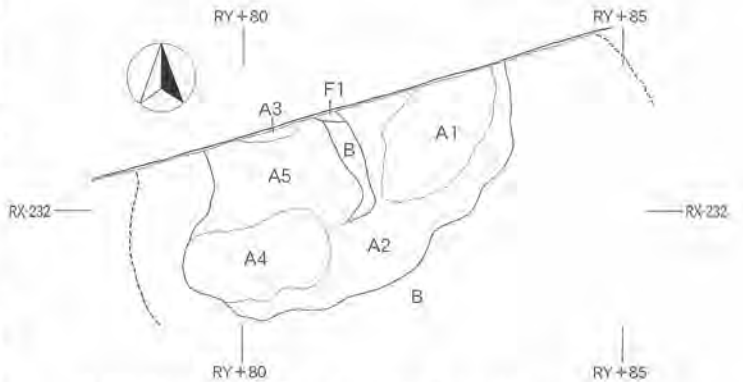
Fig.13

土器のほか最大長40cmほどの大型礫を含んでいる。層厚は6 cm前後であるが、表土直下であり削平を受けているとみられ、確認された層厚及び堆積範囲は残存部分の状態を示している。A2層は褐色土に黄褐色土と暗褐色土を混ざる土層で、A層分布範囲の南縁から東半部に検出された。層厚は12cm以下で、東半部ではB層上に堆積する。調査区北辺の土層断面で見られるように、A2層の西側では徐々に層厚を減じ末端となり、東端部ではB層との層理面は約40°の角度を成して立ちあがっている。A2層も西半部では削平を受けているとみられ、その分布範囲は下位層を覆土してさらに西に広がっていた可能性がある。

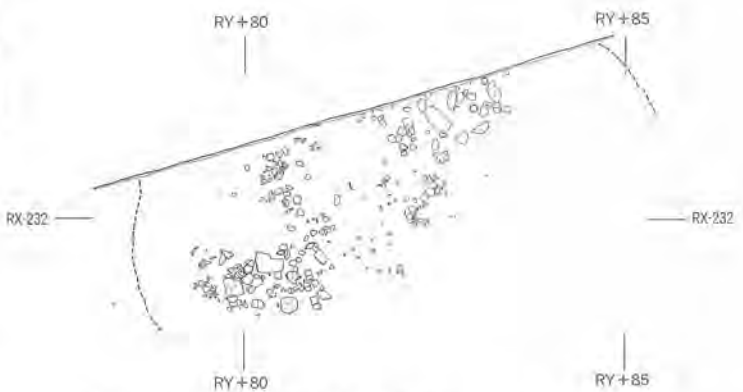
暗褐色土のA3層は調査区北辺の一部で確認された土層で、層厚は最大6 cm、北に広がる堆積層の末端部とみられる。A4層は1×2mほどの楕円形の範囲に堆積する黒褐色土で、柱穴P2と重なる位置にある。柱穴との関係は後述するが、B層との層理面は42°ほどの角度を成す部分があり、最大層厚は30cmほどありA1層と同様の大型礫を含んでいる。A5層はA層分布範囲の北西部に分布する暗褐色土で、B層上に堆積し層厚は8 cm以下である。

A層中には焼土F層が見られる。これはA2層とA5層の間に層位し、分布範囲の主体はB層上面に接している。F1、F2層に分層され、上位のF1層は暗褐色土を部分的に3%混じり木炭粉を含む硬質の焼土層で、最大層厚6 cm、その広がりには断面部分で東西1.1mとなっている。F2層は基盤土起源の黄褐色砂壤土に焼土を30%ほど混ざる焼土混土である。層厚は4 cm前後で、分布範囲をF1層のやや東にずらし断面部分で東西約1 mの広がりを見る。層相から原位置の焼土である可能性も考えられる。

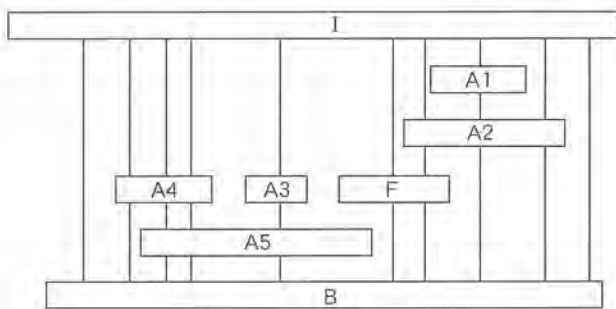
B層は褐色土を基本土とし黄褐色土を混ざる土層で、土器、礫、木炭粉を含んでおり、最大層厚は30cmほどある。床面を覆土する埋没当初の埋土で、A層との層理面は前述のとおり40°ほどの傾斜を成す部分があり、土層の平面分布に見られ



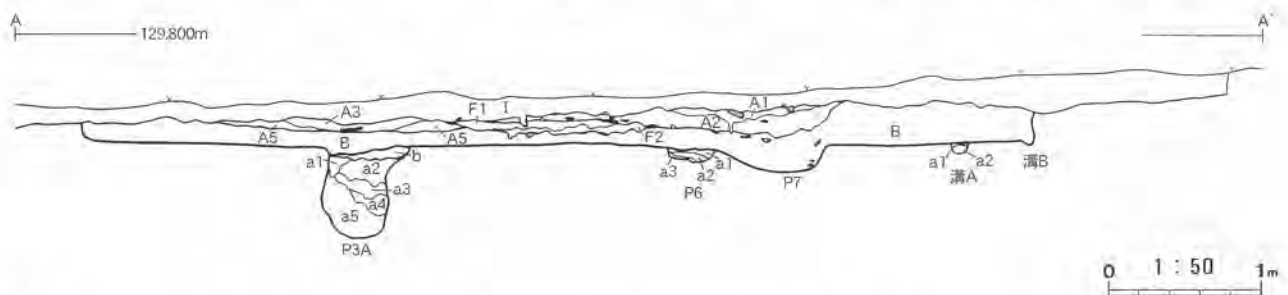
JH05 A1~A5, F1層平面分布図 (1:100) Fig.15



JH05 A層遺物・礫出土状況 (1:100) Fig.16



JH05 埋土層位関係図 Fig.14



第5号竪穴住居跡(JH05)土層断面図(Sec. A-A')

Fig.17



第5号竖穴住居跡(JHO5)(東→)

Photo.31



JHO5検出状況(北西→)

Photo.32



埋土A層遺物出土状況(西南西→)

Photo.33



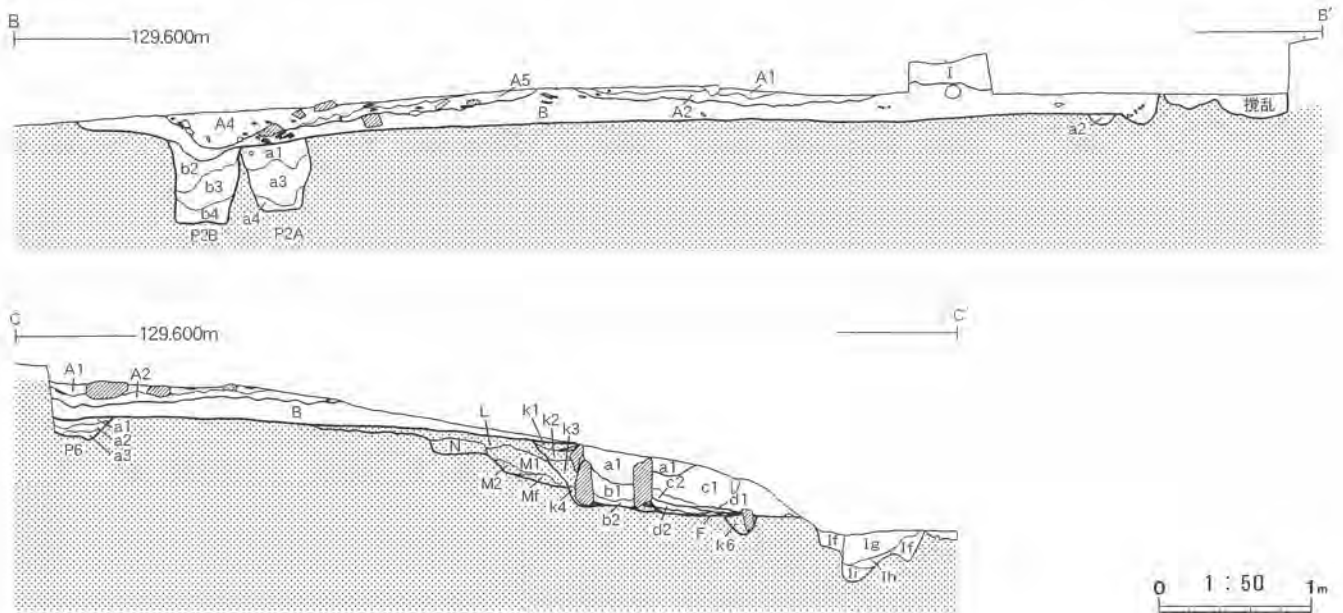
埋土断面(西南西→)

Photo.34



埋土断面(南西→)

Photo.35



第5号竖穴住居跡(JH05)土層断面図

Fig.18

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
JH05埋土	A1	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土2%粉状 10YR5/6 黄褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫、木炭粉微量 やや硬質、粉状構造、土器、礫、木炭粒2%
	A2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉微量
	A3	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫
	A4	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫
	A5	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土10%塊状	硬質、粉状構造、木炭粉1%
	F1	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)	10YR3/4 暗褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉1%
	F2	10YR5/6 黄褐色砂壤土	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)30%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉1%
	B	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、礫、土器、木炭粉1%
柱穴P2A埋土	a1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉1%
	a3	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土1%粉状 10YR4/6 褐色壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造
	a4	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粒塊状	やや軟質、粒塊状構造
	b2	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土7%粉状 10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P2B埋土	b3	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土5%粉粒状 10YR4/4 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉粒状構造、木炭粉微量
	b4	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	硬質、粉状構造
	b	10YR4/4 褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
	a1	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造
柱穴P3A埋土	a2	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造
	a3	10YR3/4 褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造
	a4	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
	a5	10YR4/4 褐色シルト質壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土5%粉状 10YR3/4 暗褐色壤土3%塊状	やや硬質、粉塊状構造
	a6	10YR4/6 褐色壤土	10YR3/4 暗褐色シルト質壤土2%粉状 10YR5/6 黄褐色砂壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造
	柱穴P6埋土	a1	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状
a2		10YR3/3 暗褐色シルト質壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
a3		10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR4/6 褐色壤土5%粒状	やや硬質、粒状構造
壁下溝A埋土	a1	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造
	a2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
床面構築土	L	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状	硬質、粉状構造
旧炉跡埋土	M1	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
旧炉跡焼土	M2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造
旧炉跡焼土	Mf	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)	10YR3/4 暗褐色壤土1%粉状	硬質、粉状構造
構築土下埋土	N	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	硬質、粉状構造
	攪乱溝埋土	If	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土20%粉状 10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状
攪乱孔埋土	Ig	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR4/6 褐色壤土5%塊状 10YR2/3 黒褐色壤土2%塊状	軟質、塊状構造
攪乱孔埋土	Ih	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土30%粉状	軟質、粒状構造
攪乱孔埋土	Ii	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%粒状	軟質、粒状構造

土層観察表

るようにA層分布範囲の中央部では部分的にB層が検出されている。つまり、東西断面ではA層との層理面は凹凸を成す状態となっている。B層は全体にほぼ均一な土層で、壁周辺においても異なる土層の堆積は見られなかった。

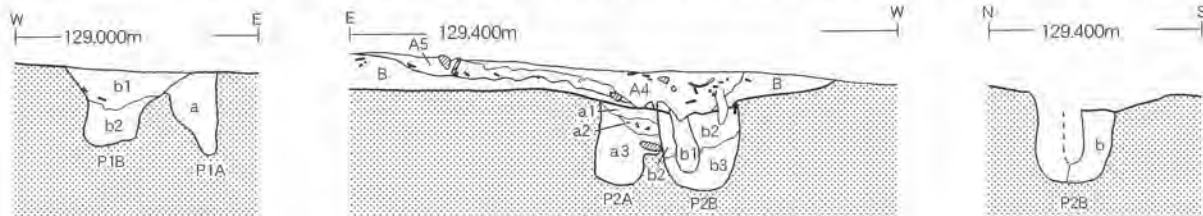
A層の堆積状況は明らかに人為的な関与を示すものである。A4層の傾斜を成す層理面の状態やB層上面の凹凸、さらに焼土F層の存在は、埋没過程の中で遺物や礫などの廃棄のみならず、より能動的な行為が成された結果と考えられる。

壁は、住居跡の北半部については確認できたが、南半では残存していなかった。東壁は調査区北縁から1.7m、西壁は2mの範囲で確認され、最大壁高は東壁が22cm、西壁が12cmである。いずれの壁もほぼ直立して立ちあがり、東壁の壁下には溝を伴う。調査区北縁での壁間の距離は6.28m、確認された壁の最大間隔は7.35mとなっている。壁の平面形状は、東壁の1.7mがほぼ直状で、西壁は弧状を成している。

なお、東壁の東に見られる不整形の落ち込みは攪乱坑であり、柱穴P9の東の段状の落ち込みも底面に断面形状が不整なピットがあり、埋土状況から基本土層Ⅱ層期の近來に形成されたものとみられる。

壁下の溝は東壁のみに伴うもので、二条検出されている。検出された壁直下の溝(壁下溝B)は、幅7~26cm、底面幅10cm以下、深さは2~8cmで底面には凹凸が見られ、住居跡埋土B層に覆土されている。この溝の西に隣接して同様な形態の溝(壁下溝A)があり、これは幅8~20cm、底面幅10cm以下、深さは4~9cmで底面には凹凸があり、長さは調査区北縁から2.8m、柱穴P4付近でやや屈曲し南端は柱穴P9により失われている。埋土は褐色土のa2層が主体を占め、その上位に褐色土を混ざるやや硬質の黄褐色土a1層が薄く堆積し、a1層は床面を構成している。これらの溝の間隔は、底面中心間で18~37cmである。溝A、Bはその形状、配置から同様な性格のものと考えられ、埋土の状況から新旧時期差を持つもので、溝Aが旧期の壁下溝となる。

床面は、東西方向には水平を保ち、調査区北縁断面では129.07m前後の標高値を示しほぼ平坦である。南北においては、住居跡の中央部付近から南向きに若干傾斜して複式炉に至り、最大高低差は37cmほどとなる。貼り床は見られず削り出しの床面となっているが、炉の北側では床面構築土L層が見られる。この構築土の下位には落ち込みが確認されており、その底面には焼土Mf層がある。これは時期を



第5号竪穴住居跡(JH05)柱穴P1、P2土層断面図

Fig.19

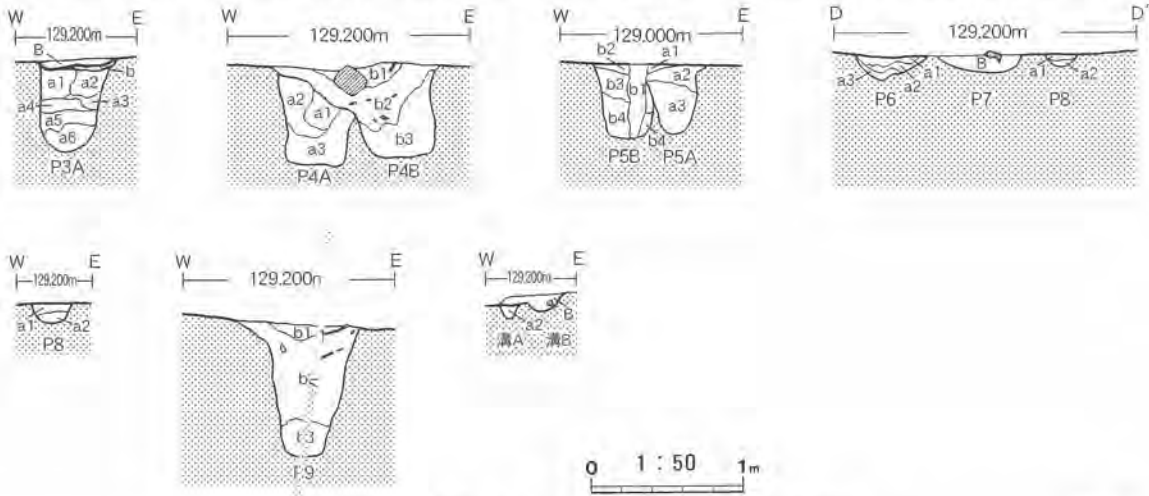
層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
柱穴P1A埋土	a	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状 10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P1B埋土	b1	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造、土器
	b2	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 10YR4/6 褐色砂壤土1%粒状	やや硬質、粉粒状構造、木炭粉微量
柱穴P2A埋土	a1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉1%
	a2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉微量
	a3	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土1%粉状 10YR4/6 褐色壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造
柱穴P2B柱痕	b1	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土2%粉状	軟質、粉状構造
	b2	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土7%粉状 10YR4/6 褐色砂壤土2%粒状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P2B埋土	b3	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土5%粉粒状 10YR4/4 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉粒状構造、木炭粉微量
	b4	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	硬質、粒状構造

土層観察表

異にする炉が存在していたことを示すもので、L層は炉の再構築に伴う床面構築土と考えられる。

床面には9基の柱穴P1～P9が検出され、P3、P6、P7はその北側部分が調査区外にあり完掘されていない。P1、P2、P4、P5は重複しており、柱穴底面の中心を28～60cmほど移動した位置に掘り込まれている。P6とP7は接する位置にあり、P9には重複は見られない。重複する柱穴には旧期、新期に各々A、Bを付しその名称とした。柱痕はP2BとP5Bで確認され、その他の柱穴には見られなかった。

P1は床面の南西部に検出され柱穴で、複式炉の中軸線からの西に2mほどの位置にある。2基の柱穴が重複しており、埋土断面で確認された旧期の柱穴をP1A、新期の柱穴をP1Bとした。P1Aは深さ55cmで、口径は30～50cmの楕円形を呈し、底面位置は柱穴の東側に寄っている。埋土は暗褐色土a



第5号竪穴住居跡(JH05) 柱穴P3～P9土層断面図

Fig.20

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
柱穴P3A埋土	b	10YR4/4 褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
	a1	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造
	a2	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造
	a3	10YR3/4 褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造
	a4	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
	a5	10YR4/4 褐色シルト質壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土5%粉状 10YR3/4 暗褐色壤土3%塊状	やや硬質、粉塊状構造
柱穴P4A埋土	a1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
	a2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土5%粉粒状 10YR3/4 暗褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉粒状構造
柱穴P4B埋土	a3	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土7%粉状	やや軟質、粉状構造
	b1	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫
	b2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/4 褐色壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫、木炭粒
柱穴P5A埋土	b3	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、礫
	a1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状 10YR2/3 黒褐色壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
	a2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉微量
柱穴P5B柱痕	a3	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土1%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造、木炭粉1%
	b1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P5B埋土	b2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造
	b3	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造
柱穴P6埋土	b4	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
	a1	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造
	a2	10YR3/3 暗褐色シルト質壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P8埋土	a3	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR4/6 褐色壤土5%粒状	やや硬質、粒状構造
	a1	10YR5/4 にぶい黄褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造
柱穴P9埋土	a2	10YR5/4 にぶい黄褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土1%粉粒状	やや軟質、粉粒状構造
	b1	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
壁下溝A埋土	b2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、土器、礫
	b3	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状	軟質、粉状構造
	a1	10YR5/6 黄褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造
	a2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量

土層観察表

層の単層で、木炭粉を微量含む。P1BはP1Aの西に重複して掘り込まれており、底面中心間の距離は約60cm、深さは52cmで、口径は80cm前後のほぼ円形、底面は40～50cmの不整楕円形となっている。断面形状は、上半部でハの字状に開いており、東側でP1Aの埋土 a 層を切り込んでいる。埋土は暗褐色土のb1、b2層で、b1層の下半部には土器が含まれる。P1A、P1Bのいずれの柱穴にも柱痕はなく、最終段階のP1Bの柱も抜き取られたものと考えられる。

P2は床面の西半中央部に検出された柱穴で、P1の北北西2mほどの位置にある。P2Aは深さ56cm、開口部は50×60cmの南北長軸の不整長方形を成し、底面も24×58cmの同形を呈する。埋土は暗褐色土 a 層で柱痕は見られず、混入土の差異によりa1～a4層に細分される。a1、a2層はやや硬質で土器、木炭粉を含み、a3、a4層はこれらに比べやや軟質であり、a 層は柱抜き取り後の埋土と考えられる。

P2Bは、P2Aの南西に重複して掘り込まれており、底面中心間の距離は60cmほどあり、深さは59cm、開口部は50×70cmの南北長軸の不整長方形を成し、底面は30×60cmの不整楕円形を呈する。この柱穴では南北中央の西寄りの位置に柱痕が確認されている。柱痕は鉛直から10～12°東北東に傾いており、柱痕径は10～14cmで下半部でやや太くなっている。埋土はやや硬い暗褐色土で、混入土の差異によりb2～b4層に細分され、最下位のb4層は硬くしまっている。土層断面では柱痕の上端は住居跡埋土のA4層に接しており、A4層はA5層、B層の住居跡埋土を掘り込んだ状態で観察されている。この状況は住居跡の埋没過程で、柱穴P2Bに対して人為的な働きかけが行われたことを示していると考えられる。

P3Aは床面の北西部に検出された柱穴で、P2Aの北北東1.2mほどの位置にあり、柱穴北半は調査区外となっており完掘されていない。開口部の東西は54～60cm、深さは60cmで、埋土最上面は床面から4～6cm落ち込んでおり、住居跡埋土B層が覆土している。埋土最上位のb層はB層に類似するが、黄褐色土の混入がやや多く粘性も若干異なる点で識別された。層厚は最大6cmで、西側に向って徐々に薄くなる。埋土の主体のa層は六層に分層され、a2、a4層は黄褐色土、他は褐色土ないし暗褐色土を基本土とする土層で、構造は粉粒塊状となっている。a1層の層理面は急角度を成し、基盤土起源の黄褐色土が互層になっている部分もあり、埋土は人為的に埋め戻された状況を示している。

P4は床面の東半中央部に検出され、東西に重複する2基の柱穴から成る。西側のP4Aは深さ66cm、開口部は南北90cmほどあり、底面は30×40cmの不整形を呈す。埋土は暗褐色土a1層と褐色土a2、a3層から成り、a1～a2層の層理面は入り組み状となっている。柱痕は見られずa層は柱抜き取り後の埋土と考えられる。P4Aの東側上半部はP4Bによって斜めに掘り込まれている。

P4Bは柱穴の中心を東に50cm移動した位置にあり、深さは60cmで開口部は南北80cmほどあり、底面は30×35cmの不整形を呈す。埋土は土器、礫を含む褐色土b1、b2層と黄褐色土b3層から成り、b1層は住居跡埋土B層に類似している。b2層は柱穴下半から東に33°、西に47°ほどの角度で斜めに立ちあがっており、西側はP4Aの埋土を切りこんでいる。いずれも柱痕はなく、柱の抜き取りが行われたものと考えられる。

P5は床面の南東部に検出された柱穴で、P4の南2.2m、複式炉の中軸線から東に2mほどの位置にある。東西に重複する2基の柱穴から成り、東側のP5Aは深さ45cm、開口部は南北55cm、東西40cmの楕円形で、底面は15×30cmの不整楕円形を呈す。埋土は暗褐色土a1～a3層から成り、a3層が埋土の主体を占め、層厚は34cmとなっている。

P5Bは深さ50cm、開口部は直径40cm前後の不整円形で、底面も25cm前後の不整円形を呈す。柱穴の東寄りの位置にほぼ直立した柱痕が見られ、その径は5～12cmで下端部で細くなり底面に接しており、柱痕とP5A底面中心との距離は28cmである。柱埋設土b1～b3層は、暗褐色土ないし褐色土で層

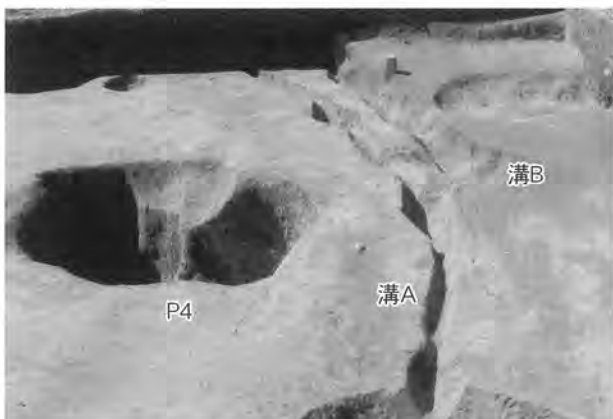
厚はb1層から各々6、18、26cmとなっている。

P6は床面の北半部で検出された柱穴で、複式炉の北3.3mの位置にある。柱穴北側は調査区外で完掘されていないが、東西48cmの不整形円形を成し、深さは15cmで底面には凹凸が見られる。埋土最上位のa1層は黄褐色土を基本土とするもので、床面を構成している。a2層は暗褐色土で木炭粉を含み、a3層は黄褐色土となり、層理面には凹凸が見られる。P6は他の柱穴に比べ浅く底面に凹凸が見られるため、底面を確認したが、混入土は見られず、また、深い柱穴であればP3Aと同様に、土圧による床面の陥没が伴うと考えられるが、P6の埋土上面は平坦であることから、a3層下面が底面であると判断した。

P7はP6の北東に接して検出されたもので、柱穴南縁部が精査されている。調査区北縁断面では開口部東西が70cm、深さ17cmで、西側から緩やかに落ち込み東側でやや急に立ち上がり、埋土は住居跡埋土B層である。柱穴の上縁部分とみられ、底面は北側の調査区外に位置するものと推定される。

P8はP7の東に隣接し小型で浅く、深さは8cm、直径が25cm前後の不整形円形を成す。埋土a1、a2層はにぶい黄褐色土を基本土とし、a1層は層厚4cmのやや硬質層で床面を構成している。

P9は床面の東端部に検出され、壁下溝Aの末端部と重複している。P9の検出面では溝Aは識別されず、断面でも確認されなかった。また、検出面で埋土中の大型土器片の端部が見られた。柱穴の深さは90cm、開口部は直径80~100cmの不整形円形で、底面は径23~35cmの楕円形となっている。断面形は底面から73~82°の角度で直状に立ち上がり、上縁部では屈曲して緩やかに立ち上がり床面に接する。埋土は底面から22cm前後までは軟質の暗褐色土b3層が見られ、その上位に堆積するb2層が柱穴をほぼ埋没させ、さらにb2層上面中央の深さ10cmほどの皿状の窪みに褐色土b1層が堆積している。b2層の上面及び層中には大型土器片と礫が含まれており、土器片はいずれも西に傾斜して出土している。



JH05 P4、壁下溝A、B(南→) Photo.36



壁下溝埋土断面(南→) Photo.37



P1埋土断面(南→) Photo.38



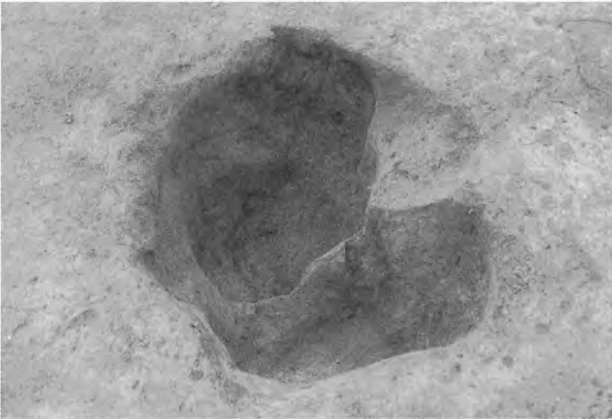
P2B埋土断面(北西→) Photo.39



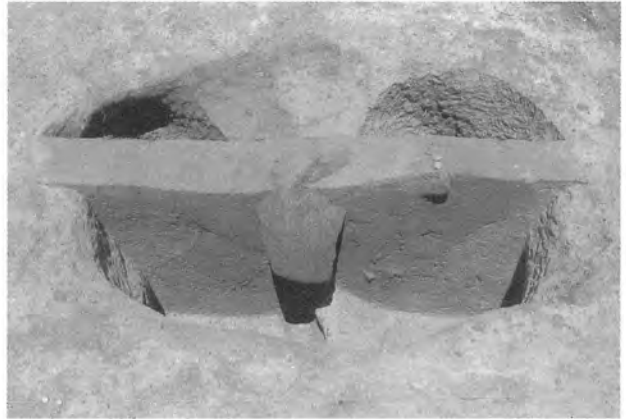
P2B埋土断面(北西→) Photo.40



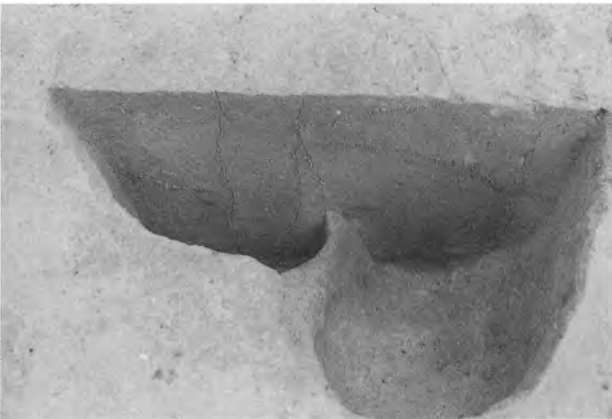
P3A埋土断面(南→) Photo.41



P4完掘状況(西→) Photo.42



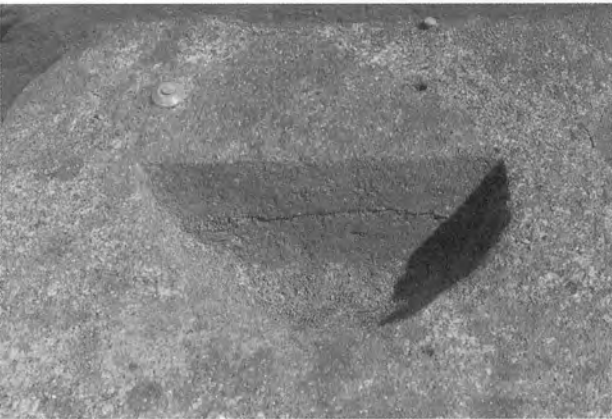
P4埋土断面(南→) Photo.43



P5埋土断面(南→) Photo.44



P6、P7埋土断面(南→) Photo.45

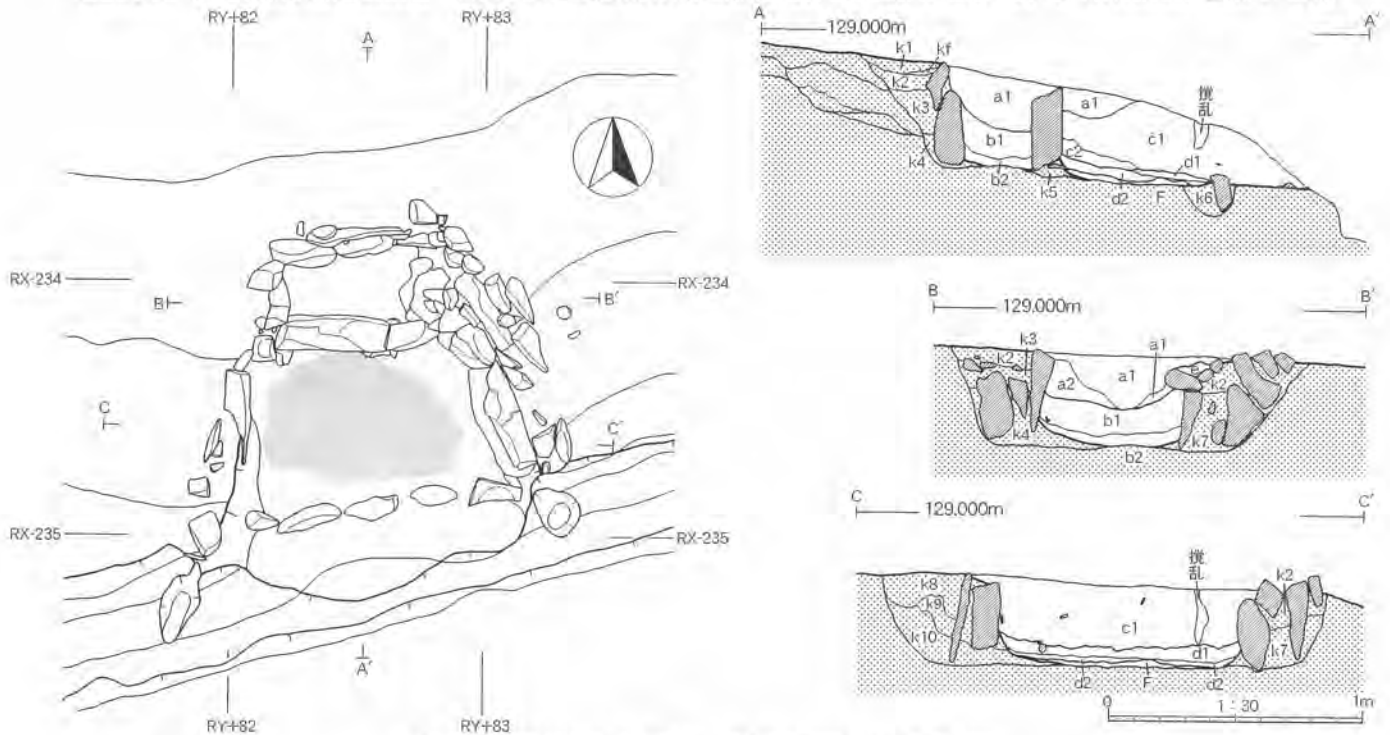


P8埋土断面(南→) Photo.46



P9埋土断面(南西→) Photo.47

複式炉は住居跡の南端中央に位置し、前庭部は耕作に伴う掘削によりほとんどが失われており、炉の全貌を確認することはできなかった。炉の残存部南端では攪乱により炉石が抜き取られた痕跡が見られ、その南は溝状の攪乱により完全に削り取られている。炉の形状は、北端部の石組みから南側の前庭部に向かって広がる台形状を呈し、東西両側縁は炉の中軸から各々約15°の角度で開き、中軸方向は座標北から2°ほど西に傾く。側縁の長さは、西側縁が南端の炉石痕跡まで1.64m、同じく東側縁は1.28m、炉石北縁幅は80cm、南端の炉石痕跡の東西間が1.7mとなっている。炉石はほぼ連続して配



第5号竪穴住居跡(JH05) 炉跡平面図、土層断面図

Fig.21

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
複式炉埋土	a1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土1%粉状 やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
	a2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土2%粒状 やや硬質、粒状構造
	b1	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色壤土1%粒状 やや硬質、粒状構造、土器、木炭粉微量
	b2	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉粒状 硬質、粉粒状構造
	c1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状 やや硬質、粉状構造、土器、木炭粉微量
	c2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土5%粉状 やや硬質、粉塊状構造、木炭粉微量
焼土混土	d1	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状 5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)2%粒状 やや硬質、粉粒状構造、土器、礫、木炭粉微量
	d2	7.5YR3/4 黒褐色壤土	5YR4/6 赤褐色砂壤土(焼土)5%粒状 やや硬質、粒状構造
混土焼土	E	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)	10YR3/4 暗褐色砂壤土3%粉粒状 硬質、粉粒状構造
焼土	F	5YR4/6 赤褐色砂壤土(焼土)	— 硬質
混土焼土	kf	2.5YR4/8 赤褐色壤土(焼土)	10YR3/4 暗褐色壤土3%粒状 極硬質、粒状構造、木炭粉粒7% 硬質、粉粒状構造
炉構築土	k1	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土2%粉状 2.5YR4/8 赤褐色壤土(焼土)2%粒状 硬質、粉粒状構造
	k2	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状 やや硬質、粉状構造、礫
	k3	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土1%粉状 やや硬質、粉状構造、礫
	k4	10YR4/6 褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状 やや硬質、粉状構造、礫
	k5	7.5YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状 硬質、粉状構造、礫
	k6	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 硬質、粉状構造
	k7	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状 硬質、粉状構造、礫
	k8	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/3 暗褐色壤土10%粒塊状 やや硬質、粉塊状構造、礫
	k9	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状 やや硬質、粉状構造
	k10	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 硬質、粉状構造
床面構築土	L	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土3%粉状 硬質、粉状構造
旧炉跡埋土	M1	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
	M2	10YR4/4 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土5%粉状 やや硬質、粉状構造
旧炉跡焼土	Mf	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)	10YR3/4 暗褐色壤土1%粉状 硬質、粉状構造
構築土下埋土	N	10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 硬質、粉状構造
		10YR5/6 黄褐色砂壤土3%粉状	

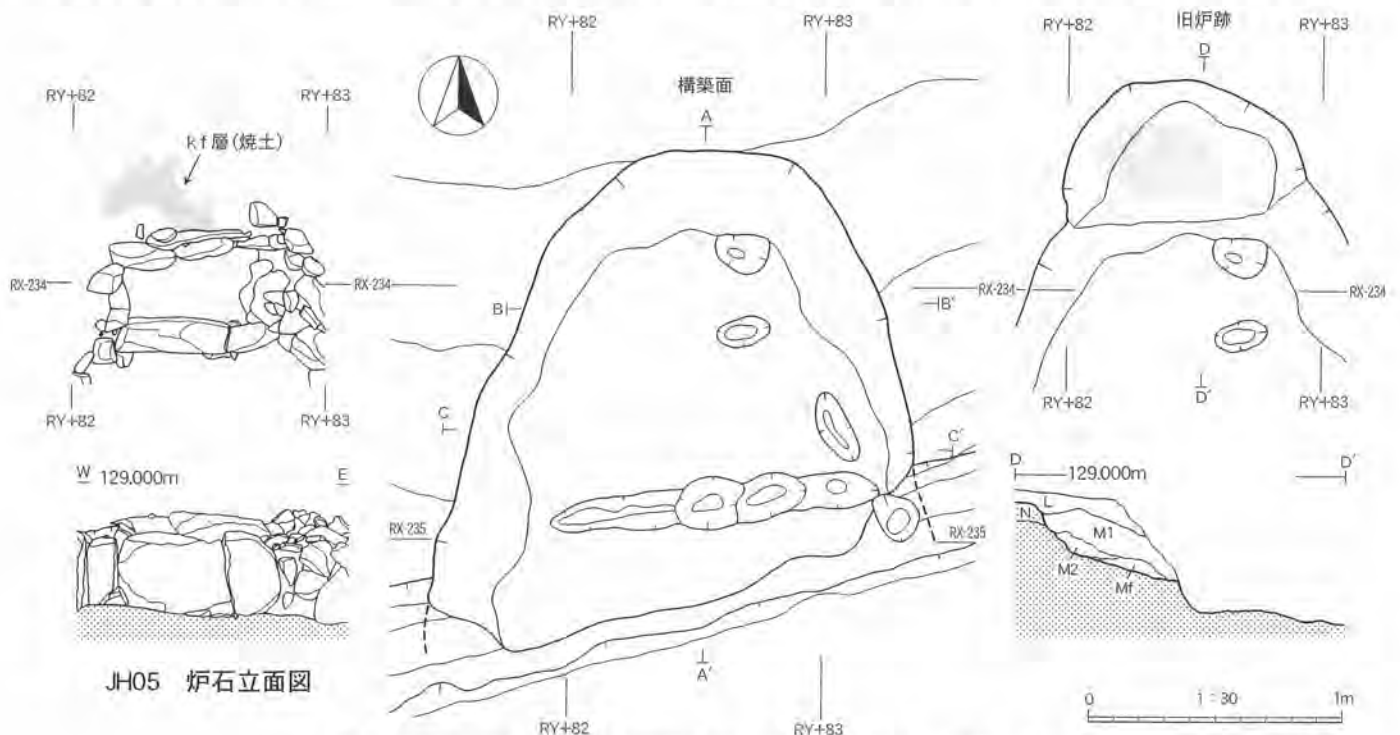
土層観察表

置され、北東部では多数の石により幅40cmほどの礫群となって炉を形成している。前庭部は北側を限る石列と東西両翼の炉石痕跡及び底面の北縁が残存している。底面の標高は128.4m前後で若干南に傾斜し、焼土は見られない。前庭部北縁の石列は5個の石から成り東西方向に1.1mの長さで配置され、これらの石は底面に掘られた深さ8~15cm、幅15~20cmの溝に埋設され、暗褐色土K6層で固定されている。この石列の北部は板状の石により二区画に区分されており、その南側の区画(0区画)の底面には焼土が見られる。

0区画の底面は東西86~97cm、南北52~67cmの台形状を成し面積は0.51㎡、検出面からの深さは30cm前後、標高は128.40~128.45mで若干南に傾斜する。焼土F層は東西79cm、南北53cmに広がりその面積は0.31㎡で、0区画底面の約6割を占めている。F層は赤褐色を呈し硬くしまっており、層厚は最大3cmで層の下部は漸移的に基盤土に変化する。0区画の北に区切られた部分(C区画)は、東西50cm前後、南北20~30cmのほぼ長方形の底面を成し面積は0.11㎡、検出面からの深さは35cm前後、標高は128.48m前後で若干南に傾斜している。底面には焼土は見られず、硬質の黒褐色土b2層が5cmほどの層厚で堆積する。C区画東側の炉石上には焼土E層が部分的に見られる。C区画から前庭部にかけての底面は、全体に南に傾斜し南北断面での高低差は10cmとなっており、基盤土を削り出しそのまま底面としている。

なお、複式炉の全体規模については、南半部が失われており概略の推定となるが、他の調査例から前庭部を類推すると、長軸は2.5m前後、面積は3.3㎡ほどになるものと想定される。

埋土は、C区画ではb2層の上に黒褐色土b1層が層厚10~15cmで堆積し、さらに東西方向から暗褐色土のa2層が流入し、その窪みにa1層が堆積して炉を埋没させている。0区画では北側最上位にa1層が見られ、0区画から前庭部には最大層厚27cmの暗褐色土c1層が広く堆積して前庭部底面を覆土し、ここでの埋土の主体を占めている。0区画ではc1層の下位に暗褐色土c2層、黒褐色土d1層、暗褐色土d2層が層厚2~7cmで薄く部分的に堆積し、焼土F層を覆っている。炉は構築面を掘り込んだ後、構築土K層と炉石の配置・埋設によって形成されている。K層はK1~K10層から成り、最下位の構築土



第5号竪穴住居跡(JH05)炉跡構築面、旧炉跡平面図、土層断面図

Fig.22

K4、K5、K7、K10層は炉側面を構成する石の下端部を固定すると共に、東西両側縁では構築面の立ち上がりとの間に多数の石を埋設・充填しており、これらの石の中には上位の構築土により完全に覆土され床面下に埋没しているものもある。中位の構築土K3、K9層は炉の西から北側に見られ、C区画の東西断面ではK3層はK4層に埋設された石を覆土し、その上面には小礫が分布する。K2層は北端部を除く部分で最上位にあり、炉の西側では床面を構成し、東側ではさらに石を埋設して側縁の礫群を形成している。北端部ではK2層の上面は深さ5cmほどの窪みとなっており、ここには極めて硬い焼土Kf層が見られる。Kf層は東西45cm、南北15cmほどの不整形な範囲に広がり、層厚は最大2cmで木炭の粉粒を含み、層下半は木炭層となっている。K1層は焼土粒を混ざる硬質の暗褐色土で、Kf、K2層を覆土し床面を構成している。Kf層は床面下の炉の外にあり、極めて硬く炉内の焼土F層とは断面状態が異なることから、再堆積の焼土と考えられるが、その性格については不詳である。

炉の構築当初の掘り込みは、残存部分の最大幅約2m、南北は1.9mほどあり、底面には炉石設置に伴う落ち込みが見られる。この掘り込みの北には、床面構築土の下にさらに別の掘り込みが確認された。これは深さ20～25cmで、東西96cm、南北56cmの半楕円形を成し、南側は複式炉の構築面によって失われている。埋土は黒褐色土M1層、褐色土M2層から成り、底面には硬質の焼土Mf層が見られる。この掘り込みには炉石設置の痕跡は残されていないが、焼土の存在から複式炉以前の旧期の炉(炉跡A)の構築面と考えられ、炉の造り替えが行われていたことを示している。また、この構築面の北には硬質の褐色土N層が見られ、M1層に切られた状態となっている。N層については、旧期以前の何らかの落ち込みの埋土である可能性、あるいは複式炉のK1、K2層と床面構築土L層との関係と同様に、N層が旧期の炉に伴う床面構築土となる可能性が想定されるが、柱穴の重複状況などでは新旧二時期の変遷過程が見られることから、N層の性格については後者の可能性が高いと考えられる。

複式炉構築面の最終確認の際に、構築面西側中央の底面から壁に至る位置ではほぼ完形の擦切磨製石斧が1点出土した。隣接する部分で遺構外の土層状況を確認したところ、出土地点はVI層下半部に相当する位置で、これには遺物は含まれておらず、遺構外の土層に包含されていた遺物である可能性は低く、この石斧は複式炉の構築当初に埋納された遺物と考えられる。

以上のとおり、遺構精査の結果、柱穴、壁、炉には新旧二時期の重複が見られることが確認された。次に、これら各期の遺構構成と変遷経過について述べる。なお、Aは旧期を、Bは新期を表す。

・第5号竪穴住居跡-A(JH05-A)

柱穴P1A、P2A、P3A、P4A、P5A、P6、P8と壁下溝A及び炉跡Aによって構成される住居跡で、これに伴う壁は残存しておらず、東壁は壁下溝Aによりその位置を知ることができる。P1A、P2A、P4A、P5A、炉跡Aは埋土の切り合い関係から、またP3A、P6、P8、壁下溝Aは埋土状況、床面との関係などから旧期と判断される。

P8は小型で浅く、他の柱穴配置に対し不規則な位置にあり、構造上の機能は不詳である。P6は深さ15cmと浅いが、配置上不可欠な位置にあり、柱穴と考えられる。他の柱穴は深さ

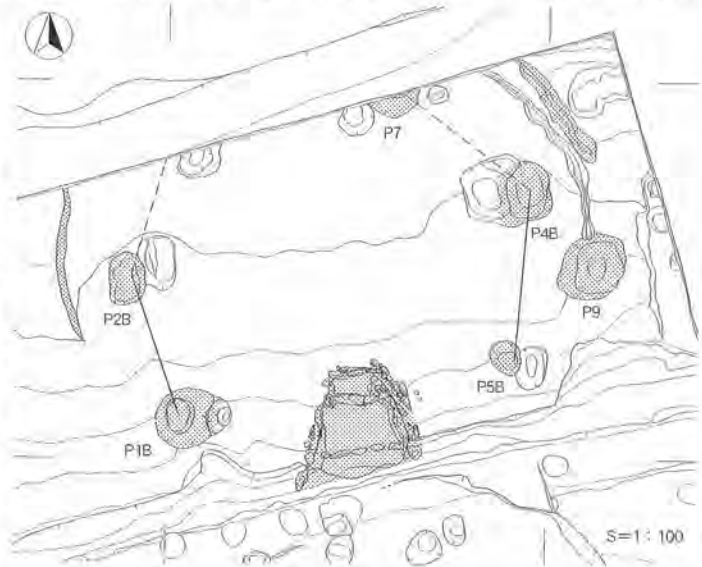


45～66cmで、底面の標高は128.21～128.44mとなっている。

柱穴中心間の距離は、P1A-P2A=226cm、P2A-P3A=139cm、P3A-P6=218cm、P6-P4A=202cm、P4A-P5A=234cmで、P2A-P3Aの間が狭いが他は220cm前後の間隔となっている。東西の柱穴間隔はP1A-P5A=408cm、P2A-P4A=434cmで、これらを結ぶ線はほぼ平行する。柱穴配置は南端部を欠いているため完結していないが、ほぼ六角形の構成になるものとみられる。壁と柱穴との間隔は、P4Aの中心と壁下溝Aの東縁が130cmあり、柱穴配置との関係から西壁位置を想定すると、住居跡の規模は東西約6.8mと推定される。

・第5号竪穴住居跡-B(JH05-B)

柱穴P1B、P2B、P4B、P5B、P7、P9と、東西壁及び複式炉によって構成される住居跡で、P1B、P2B、P4B、P5Bは埋土の切り合い関係から新期と判断される。またP7は、柱穴上縁部の緩やかな落ち込みを住居跡埋土B層が覆土していることから、埋没直前には窪みとして残っていたことになる。これは柱の抜き取り穴が放置されたものと推定され、新期の柱穴と考えられる。P9は深さが90cmあり検出柱穴中で最も規模が大きなもの、旧期の壁下溝Aを切っており、新期に属すると考



JH05-B平面図

Fig.24

えられる。しかしP9は柱穴配置上不可解な位置にあり、断面形状から土坑とも考えられず、上屋の構成においてどのように機能していたかは不詳である。他の柱穴は深さ50～60cmで、底面の標高は128.27～128.38mとなっている。柱穴中心間の距離は、P1B-P2B=196cm、P4B-P5B=220cm、東西柱穴ではP1B-P5B=448cm、P2B-P4B=536cmで、これらを結ぶ線はほぼ平行する。柱穴と壁との間隔はP4Bの中心と東壁間が110cm、P2Bの中心と西壁間が98cmとなっている。柱穴配置は、A期とほぼ同様であるがやや不整な六角形の構成を成すと想定され、また住居跡の規模は東西約7.5mと推定される。

これらA期からB期への変遷経過、さらに住居の廃絶から埋没の過程は、次のとおりとなる。まず、推定規模が東西6.8m、東壁の直下に溝を伴い、柱穴配置をほぼ六角形とするA期の住居跡(JH05-A)が構築される。この住居跡の床面南半には、構築面の掘り込みが深さ25cmを越しB期の複式炉より浅い炉が設けられる。この炉は残存部の規模からB期の炉より規模の小さなものとみられ、またその位置から複式炉の可能性も考えられる。JH05-Aの使用の後、何らかの理由でJH05-Bへの改築が行われる。これは東西推定規模を6.8mから7.5mへと広げる住居の拡張で、床面をほぼ同一面とし住居跡の中心位置を変えずに行われており、時間的な連続性があるとみられる。改築にあたってJH05-Aの柱は抜き取られ、隣接してB期の柱穴が掘り込まれるとともに、A期の柱穴は埋め戻される。柱穴配置はやや不整な六角形とし、拡張に伴い柱位置はP5Bを除き外側に50～60cm移動される。P5Bはこれとは逆に内側に28cm柱穴を移しており、その理由は不明であるがP9との何らかの関係による可能性もある。床面には複式炉が設けられ、JH05-Bが使用される。JH05-Bの廃絶に伴いP1、P4、P9の柱は抜き取られ、住居跡は埋土B層により埋没していく。埋没途中には土器、礫を含む土砂が廃棄されるなど人為的な関与が成され、A5層堆積後に能動的な行為が成されている。これらの経過を経て住居跡は完全に埋没し、後に近來の攪乱を受けることとなる。



JHO5複式炉(南東→)

Photo.48



JHO5複式炉(西→)

Photo.49



JHO5複式炉(北→)

Photo.50



C区画埋土断面(南西→)

Photo.51



C区画E層(北西→)

Photo.52



埋土断面(sec.B-B') (南東→) Photo.53



埋土断面(sec.A-A') (西→) Photo.54



0 区画焼土F (南→) Photo.55



炉石立面 (南→) Photo.56



焼土Kf (北西→) Photo.57



炉構築面 (南→) Photo.58



旧炉構築面 (南→) Photo.59



旧炉埋土M1, M2, Mf層 (南西→) Photo.60

・出土遺物

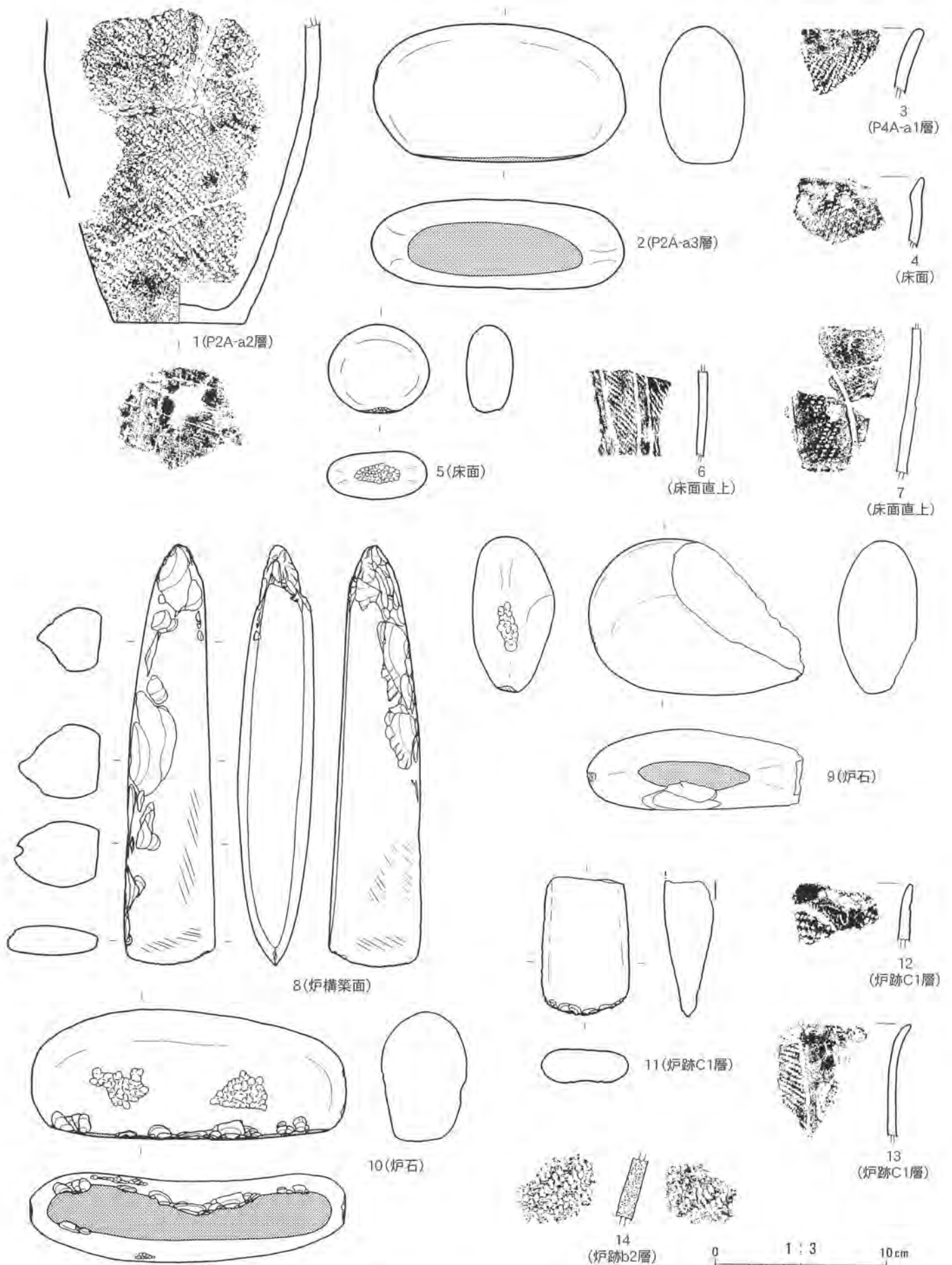
第5号竪穴住居跡では埋土中からの遺物が多く、柱穴・炉跡からも遺物は見られたが、床面及び直上の遺物は少量であった。ここでは、住居跡の新旧変遷過程(A期→B期)に沿って遺物を提示し報告する。

1～3はA期(旧期)に伴う遺物である。A期の遺物は柱穴の埋土から出土したもののみで、旧期炉跡(炉跡A)の埋土M1、M2層には遺物は見られなかった。1は柱穴P2Aの埋土a2層から出土した粗製深鉢形土器で、底径76mm、器厚7mm前後、底部厚11mm、体部は縄文(LR)が施され意匠文は見られず、底面には線状の圧痕が見られ、菱形に交差している。2はP2A-a3層出土の片側縁に磨面をもつ磨石で、長さ147mm、幅80.6mm、厚さ52.6mm、重さ940.3g、磨面の長さ101mm、幅30mm、長軸端部に8×9mmほどの小さな敲打痕が見られる。3はP4Aの埋土a1層から出土した口縁部小片で、口縁に1～2cmの未施文部分を残し縄文(LR)を施している。なお、柱穴P2A、P4Aには柱痕は見られず、埋土a層は柱抜き取り後の埋土と考えられ、A期の終末に位置付けられる堆積層である。

4～7は床面及び床面直上から出土したB期(新期)の遺物である。4は床面出土のやや外反する口縁部小片で、複節縄文(RL)が施文されている。5は複式炉付近の床面から出土した敲打痕をもつ扁平小円礫で、軸長が51mm及び59mmの楕円形を成し、厚さは27mm、重さ117g、側縁の一部に長さ22.5mm、幅12mmのやや粗い敲打痕がある。6は縦位直状の施文帯(縄文LR)と無文帯が浅い沈線で区画されており、施文帯の幅は12～15mm、無文帯の幅は5mm前後で、大木9式の土器である。7はやや弧状の沈線区画内に荒く縄文(RL)が施されている。

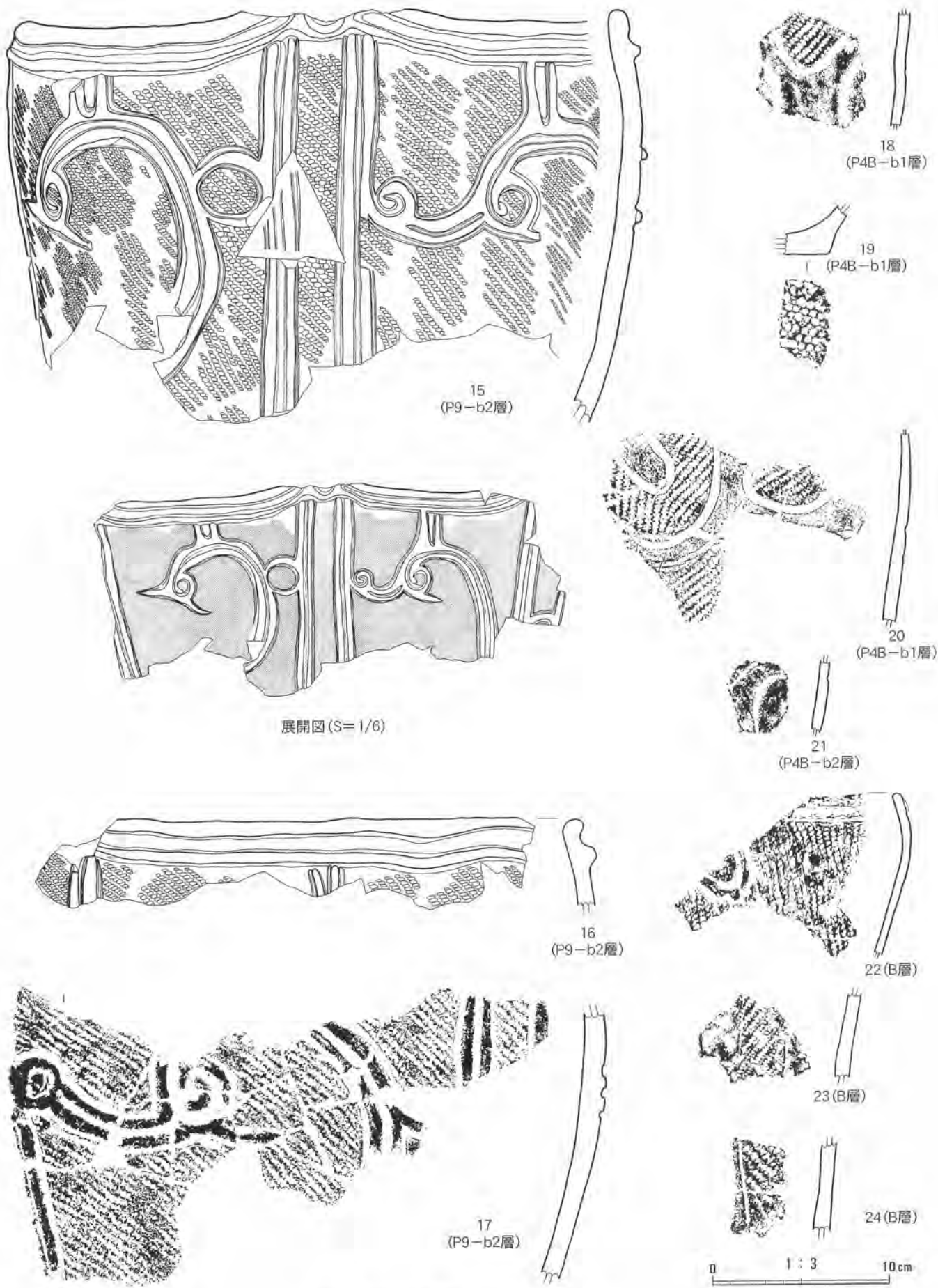
8～14は炉跡から出土した遺物である。8は複式炉の構築面から出土した完形の擦切磨製石斧で、炉の構築時に埋納されたと考えられるものである。長さ245mm、幅51.3mm、厚さ42mm、重さ774.3g、刃部幅は50mm、石材は流紋岩とみられ緑色を呈している。片側縁に最大幅30mmの擦り切り面が見られ、一方の側縁は大剥離面を残し稜を成す。擦り切り面の中央長軸方向には幅7mm前後の筋状に僅かに高まる部分が観察され、両面からの擦り切り痕跡とみられる。石斧の背腹面は深く剥離した部分を除き極めて滑らかに研磨されているが、斜方向の線状の整形擦痕も見られる。9、10は複式炉の炉石として埋設されていた磨石である。9は欠損品で、現存長124.4mm、幅89mm、厚さ45.4mm、重さ549.1g、片側縁に長さ64mm、最大幅14.4mmのやや粗い磨面が見られ、長軸端部には長さ29mm、幅10mmの敲打痕がある。10は片側縁に磨面をもつ完形の磨石で、長さ184mm、幅75mm、厚さ49mm、重さ1,014g、磨面はやや粗く長さ165mm、最大幅28mmである。長軸両端と背腹面には敲打痕が見られる。11～14は複式炉の埋土から出土した遺物で、B期(新期)住居跡廃絶後の時期となる。11は石斧の基部欠損品で、現存長78mm、幅50.9mm、厚さ29.9mm、刃部幅44mm、重さ186.6g、器面は粗く整形敲打痕が残されている。12は口縁部小破片で、弧状の沈線により施文帯(縄文LR)が区画されている。13は外反する口縁部で、縦位直状と弧状の沈線によって施文帯(縄文LR)区画されている。14は胎土に繊維を含み内外面に縄文(LR)を施した土器である。

15～21はB期の柱穴から出土した土器であるが、いずれも柱の抜き取り後の埋土中遺物でB期住居跡廃絶後に位置付けられる。15～17は柱穴P9のb2層から大型の破片で出土したもので、これらは同一個体であり、口縁部がやや内傾し小突起を4ヶ所もつ推定口径37cmほどの大型甕となる。文様は沈線で調整された隆線で表され、突起部から垂下する二条一組の平行隆線が大きく文様帯を縦に四分割し、各区画には、垂下隆線に接する小渦巻文から刺状突起を伴う小渦巻文に連弧し開いた大渦巻文に至る文様と、垂下隆線に接する小渦巻文を欠き、大渦巻文の右肩に円形文が付され、次の垂下隆線に



第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物

Fig.25
45



第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物

Fig.26

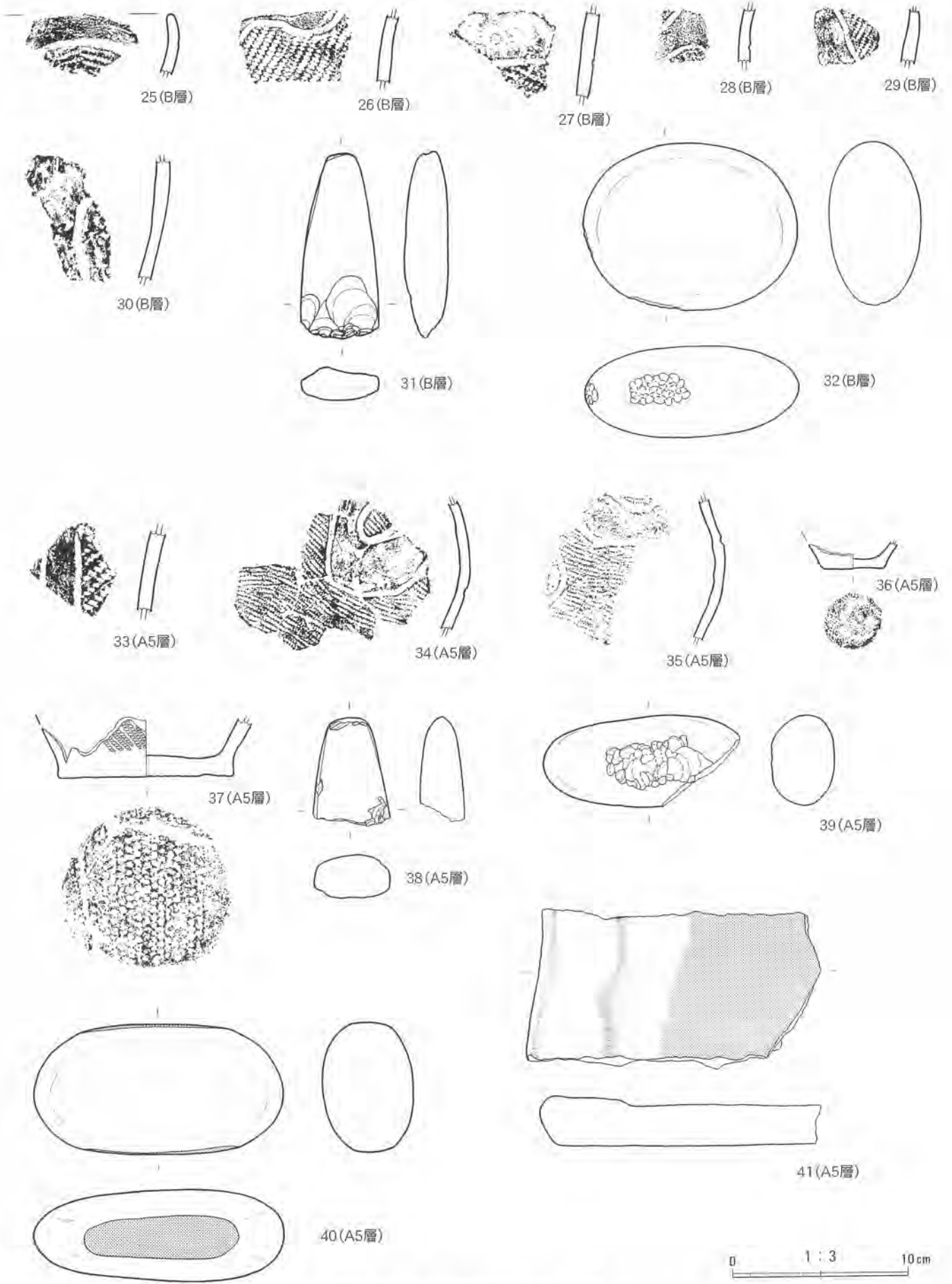
接する文様構成が見られ、大木8b式の後半段階の土器と考えられる。18～21はP4Bから出土した土器で、18は弧状に隣接する沈線によって区画された施文帯(縄文RL)が見られる。19は網代痕のある底部で、網代の編み方は経の条に対し緯の条が一本超え一本潜り一本送りとみられる。20は無文帯と施文帯(縄文RL)が入り組んだ文様構成を持つ土器で、大木10式期である。21は沈線で区画された弧状の施文帯(縄文RL)が見られる。

22～32は住居跡の埋没当初の埋土であるB層から出土した遺物である。22は地文(縄文RL)に浅い沈線で調整された隆線によって弧状の文様が付され、内傾する口縁部には隆線が貼り付けられていた痕跡が見られる。23、24は直状に垂下する施文帯が見られる。25～30は、やや幅が広く浅い沈線で弧状、波状あるいは横位に施文帯を区画している。31は石斧の欠損品を再加工して刃部を形成したもので、長さは104.4mm、幅44mm、厚さ24.9mm、重さは177.2gである。32は側縁と長軸端に敲打痕が見られる円礫で、長さ121.3mm、幅95.2mm、厚さ52mm、重さ911.5g、敲打痕の大きさは18×35mm、15×24mmとなっている。

33以降の遺物は埋土B層の上位に堆積するA層から出土したものである。A層には多くの遺物と礫が含まれ、細分各層は小範囲に堆積しており、人為的に形成された遺物廃棄層である。住居跡の廃絶後、B層の堆積経過を経て形成され、埋没過程の後半期に位置する。33～41はA層最下層のA5層から出土した遺物である。33は直状に垂下する施文帯(縄文RL)と幅15mmほどの無文帯が見られる。34、35は同一個体で、入り組んだ無文帯で文様が構成され体部は湾曲している。36は小型土器の底部で、底径33mm、器厚3mm、底部厚は6mmである。37は網代痕のある底部で、底径10cm、器厚7mm、底部厚10～12mm、網代の編み方は経の条に対し緯の条が一本超え一本潜り一本送りとみられる。38は磨製石斧の基部で、現存長60.8mm、幅42.4mm、厚さ24.3mm、重さ95.8gである。39は両面に浅い敲打痕が見られる砂岩の円礫で、現存長111.2mm、幅50.8mm、厚さ37mm、重さは243.2gである。40は両側縁に磨面をもつ磨石で、長さ141.8mm、幅74mm、厚さ52mm、重さ862.2g、磨面の大きさは88×23.4mm及び83.7×23mmである。41は砂岩の砥石破片である。研磨面は極めて滑らかで、厚さは23mm、側縁部でやや厚くなり28.6mmとなっている。

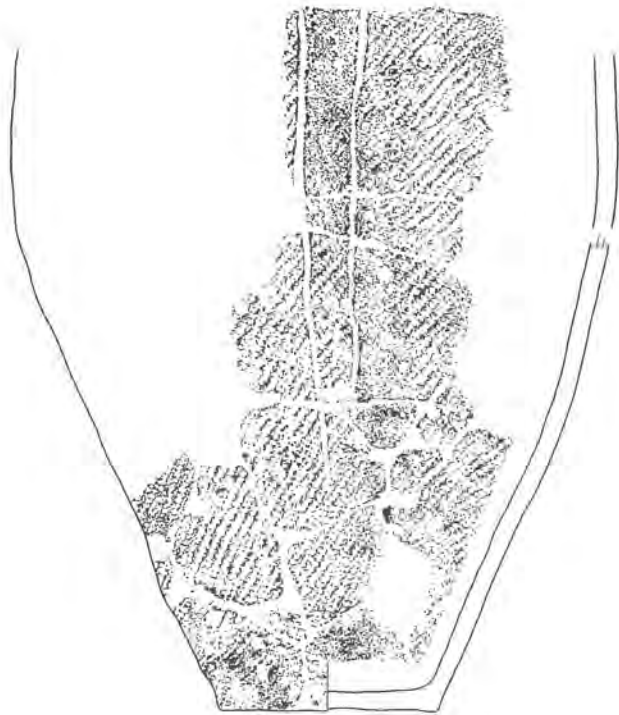
42～51はA4層から出土した遺物である。42は垂下する無文帯をもつ土器で、器厚8mm前後、底径86mmで、無文帯は二条一組の沈線で区画され最大幅は2cmほどあり一部に地文(縄文RL)が残されているが、四帯がほぼ均等に配置されている。大木9式の土器である。43は口径21.5cm、口縁部が外反し胴部がやや膨らむ深鉢形土器で、棒状に垂下する施文帯の間にC字状の施文帯が配されている。無文帯が卓越するが、縦方向の文様構成が残存しており、大木9式の終末段階の土器と考えられる。44～47は浅い沈線で区画された施文帯と無文帯が入り組んだ文様で構成される土器で、大木10式である。48は木葉痕が見られる底部で、器厚9mm前後、底部厚13mm、底径は110mmである。49は網代痕のある底部で、底径82mm、器厚8mm、底部厚11～13mm、網代の編み方は経の条に対し緯の条が一本超え一本潜り一本送りとみられる。50は片側縁に磨面をもつ磨石の欠損品で、現存長117mm、幅80.4mm、厚さ56.6mm、重さ870.7g、磨面は長さ88.6mm、最大幅30mmである。51は、つまみ部を有し弧状の刃部をもつ搔器で、長さ43.4mm、幅39.6mm、最大厚6.7mm、重量は7.4gあり、腹面はつまみ部形成の剝離のみで、大きく一次剝離面を残している。

52～56はA2層から出土した土器である。52は沈線で区画された施文帯(縄文LR)と無文帯が入り組んだ文様構成となっている。53は胴部上半が内湾する小型土器で、底径5cm、最大径10.9cm、器厚4.5～5mm、底部厚は8～10mmである。沈線で囲まれた施文帯(縄文LR)が上下に蛇行する文様構成と

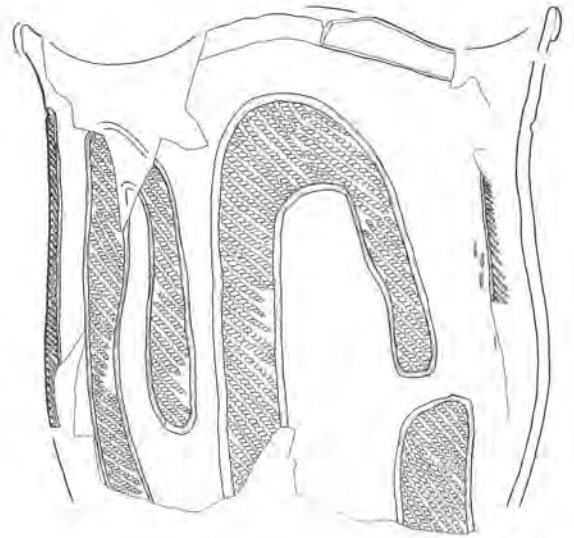


第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物

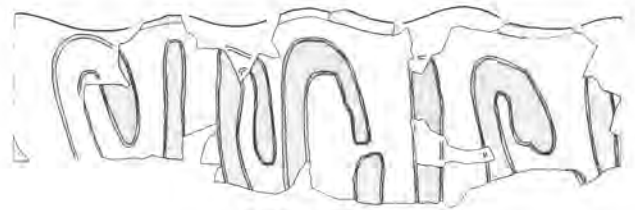
Fig.27



42(A4層)



43(A4層)



展開図 (S=1/8)



展開図 (S=1/12)



45(A4層)



46(A4層)



44(A4層)



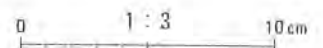
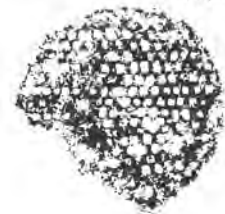
48(A4層)



49(A4層)

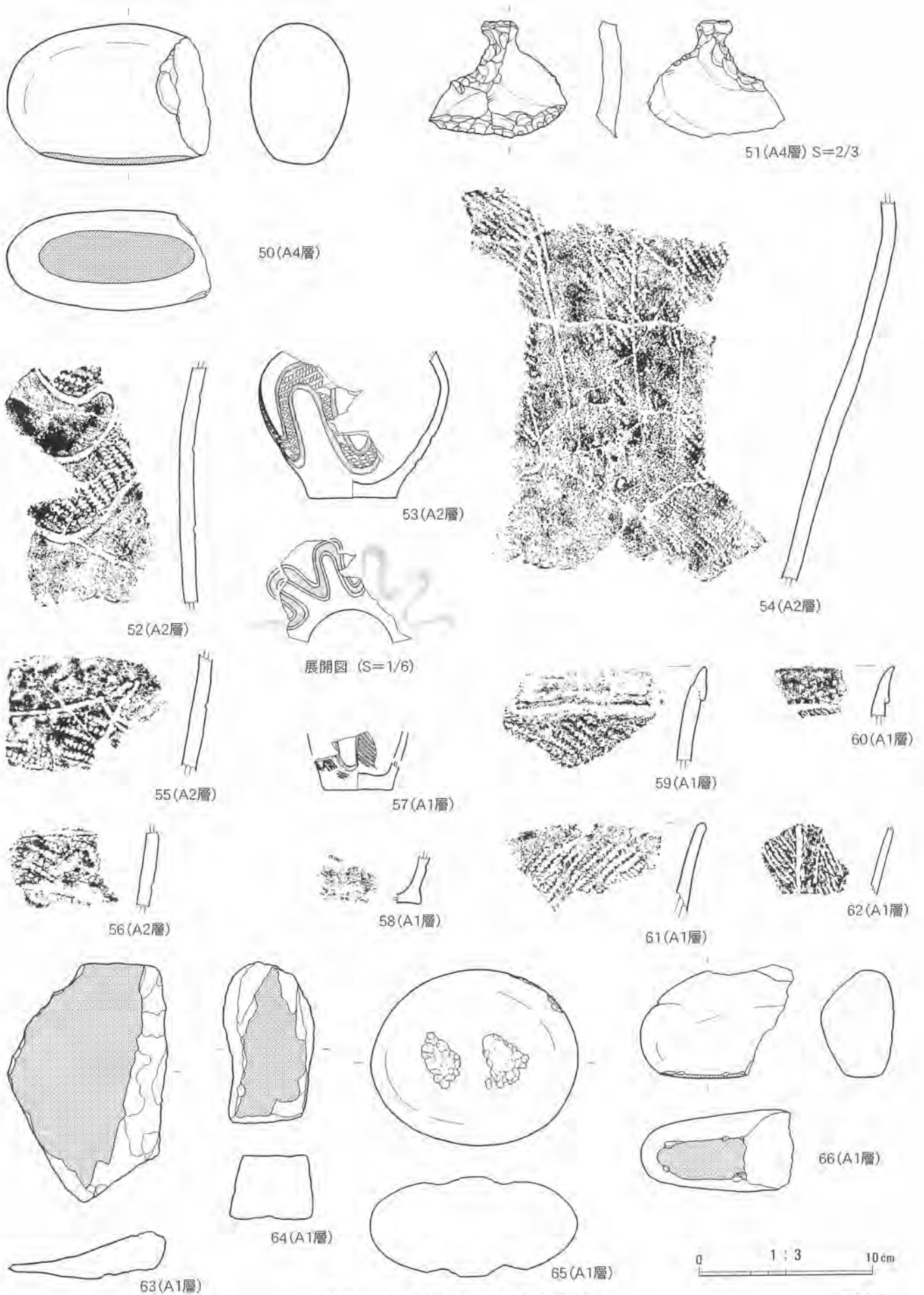


47(A4層)



第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物

Fig.28
49



第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物

Fig.29

なっており、大木10式である。54は沈線で区画された垂下する無文帯をもつ大木9式の土器で、無文帯の幅は20～25mmあり一部に地文(縄文RL)が残されている。55、56は横位の弧状・直状の沈線で区画された施文帯(縄文LR)が見られる。

57～66はA1層から出土した遺物である。57は底径37mmの小型土器で、器厚3.5～4mm、底部厚は7～9mm、沈線でU字状に区画された無文部分が見られ、地文は細微な縄文(LR)が施されている。58は推定底径7cmほどの土器底部で、幅3mmほどの浅い弧状の沈線が見られる。59、60は隆帯貼付による肥厚する口縁部をもつもので、60には肥厚部下端に5mmほどの間隔で刻み目が付けられている。61は外反する口縁部で縄文(RL)が施されている。62は沈線で区画された幅1cmほどの無文帯が垂下し、地文はLR縄文である。63、64は砂岩の砥石破片であるが、岩質は異なっており63はやや緻密で硬く、64は白色砂粒を含み粗く脆い。63は両面に研磨面が見られ、その断面は大きく弧状を成す。厚さは最大23mmあるが、研磨面の端部では3.5mmと薄くなっている。64は一面のみに平滑な研磨面が見られ、厚さは38mmである。65は両面に各々二ヶ所の凹部が見られるくぼみ石で、長軸118mm、短軸99.4mm、厚さ57.5mm、重さ996.5g、凹部の大きさは30.7～32.8mm、幅18～24.3mmで、深さは3～5mmとなっており、側縁の一部に長さ38mm幅17mmの敲打痕がある。66は磨石の欠損品で、現存長92.6mm、幅64.3mm、厚さ47.2mm、磨面長さ51.5mm、幅22.3mm、重さ309.5g、器面の一部に黒色の炭化物が付着している。

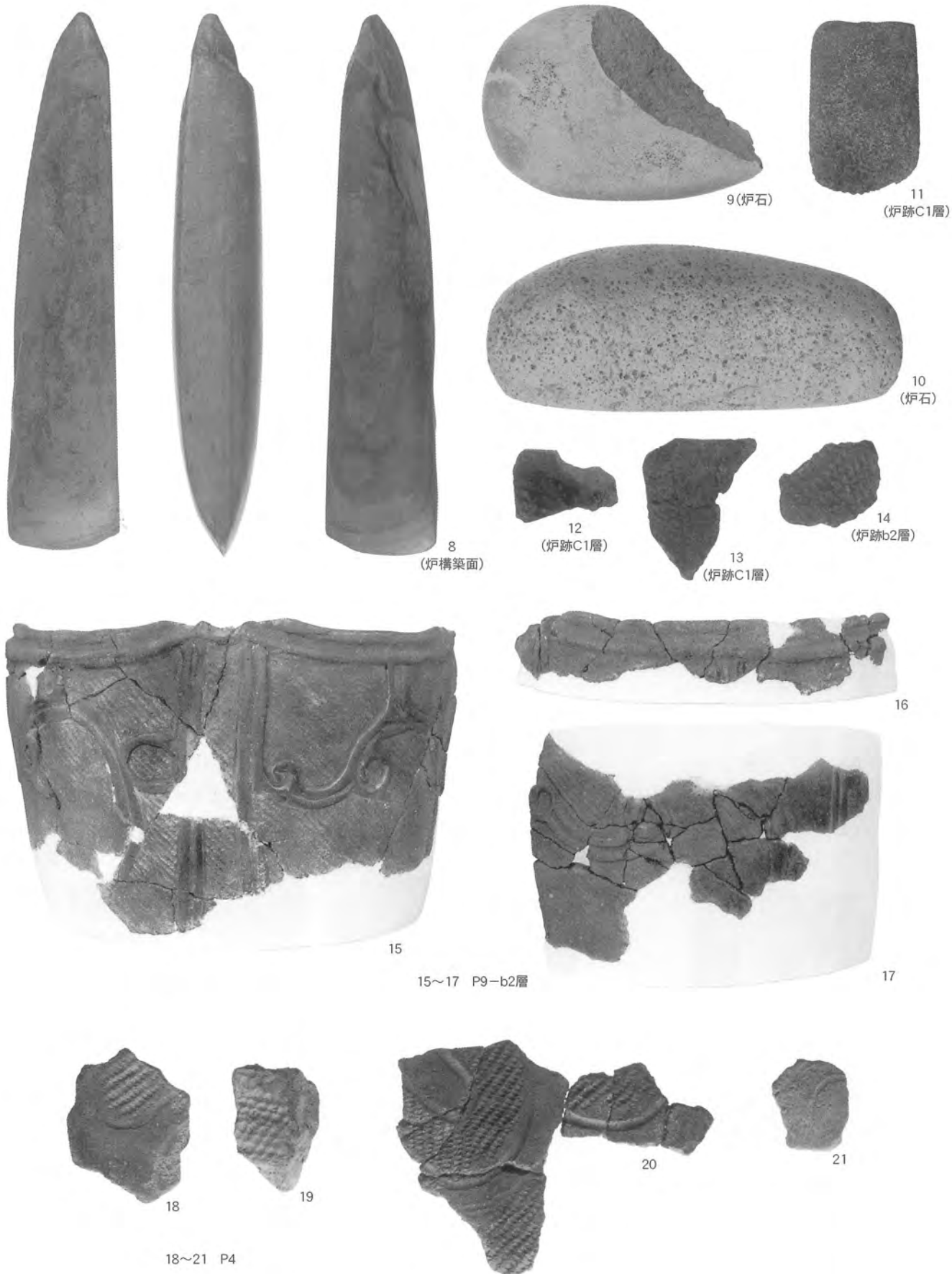
以上の出土遺物を新旧(A期→B期)の遺構変遷過程の順に要約する。A期の末及びB期生活面に位置付けられる遺物は粗製土器、口縁部小片と礫石器であり、時代を特定する資料は見られず、B期生活面直上からは大木9式に属する土器(Fig25-6)が出土している。B期住居跡廃絶後に位置付けられる柱穴抜き取り穴の埋土からは、大木10式(Fig26-20)、大木8b式(Fig26-15～17)が出土している。住居跡の埋没当初の埋土B層には大木10式とみられる土器が含まれ、埋没過程の後半期に位置するA層では、A5層から大木10式(Fig27-34、35)、A4層から大木10式(Fig28-44～47)、大木9式(Fig28-42、43)、A2層から大木10式(Fig29-52、53)、大木9式(Fig29-54)、A1層からは大木9式(Fig29-62)が出土している。

住居跡廃絶後の埋土遺物は大木8b～10式が混在しており、床面直上からは大木9式の土器が出土している。このことから、第5号竪穴住居跡(B期)は大木9式期に属すると考えられる。



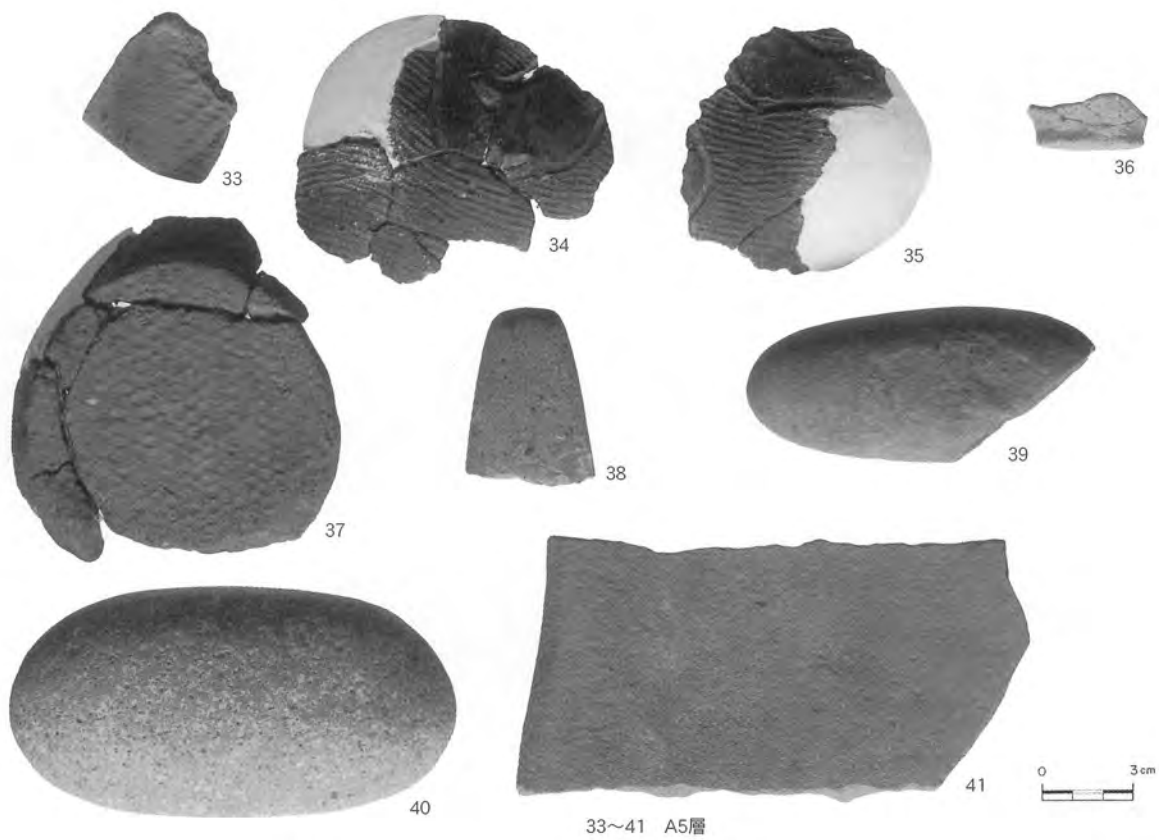
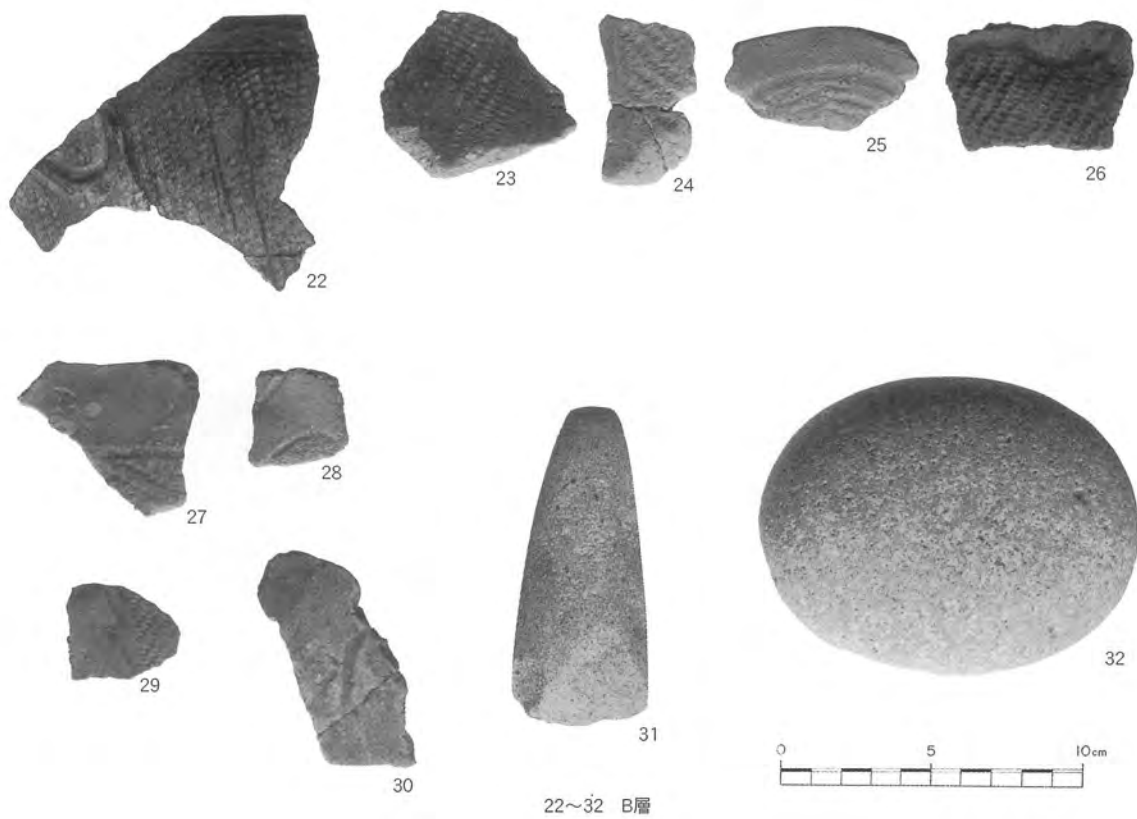
第5号竪穴住居跡(JH05)出土遺物

Photo.61



第5号竖穴住居跡(JH05)出土遺物 (S=2/5)

Photo.62



第5号竖穴住居跡(JH05) B、A5層出土遺物 (S=2/5)

Photo.63



42



43



44



45



46



49



47



48



50

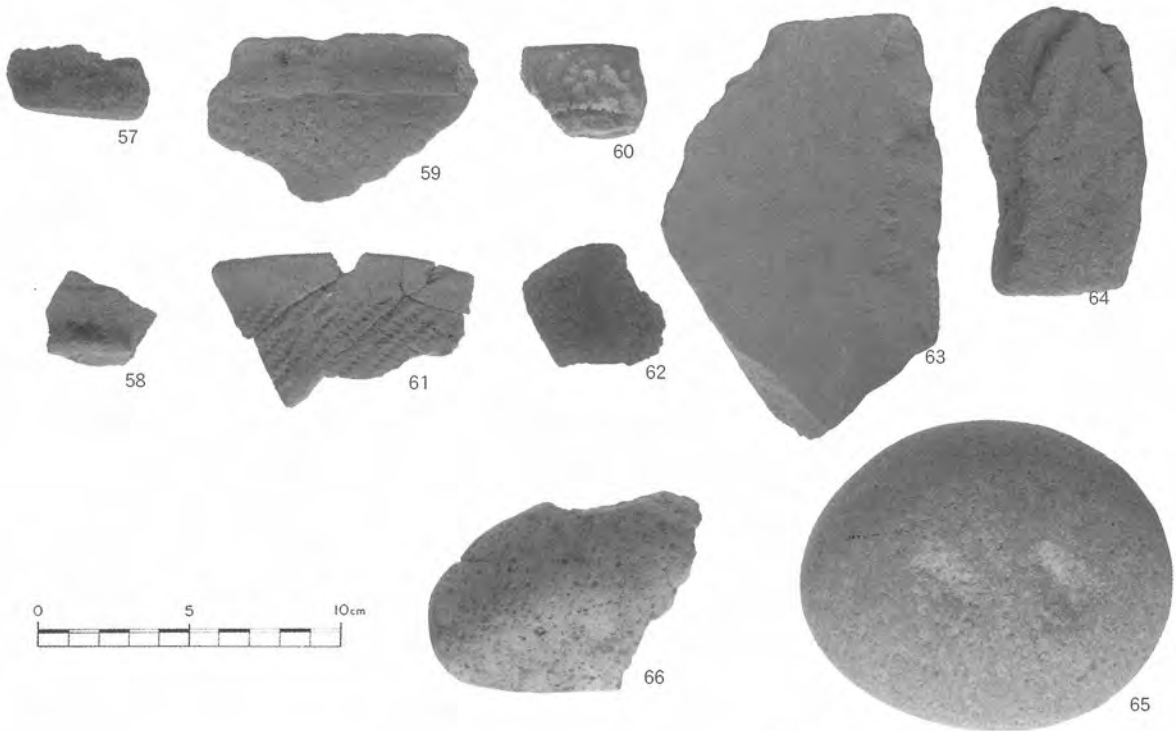
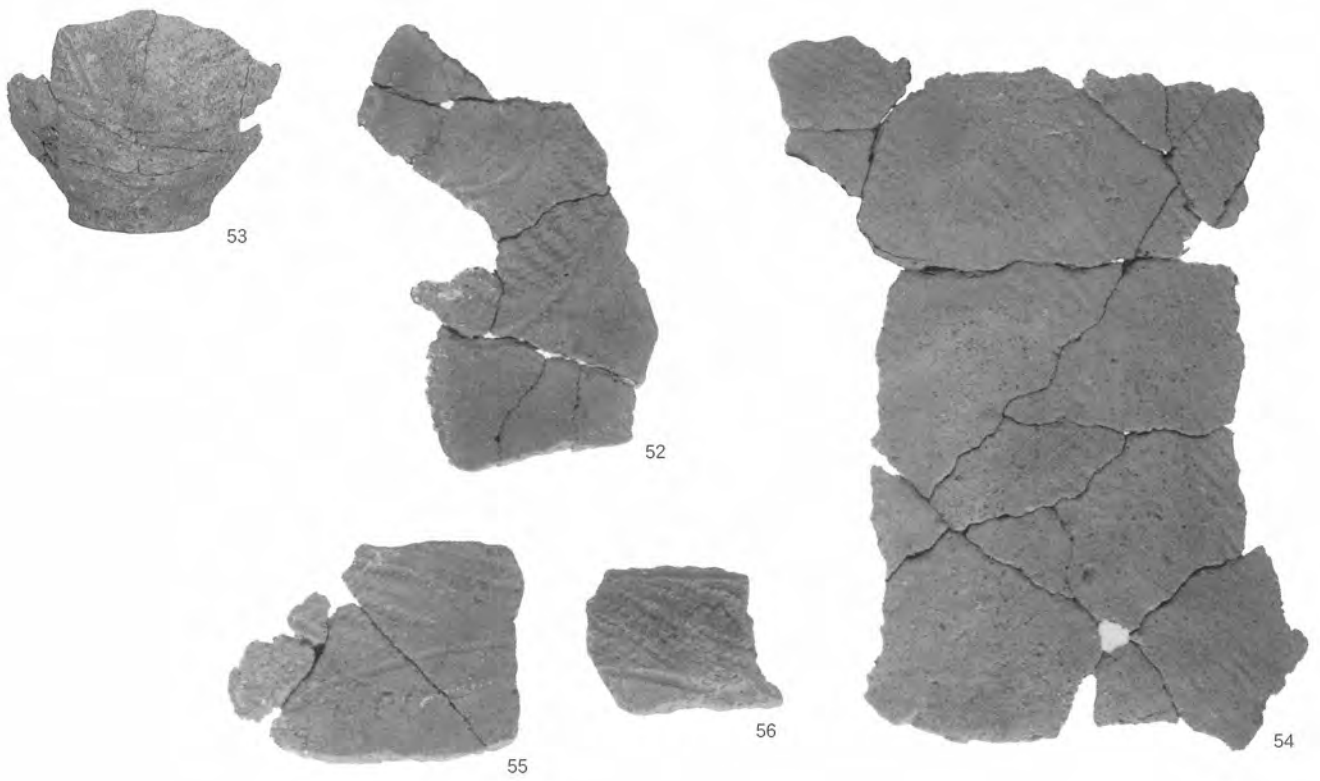


51



第5号竖穴住居跡(JH05) A4層出土遺物

Photo.64



57~66 A1層

第5号竖穴住居跡(JH05) A2、A1層出土遺物

Photo.65

(5) 第6号竪穴住居跡(JH06)

調査地区南半の第4号住居跡(JH04)に重複する位置に確認されたもので、JH04の床面下位の精査により複式炉1基、焼土2基、柱穴17基及び壁の一部が検出された。17基の柱穴のうち2基については前述のとおりJH04に帰属するものと考えられるが、他に15基の柱穴が検出されており、これらについては柱穴配置と炉及び焼土との位置関係から複数期の遺構変遷が考えられた。ここでは始めに検出遺構の詳細について報告し、次にこれらの遺構構成と変遷過程について述べることとする。

調査は遺構範囲の平面確認から行われたが、埋土の識別に難渋し壁については土層断面で把握することとなった。柱穴は比較的明瞭に検出され、その確認面は炉・焼土と同一の床面上である。

埋土は上位の暗褐色土A層と下位の黒褐色土B層に分層され、A層は褐色土の混入率の差異によりA1、A2層に細分される。いずれの土層もやや硬質で、礫・土器を含む。B層は住居跡の南東部を除く床面上から壁にかけて堆積し、北東部の土層断面では層厚が最大30cmほどあり、A2層との層理面は45°ほどの傾斜を成している。南東側の堆積末端部では緩やかな傾斜で床面に接しており、北西方向からの流入を示す堆積状況となっている。A2層は南東部の床面を覆土しており、竪穴東端部では埋土の主体を成し、層厚は最大で20cmほどとなっている。A1層は南向きに傾斜するA2層及びB層上に堆積しており、層理面には凹凸が見られ最大層厚は15cmとなっている。JH04はこれらの埋土を掘り込んで構築されている。

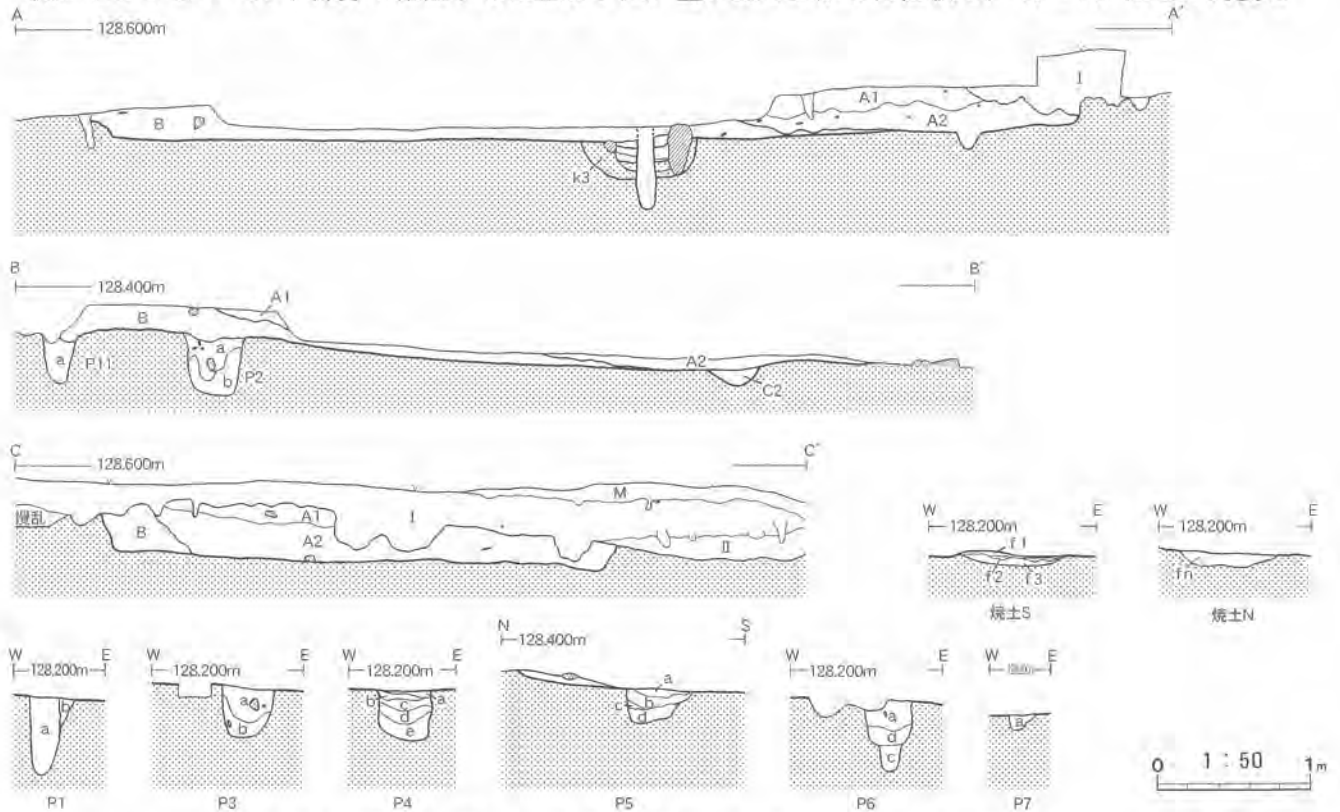


第6号竪穴住居跡(JH06) 平面図

Fig.30

床面は南に傾斜しており高低差は最大で30cmほどある。遺構平面図の127.9mの等高線が示すように、複式炉の周辺が低くなっており、複式炉の東西両側縁の中央部が床面標高の最小値を示している。推定される床面積は約29㎡で、貼り床は確認されなかった。

壁は平面確認での識別が難しく土層断面で把握したため、全周を捉えることができず、北東部と西側のセクションベルト部分で確認するに止まった。壁の立ち上がりは直状で、50~70°ほどの角度を



第6号竪穴住居跡(JH06)埋土、焼土N、S、柱穴P1~P7土層断面図

Fig.31

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物
JH06-B埋土	A1 10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、礫
	A2 10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造、礫、土器、木炭粉1%
	B 10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 10YR4/6 褐色シルト質壤土1%粒状	やや硬質、粉粒状構造、礫、土器、木炭粉1%
焼土 N	fn 10YR3/4 暗褐色砂壤土	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)20%粉塊状	やや硬質、粉塊状構造
焼土 S	f1 10YR2/3 黒褐色砂壤土	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)3%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造、木炭粉微量
	f2 5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)	10YR2/3 黒褐色砂壤土2%粉状	硬質、粉状構造
	f3 10YR2/3 黒褐色砂壤土	5YR4/8 赤褐色砂壤土(焼土)15%粉状	硬質、粉状構造
柱穴P1埋土	a 10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
	b 10YR4/6 褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土7%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造
柱穴P2埋土	a 10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土25%粒塊状	やや硬質、粒塊状構造、礫
	b 10YR2/2 黒褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造
柱穴P3埋土	a 10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉・焼土粒微量、礫
	b 10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造、礫
柱穴P4埋土	a 10YR3/4 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 10YR5/8 黄褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
	b 10YR5/8 黄褐色砂壤土	10YR3/4 暗褐色壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造
	c 10YR3/3 暗褐色壤土	10YR5/8 黄褐色砂壤土1%粉状	やや軟質、粉状構造
	d 10YR5/8 黄褐色砂壤土	—	やや軟質、均一構造
	e 10YR5/6 黄褐色壤土	10YR4/4 褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
柱穴P5埋土	a 10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/4 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粒状構造、木炭粉微量
	b 10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR3/4 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粒状構造、木炭粉微量
	c 10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土5%粉状	やや硬質、粉状構造
	e 10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR4/6 褐色砂壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造
柱穴P6埋土	a 10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造、礫、木炭粉1%、土器
	b 10YR3/3 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造
柱穴P7埋土	c 10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色壤土3%粉状	やや軟質、粉状構造
	a 10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粒状	やや軟質、粒状構造、木炭粉微量

土層観察表

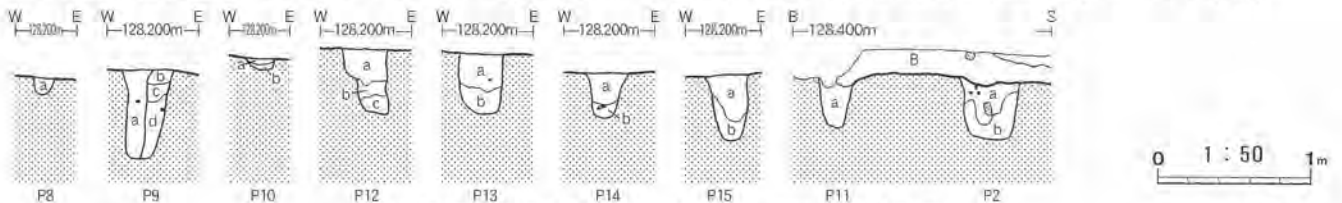
成し、壁高は最大25cmとなっている。平面形は、確認された部分の壁は弧状ではなく、やや直状の部分と屈曲部分が見られる多角形状となっている。住居跡の規模は、東壁から一部確認された西壁までの東西間が6.4m、南北は5.5m前後と推定される。なお、南南東には第5次調査の第3号竪穴住居跡があり、これらの壁間の距離は最も近接する部分で1.5m、住居跡の中心間の距離は6.6mとなっている。

柱穴P1は、深さ50cmで口径30cm前後の不整形を成す。a層は柱痕状を呈するが、木炭粉が混入しており柱埋設土が上端部だけで部分的であることから、これは柱の抜き取り穴の埋土とみられる。

P2は深さ38cm、口径30から40cmの楕円形で、底面も楕円形を呈する。埋土はやや硬質で、上位のa層には礫と粒塊状の褐色土が含まれ下位b層との層理面は大きく凹凸を成しており、人為的な関与が考えられる埋土状況である。土層断面B-bでP2と住居跡埋土B層との堆積状況が示されているが、P2の埋土上面はa層に特徴的に含まれる褐色土によって明瞭に識別され、B層との層理面はやや窪んだ状態で観察されている。P2が人為的に埋め戻され、その上面が次期の生活面として使用されたと仮定し、遺構埋没後の堆積土圧により最終的に柱穴部分がやや窪んだ状態となった可能性も考えられる。しかし同一断面のP11の埋土上面もやや凹部を成しており、埋土状況ではこの仮定の正否について判断できなかった。

P3は深さ33cm、口径35cmの円形で、埋土には礫が含まれ、上位のa層には木炭・焼土が混入している。P4は深さ32cm、口径40cm前後の楕円形で、底面も楕円形となっている。埋土は暗褐色土と黄褐色土の互層を成している。この黄褐色土は基盤土起源の土層であり、埋め戻された可能性が考えられる。P12と一部で重複しているが、P12は攪乱孔の精査段階で確認され、P4は床面精査で検出されたもので検出時点が異なり、切り合いを確認する位置で土層断面を設定できず 新旧関係を把握することはできなかった。精査時の記録・埋土状態の検討も行ったが、切り合いが部分的であり新旧を判断するには至らなかった。

P5は深さ23cm、口径40～47cm前後の楕円形で、埋土は層状の堆積を成し上半部には木炭が粉状に含まれている。P6は深さ47cm、口径33cm前後のほぼ円形であるが、柱穴下半部に段が見られ柱穴径が細くなっており、特徴的な断面形を成している。埋土は最下層の狭小部がやや軟質の黒褐色土で、その上位は暗褐色土となっている。P7は深さ10cm、口径20cmほどの円形を成す小型の浅い柱穴である。



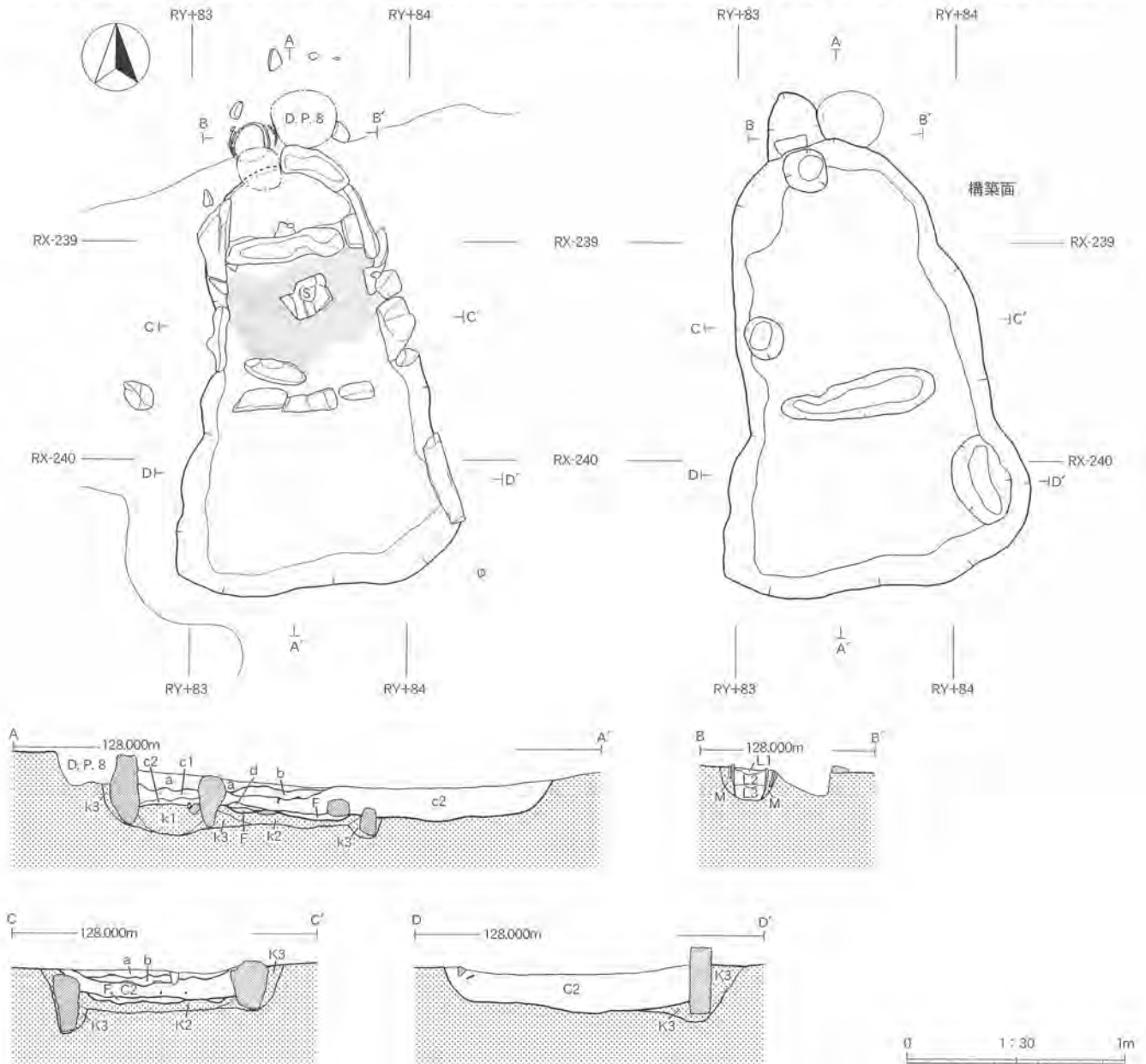
第6号竪穴住居跡(JH06) 柱穴P8～P15土層断面図

Fig.32

層名	基本土	混入土	a硬さ・構造・混入物
柱穴P8埋土	a	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状 やや硬質、粉状構造、木炭粉1%
	a	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土2%粉状 やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
柱穴P9埋土	b	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土5%粉粒状 やや硬質、粉粒状構造
	c	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土5%粉状 やや硬質、粉状構造
	d	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土7%粉状 やや硬質、粉状構造、礫
	a	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土1%粉状 やや軟質、粉状構造
柱穴P10埋土	b	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土7%粉粒状 やや軟質、粉粒状構造
	a	10YR3/3 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粒塊状 やや軟質、粒塊状構造
柱穴P11埋土	a	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR5/8 黄褐色砂壤土15%粉粒状 やや硬質、粉粒状構造、礫
	b	10YR5/8 黄褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 やや硬質、粒状構造
	c	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR5/8 黄褐色壤土2%粉状 10YR2/3 黒褐色壤土1%粉状 やや硬質、粉状構造
柱穴P13埋土	a	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 やや軟質、粉状構造、木炭粉微量、土器
	b	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%粉状 やや軟質、粉状構造
柱穴P14埋土	a	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土1%粉状 やや硬質、粉状構造
	b	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色砂壤土2%粉状 やや軟質、粉状構造、土器
柱穴P15埋土	a	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粒状 やや軟質、粉状構造、木炭粉微量、土器、剥片
	b	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色壤土1%粉状 やや軟質、粉状構造

土層観察表

P8・P10は口径15~20cmの小型円形の柱穴で、深さは10cm前後と浅く埋土は住居跡埋土B層に類似する。P9は深さ59cm、口径32cm前後の円形で、底面位置は西に片寄っている。柱痕状の埋土a層は黒褐色土で木炭粉を微量含み、住居跡埋土B層に類似している。P11は深さ30cm、口径23~37cmの楕円形で、底面も楕円形を成し、埋土は褐色土を粒塊状に含む暗褐色土の単層である。P12は深さ43cm、



第6号竪穴住居跡(JH06) 炉跡平面図、土層断面図

Fig.33

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
炉跡埋土	a	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR4/4 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造
	b	10YR3/3 暗褐色砂壤土	10YR5/6 黄褐色砂壤土7%粉粒状	やや硬質、粉粒状構造、土器
	c1	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土5%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉2%
	c2	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色壤土2%粉状 5YR4/8 赤褐色壤土(焼土)粒状1%	やや硬質、粉粒状構造
	d	10YR3/4 暗褐色壤土	5YR4/8 赤褐色壤土(焼土)粒状3~5%	やや硬質、粒状構造
炉跡焼土	F	5YR2/4 極暗赤褐色壤土	10YR3/4 暗褐色壤土5%粉状	硬質、粉状構造
	k1	10YR3/4 暗褐色シルト質壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	硬質、粉状構造
	k2	10YR3/4 暗褐色壤土	5YR2/4 極暗赤褐色壤土(焼土)7%粉粒状	硬質、粉粒状構造
炉構築土	k3	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色砂壤土3%粉状	やや硬質、粉状構造
	L1	10YR2/2 黒褐色壤土	10YR3/3 暗褐色壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造、木炭粉微量
	L2	10YR3/4 暗褐色壤土	7.5YR4/6 褐色壤土(焼土)5%粉状	やや硬質、粉状構造
埋設土器埋土	L3	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR4/6 褐色壤土1%粉状	やや硬質、粉状構造、木炭粉微量
	M	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR4/6 褐色壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造
土器埋設土				

土層観察表

口径30cm前後の不整形を成す柱穴である。攪乱孔の精査に伴い確認されたもので、埋土断面はその南端部の状況を示しているが、中位のb層は基盤土起源の黄褐色砂壤土を主体とし、その上位a層にも黄褐色砂壤土が粉粒状に含まれていることから、人為的な埋土形成が考えられる。P13は深さ40cm、口径28～40cmの楕円形で、埋土は暗褐色土で上位a層には木炭粉と土器を混ざる。P14は深さ29cm、口径30cm前後の不整形で、埋土の主体を占める暗褐色土a層は、住居跡A2層と基本土は同一である。なお、P12、P13、P14の柱穴底面は標高127.64m前後となっている。P15は深さ44cm、口径30～35cmの楕円形で、上位のa層に木炭粉を混ざるが、その埋土構成はP14と類似する。

焼土Nは床面のほぼ中央に東西70cm、南北30cmほどの不整形長方形に広がっている。やや凹凸のある皿状の落ち込みに赤褐色焼土を粉状・塊状に含む焼土混土(fn層)が見られ、最大層厚は10cmほどである。底面は若干焼けて赤変しており、焼土の周囲には炉石の抜き取り痕跡は見られなかった。

焼土Sは焼土Nの南に位置し、東西70cm、南北44cmほどの菱形の範囲に分布する。深さ6cmほどの皿状の落ち込みに硬質の赤褐色焼土のほぼ純層(f2層)と焼土混土(f1・f3層)が見られた。f2とf3層の層理面は漸移的であり、f2層は原位置を保っていると考えられる。また、焼土の周囲には炉石の抜き取り痕跡は確認されなかった。焼土N、Sはその断面状況から、生成・廃棄の経過は異にするものとみられるが、焼土は皿状の掘り込み内での燃焼の結果として残されたもので、これらは地床炉と考えられる。

複式炉は床面の南半部に位置し、その規模は炉石北端から前庭部南端までが2.06m、幅は前庭部で最大値を示し1.4mである。長軸線は座標北から8°西に偏し、炉の占める面積は1.9㎡と計測される。炉の北に隣接し長軸線の西に接する位置には埋設土器が見られ、炉の南北長はこれを含めると2.3mとなる。炉の北端は弧状を成し、東西側縁は幅82cmから96cmとハの字状に南に広がりながら前庭部に続く。炉石は弧状の北端部西半には見られず、断続して西縁の北半部に配され、北端部東半からは東縁北半部まで連続する。前庭部の周縁では東側南端に直方板状の石がひとつ見られるのみである。底面には前庭部の北側を限る石列が設けられ、その北には炉部分を南北に区切る石が据えられている。

前庭部の深さは12～16cmあり、底面は東西88～106cm、南北70cm前後の台形状を呈す。前庭部を区切る石列は3個の石から成り、石列両端部は側縁部に接しておらず、底面は一部で炉部分に連続している。北半の炉部分は南北に区画され、北側の区画(C区画)の底面は南北30cm、東西56cmの北縁を弧状とする台形状を成し、南を限る石は東西側縁の炉石に接する。南側の区画(O区画)の底面は南北30cm、東西56～80cmの台形状で、ここには焼土が見られる。焼土は硬くしまっており、層厚は最大3cmとなっている。

埋土は暗褐色土のa～d層から成り、a層は住居跡埋土A2層に類似し、b層には黄褐色土が粉粒状に混じり土器を含んでいる。c1層はC区画に見られる土層で木炭粉を含み、c2層は前庭部から炉部分にかけて広く堆積し、層厚は前庭部で15cm前後、O区画で5cm、C区画で2～4cmほどあり、焼土粒が若干混入している。d層はO区画の焼土上に部分的に堆積する土層で、焼土粒を混ざる。

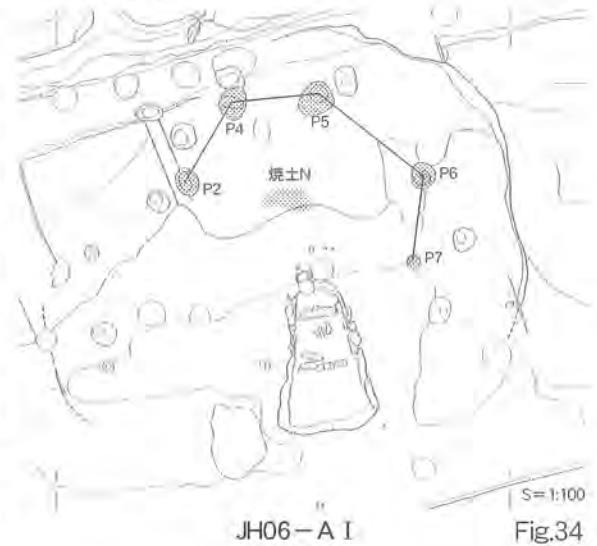
炉部分の底面下と炉石埋設部分には構築土k層が見られ、k3層で炉石を固定しk1、k2層で底面を平坦化している。炉の構築時の掘り込みは南北2.12m、東西1.5mで、前庭部の北縁と南東部の炉石埋設部分などでやや深く掘り込まれており、最深部は検出面から30cmの深さとなっている。

埋設土器は深さ16cm、東西27cmの半円状の掘り込みに土器胴部の大小の破片が埋設されていたもので、その南側はJH04の柱穴P1により掘り込まれ、東側には攪乱孔D.P8が接している。土器は北側では断続しており、東西15cmの間隔を空けて弧状のハの字形に立位で埋設され、その外周の埋設土M層中にも同様な状態で埋め込まれている。埋設土器中の埋土L2層には焼土が粉状に混入しており、その上下のL1、L3層には木炭粉が微量混ざる。

以上が検出遺構の詳細であるが、次に柱穴配置などの検討によって想定されたA I期、A II期、B期の遺構構成と変遷について述べる。A期とした遺構は地床炉と考えられる焼土N、SとP1～P7によって構成される住居跡で、B期としたものは複式炉を伴う住居跡である。A期の住居跡は地床炉とP1～P4の配置状態から二期の変遷が考えられ、これらをA I、A II期とした。

・第6号竪穴住居跡-A I (JH06-A I)

焼土Nと5基の柱穴P2、P4、P5、P6、P7で構成される住居跡で、これに伴う壁は確認されていない。柱穴の深さはP2から順次38、32、23、47、10cm、柱穴中心間の距離はP2-P4から順次122、118、176、110cmとなっている。また、P5-P2、P5-P7及びP2-P7の間隔は各々216、252cm、316cmで、P2-P7を結ぶ線は焼土Nの南に接する。柱穴は南半部には見られず、間隔、深さが不均一であるが、その配置は焼土Nの南東端を中心とする半径約1.6mの円弧上の北半にあり、東西ほぼ対称の半八角形状を成すことからこれらをA I期の遺構構成とした。



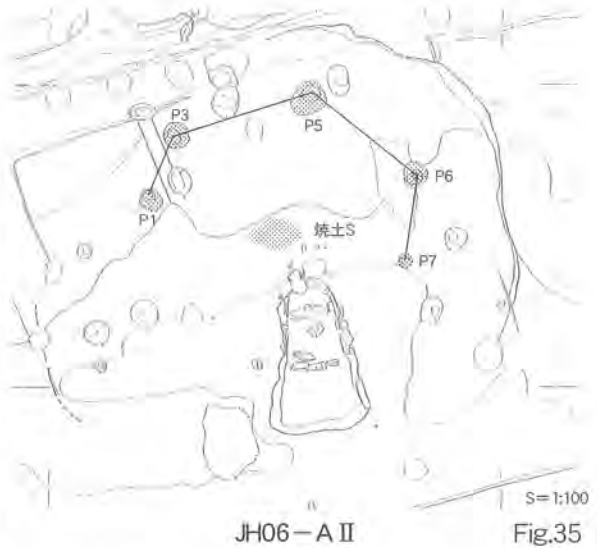
JH06-A I

Fig.34

・第6号竪穴住居跡-A II (JH06-A II)

焼土Sと5基の柱穴P1、P3、P5、P6、P7で構成される住居跡で、これに伴う壁は確認されていない。これらの柱穴は、焼土S北端部を中心とする半径約1.8mの円弧上の北半に位置し、柱穴の深さはP1=50、P3=33cm、柱間隔はP1-P3が84cm、P3-P5が192cmである。

また、P5-P1、P5-P7の距離は各々256、252cmとほぼ等しく、これらはP5を頂点とする二等辺三角形を成す。P1-P7の間隔は352cmで、これらを結ぶ線は焼土S上を通る。柱穴配置はJH06-A Iと相似的であり、焼土Sとの相対的な位置関係から、これらをA II期の遺構構成とした。

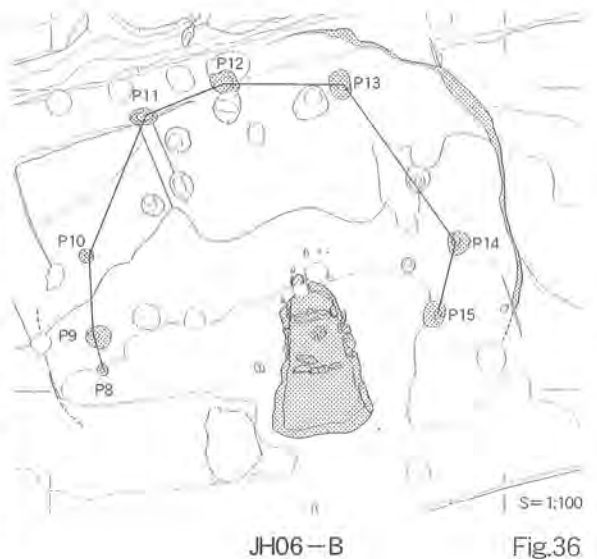


JH06-A II

Fig.35

・第6号竪穴住居跡-B (JH06-B)

複式炉と8基の柱穴P8～P15及び壁で構成される住居跡で、柱穴は複式炉の北西50cmほどの地点を中心とした半径約2.5mの円弧上に見られる。柱穴の深さはP8から順次11、59、8、30、43、40、29、44cm、柱穴間隔はP8-P9から順次48、106、200、106、158、255、100cmとなっている。また、複式炉に対向する位置にあるP12と炉の東西にあるP9及びP14との距離は各々374、370cmと近似しており、これらの柱穴はP12を頂点とする二等辺三角形を成し、全体の柱穴配置はほぼ東西対称の多角形を示している。ただし、柱



JH06-B

Fig.36

穴P13-P14では柱間隔が255cmと広く、この間で柱穴配置は非対称となっている。P13-P14の間にはJH06-Aに帰属すると考えられるP6があり、この柱穴は断面形状から深さと口径が異なる柱穴が同一位置で重複したものとみることができ、柱穴配置の整合性からもP6が重複柱穴でその一方がJH06-Bに帰属するという想定も成し得る。しかし、P6における重複がA期に行われたことも考えられ、埋土状況からはあくまでも想定範囲を出ず、ここではP6の帰属に関する可能性の指摘に止める。

複式炉は、柱穴配置から想定される南北中軸線のやや東に寄った位置にあり、中軸線の方法も同一ではなく、炉の長軸方向とは約4°の差を持つ。壁は北東部と西側の一部で確認されたものであるが、柱穴と壁の間隔は65~70cmほどで柱穴配置に沿って壁が外周しており、複式炉との位置関係からもこれらは伴うものと考えられ、B期の遺構構成とした。

これらの各期の新旧変遷過程は、前述したとおり柱穴の埋土状況などからはこれを明確に判断するに至らず、柱穴配置、壁、炉の状況から検討することとなった。

JH06の最終段階の遺構は、壁の残存が確認されたB期のJH06-Bと考えられる。これに先行するA期の住居跡は、重複した位置に規模を拡張して構築されたJH06-Bによってその壁が失われたものと判断される。A期における新旧関係は、焼土Sのf2層が原位置を保持していることから、これがA期の最終段階の地床炉とみられ、焼土Sに伴うJH06-A IIが新期、これに先行する旧期の住居跡がJH06-A Iと考えられる。

したがってJH06における遺構変遷は、当初にJH06-A Iが構築され、次に西半部の柱穴2基を南西に据え変え、地床炉を南に移したJH06-Aに改築され、その後規模を拡張し複式炉を備えたJH06-Bの構築がされるという過程をたどる。さらに、JH06の埋没後には重複した位置にJH04が造られることとなる。



第6号竪穴住居跡(JH06)(南→)

Photo.66



JH06複式炉(南→)

Photo.67



埋設土器(南→)

Photo.68



炉跡埋土断面(南西→)

Photo.69



埋土b層土器出土状況(西→)

Photo.70



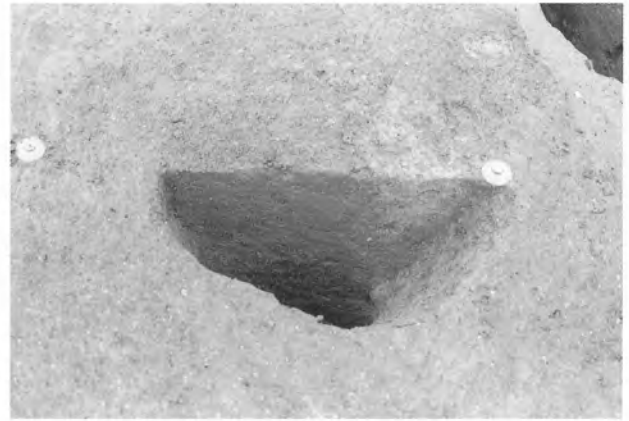
炉構築面(南→)

Photo.71



烧土 N (南→)

Photo.72



P1 (南→)

Photo.73



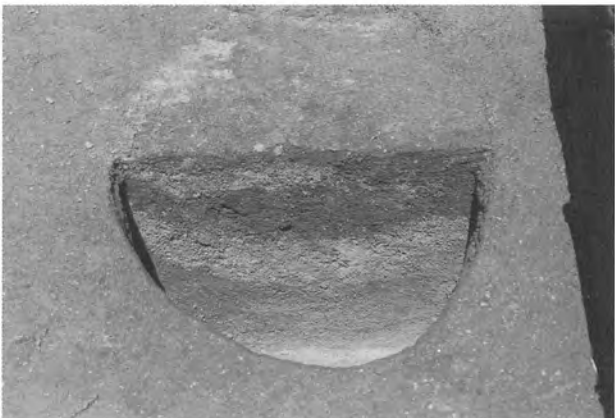
P2 (西→)

Photo.74



P3 (南→)

Photo.75



P4 (南→)

Photo.76



P5 (南西→)

Photo.77



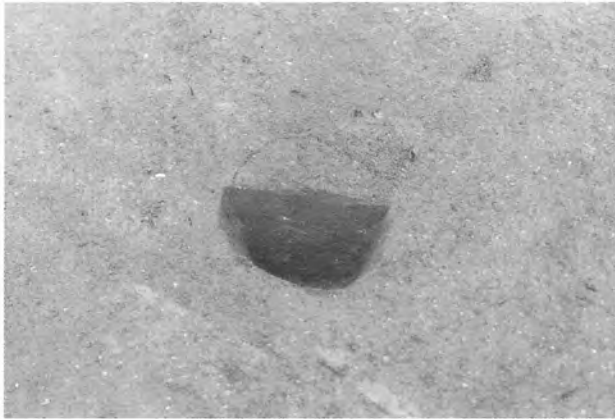
P6 (南西→)

Photo.78

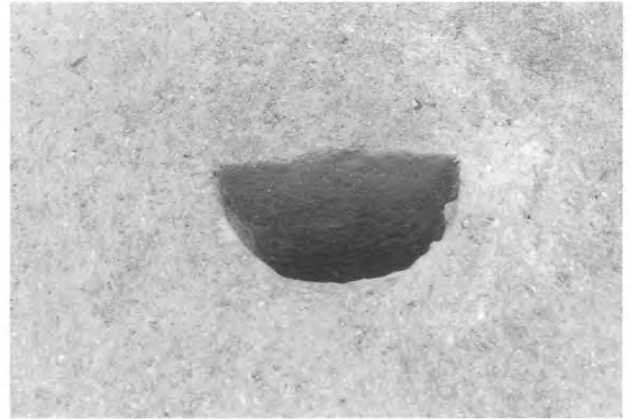


P7 (南→)

Photo.79



P8(南→) Photo.80



P9(南→) Photo.81



P10(南→) Photo.82



P11(西→) Photo.83



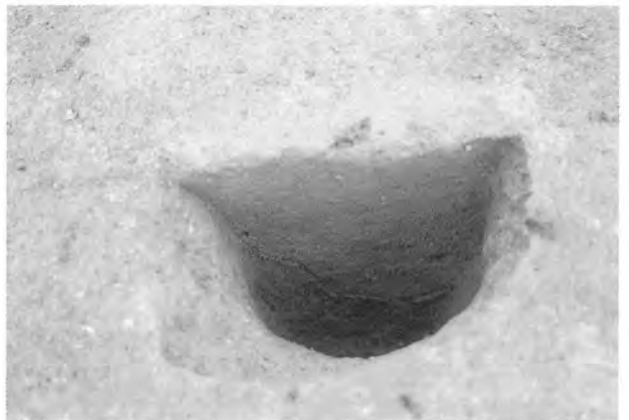
P12(北→) Photo.84



P13(南→) Photo.85



P14(南→) Photo.86



P15(南→) Photo.87

・出土遺物

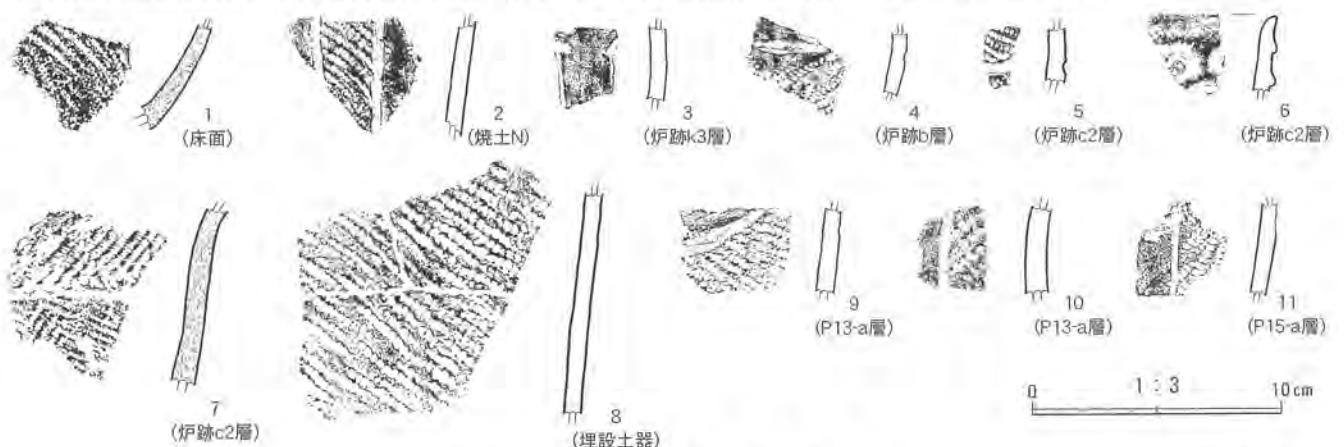
遺物は主に住居跡の埋土中に見られ、柱穴・炉跡からは土器小片、床面からは粗製深鉢土器などが出土した。1は床面出土の尖底土器底部付近の破片で、施文原体はRL、内面は黒褐色を呈し胎土に繊維を含み器厚は6～9mmである。2は地床炉と考えられる焼土N中から出土したもので、平行直状の沈線間に縄文(LR)が施文されている。3～7は炉跡から出土したもので、3は平行沈線間を無文とし、4、5は弧状の沈線で無文帯と施文帯(縄文RL)を区画している。6は口縁部破片で、隆線区画内に縄文(RL)が施文されている。7は胎土に繊維を含み器厚は8mm前後で、末端に結節のある縄文(RL)が施文されている。8は炉跡の北に隣接する埋設土器で、施文原体LRの粗製土器胴部破片が埋設されていた。9～11は柱穴埋土から出土したもので、弧状ないし直状の沈線で無文帯と施文帯を区画している。なお柱穴P15からは二次剝離が見られない頁岩小剥片7点が出土している。12は住居跡北西部柱穴P1の北30cmほどの床面から出土した粗製土器で、器高17cm、推定口径20cm、底径8.6cm、縄文(RL)が粗く施されている。

13～22は住居跡埋土B層から出土した遺物である。13は小型土器の口縁部から体部の破片で、沈線で弧状に区画された無文帯と施文帯(縄文LR)が入組んだ文様で構成され、大木10式の土器と考えられる。

14～18は縦位・横位の弧状の沈線で無文帯と施文帯(縄文LR)が区画されている。19は内面に断面山型の微隆線が付されており、器面は横位の沈線で無文帯と施文帯(縄文RL)が区画されている。20は結節のある縄文原体(LR)を縦位に施文している。21は口縁部に粗い渦状の文様が見られ、半裁管状工具による沈線で施文帯を区画している。22は敲打磨石の欠損品で、片側縁に最大幅15mmの平滑な磨面が見られる。

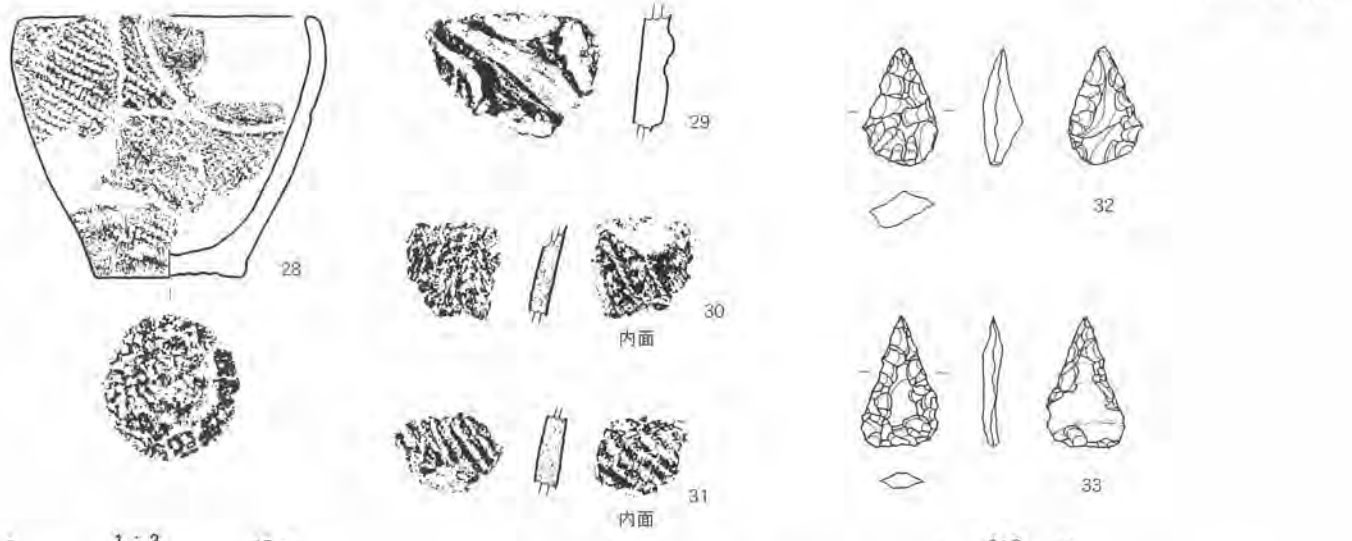
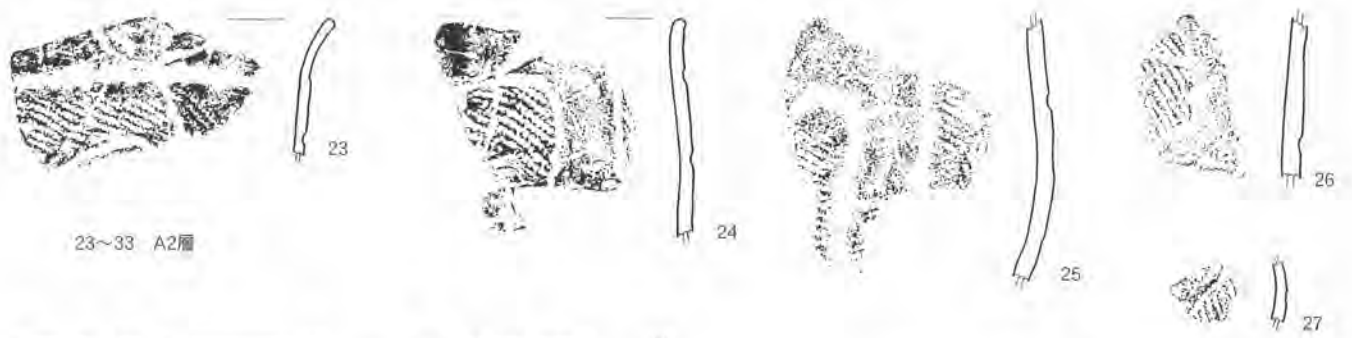
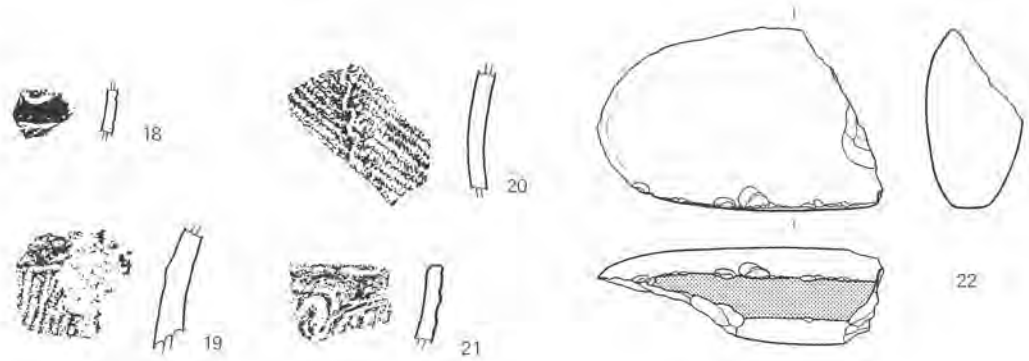
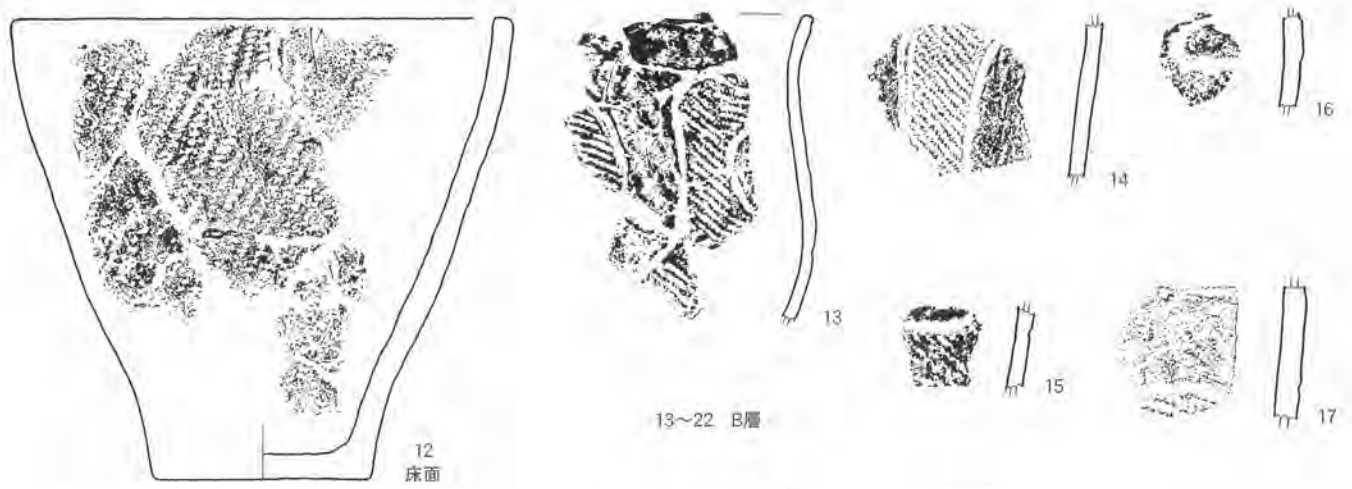
23～33は埋土A2層から出土した遺物で、主に複式炉の南半周辺に分布していたものである。23は口縁部がやや外反し波状を成しており、体部施文帯(縄文LR)には横位弧状の浅い沈線区画が見られる。24～27は浅い沈線により区画された無文帯と施文帯が入組んだ文様構成となっている。28は小型の粗製鉢形土器で口縁部は内湾しており、器高は10.3cm、口径11.8cm、最大径12.5cm、底径5.8cm、縄文(LR)が粗く施され、口縁部から施される弧状の沈線により半円形の無文部分が区画されている。29は隆線が付され、複節縄文が施されており、隆線はナデ及び沈線によって調整されている。30、31は内外面に縄文が施された土器で、胎土に繊維を含んでいる。剥片石器は32、33の無基石鏃が出土している。32は長さ23mm、幅14.7mm、重さ2.1gで、片面に一次剝離面の稜が残されており最大厚は7.7mmとなっている。33は長さ25.9mm、幅15.3mm、最大厚3.4mm、重さ1.2gで、両面に一次剝離面が残されている。

出土遺物は縄文時代中期末葉の大木10式の土器が主体を占める。これらの土器は、住居跡の重複関係から、JH04に先行する段階の大木10式と考えられ、JH06当初のA I期の焼土Nから出土した土器片には、縦位直状の縄文施文帯が見られ、大木9式に類似する文様構成となる可能性がある。



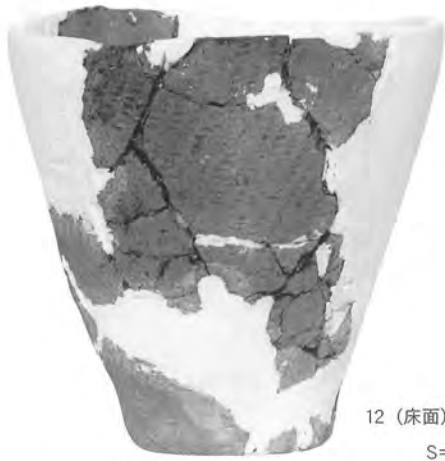
第6号竪穴住居跡(JH06) 出土遺物

Fig.37



第6号竖穴住居跡(JH06) 出土遺物

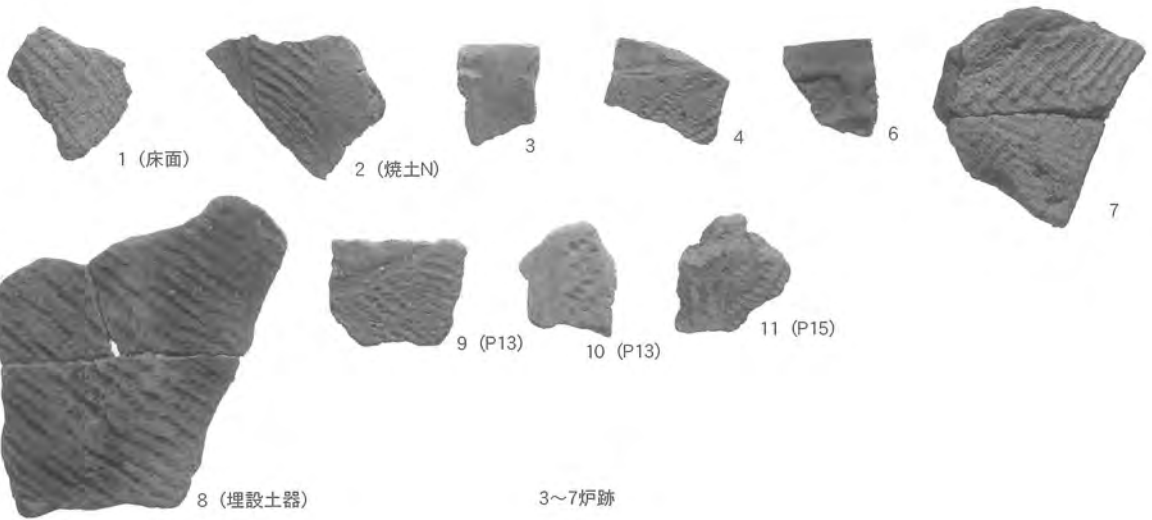
Fig.38



12 (床面)
S=1/3



28 (A2層)
S=1/3



1 (床面)

2 (焼土N)

3

4

6

7

9 (P13)

10 (P13)

11 (P15)

8 (埋設土器)

3~7炉跡



13

13~22 B層



14



16



15



17



18



19



20



21



22



23

23~26 A2層



24



25



26

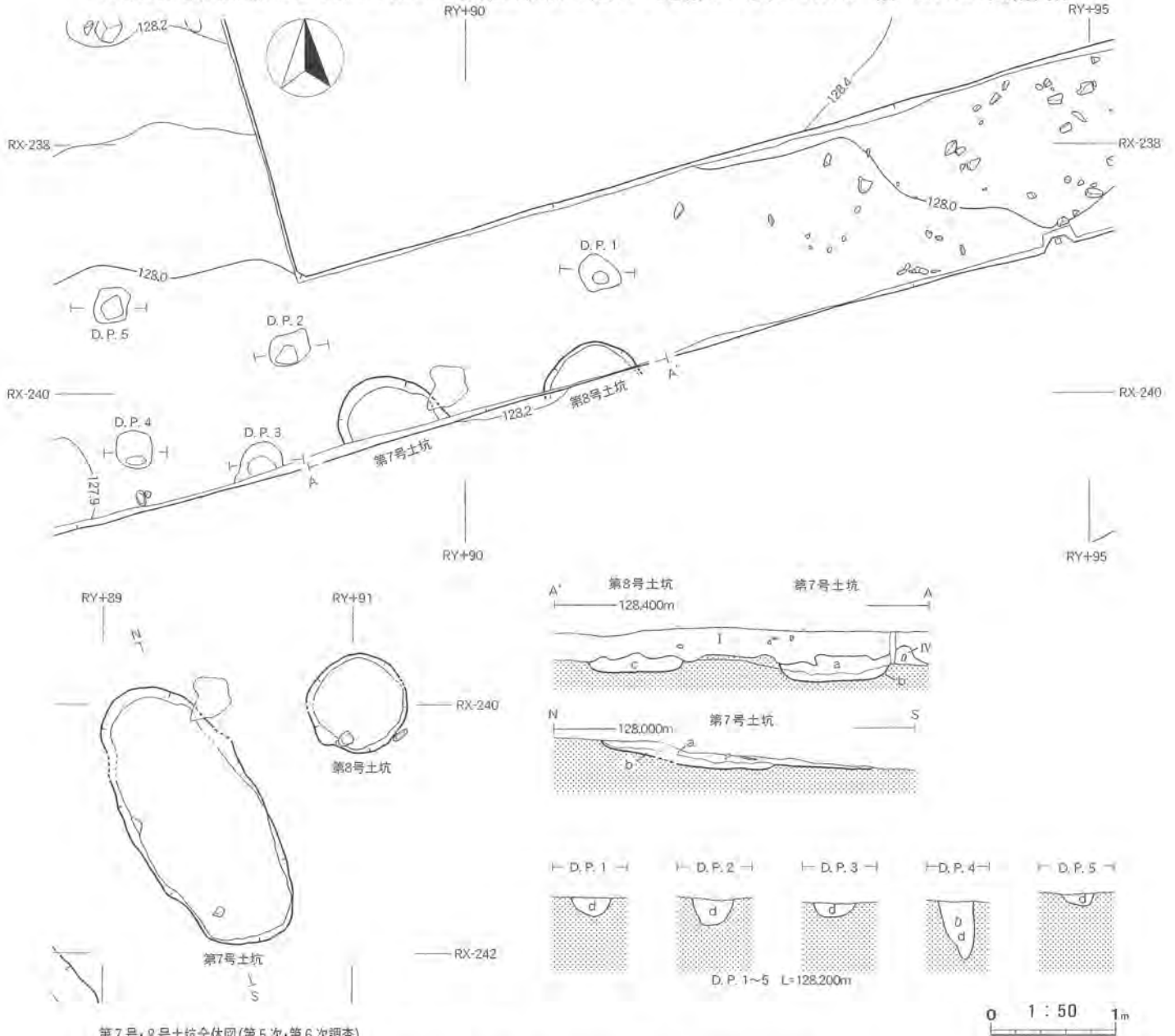
S=2/5

(6) 土 坑

調査区南東のトレンチで二基の土坑が検出された。これらは第5次調査で第7号、第8号土坑として南半部が既に調査された遺構で、今次の調査で全体規模が確認されたものである。

・第7号土坑

土坑の北端部が精査されたもので、北縁は弧状を成して完結し、長さ2.3m、幅1.05mの長楕円形の



第7号・8号土坑・D.P.1~5平面図、土層断面図

Fig.39

層名	基本土	混入土	硬さ・構造・混入物	
7号土坑埋土	a	10YR3/4 暗褐色壤土	10YR2/3 黒褐色砂壤土2%粉状	やや軟質、粉状構造
	b	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR4/6 暗褐色シルト質壤土1%粒状	やや硬質、粒状構造、木炭粉微量
8号土坑埋土	c	10YR2/3 黒褐色シルト質壤土	10YR4/6 褐色砂壤土2%粉状	やや硬質、粉状構造
D.P.1埋土	d	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土5%粉状	軟質、粉状構造
			10YR4/6 褐色壤土2%粉状	
D.P.2埋土	d	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土15%粉状	軟質、粉粒状構造、土器
		10YR2/2 黒褐色壤土3%粒状		
D.P.3埋土	d	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/2 黒褐色壤土3%粉状	軟質、粉状構造
		10YR3/4 暗褐色砂壤土2%粉状		
D.P.4埋土	d	10YR2/3 黒褐色壤土	10YR3/4 暗褐色砂壤土2%粉状	軟質、粉状構造、瓦礫
			10YR4/6 褐色壤土1%粉状	
D.P.5埋土	d	10YR3/4 暗褐色砂壤土	10YR2/3 黒褐色壤土3%塊状	軟質、塊状構造

土層観察表

土坑となることが確認された。埋土は暗褐色土 a 層と黒褐色土 b 層から成り、b 層には土器、木炭粉が含まれ、壁高は最大 6 cm で弧状に立ち上がる。なお、b 層からは土器小片 3 点が出土しており、いずれも胎土に繊維を含んでいる。1 は原体 RL の羽状縄文が施されたもので、器厚は 8 mm 前後で内面のほとんどが剥落し、胎土に繊維の痕跡が観察される。2 は口縁部破片であるが、器面が剥落しており文様は不明である。なお、第 5 次調査では a 層から大木 2b 式の土器が出土している。

・第 8 号土坑

第 7 号土坑の東に位置する土坑で、北半部が調査され直径 80 cm 前後の円形の土坑であることが確認された。埋土はやや硬い黒褐色土 c 層で遺物は含まれておらず、壁は弧状に 5 cm ほど立ちあがる。

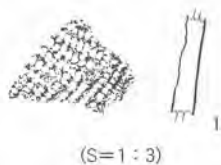
なお、土坑周辺に見られる D.P1 から D.P5 は、軟質の黒褐色土ないし暗褐色土を埋土とするもので、ビニールハウスの設置に伴う攪乱孔と考えられる。



南東部トレンチ第 7、8 号土坑(南西→) Photo.89



第 7 号土坑(北西→) Photo.90



第 7 号土坑出土土器

Fig.40



第 7 号土坑出土土器

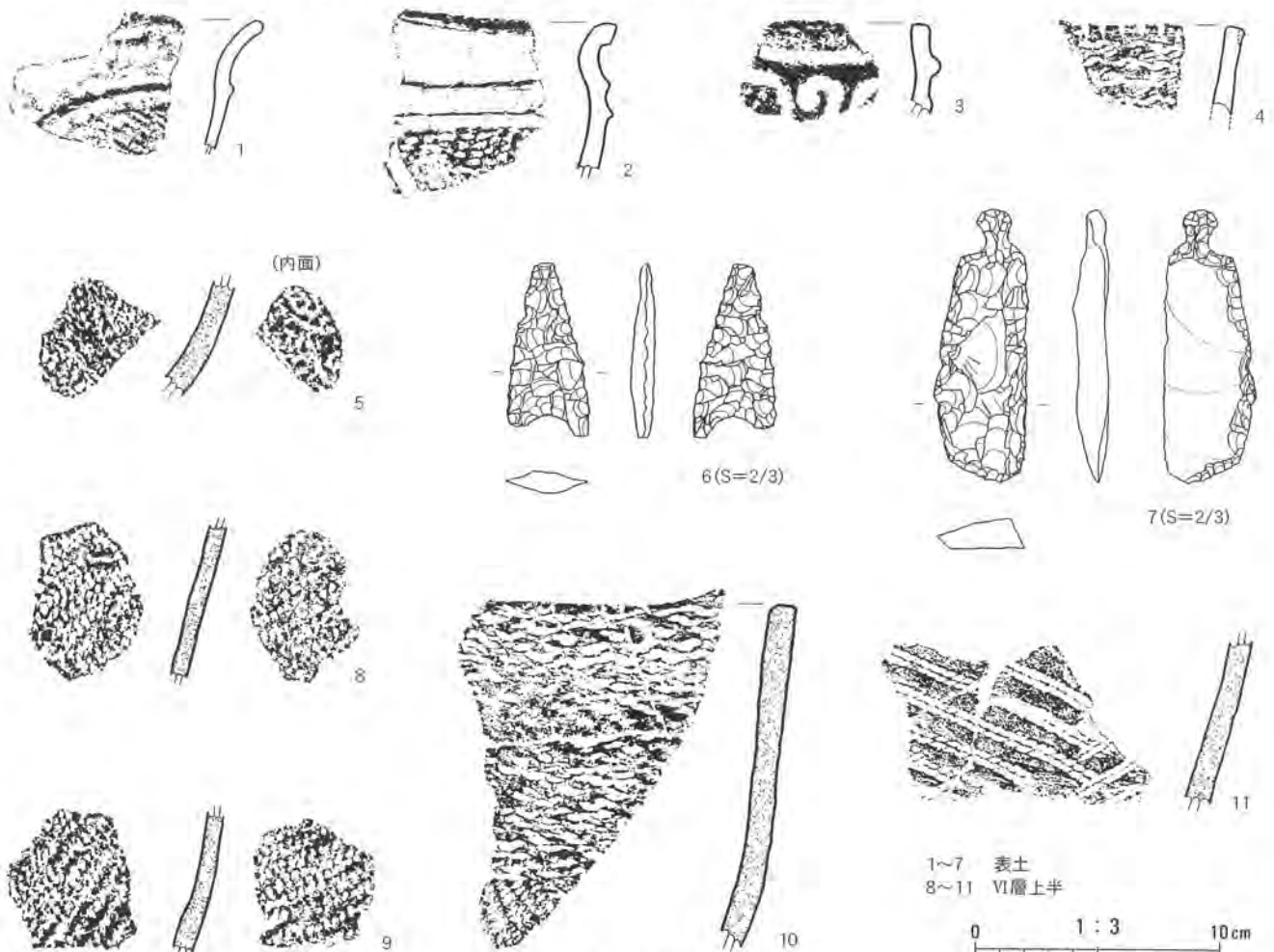
Photo.91

(7) 遺構外の遺物

1 から 5 は表土中から出土した土器である。1 は外反する波状口縁の破片で、口縁部無文帯と体部施文帯(縄文 LR)は調整された隆線で弧状に区画されており、大木 9 式とみられる。2 は外反する無文口縁部と体部文様帯を横位二条の調整隆線で区分し、施文帯には地文(0 段多条 RL)と隆線による渦巻文の一部が見られる。3 は小渦巻文が施されており、2、3 は大木 8 b 式の甕形土器の破片である。4 は口縁端部に長さ 6 mm ほどの縦位の刻み目が 7 mm 前後の間隔で付けられ、地文は結節の横位廻転により施文されている。焼成は良好堅緻で破片下端に輪積み痕跡が見られ、胎土には砂粒が含まれる。5、8、9 は内外面に縄文が施され、胎土に繊維を含む土器である。5 は尖底の底部付近の破片で、施文原体は判然としないが直前段台燃に類似する。6、7 は表土から出土した剥片石器である。6 はつまみ部を有し直状の刃部をもつ切削器で、長さ 55.8 mm、幅 19 mm、最大厚 6.9 mm、重量は 7.4 g あり、腹面に大きく一次剥離面を残している。7 は石鏃で長さ 35.8 mm、幅 16.6 mm、最大厚 4.7 mm、重量 2.5 g、両脚末端と尖頭端部が欠損している。

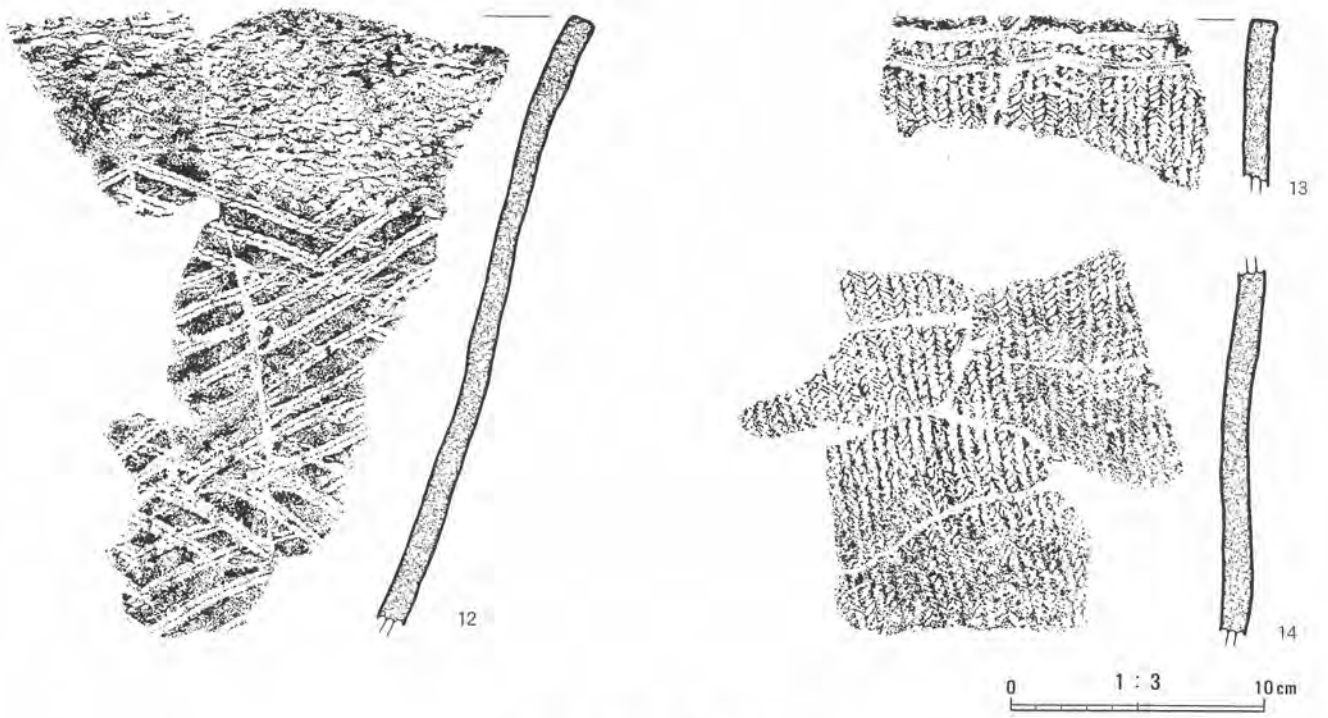
8から14は基本土層確認のため調査地区西端に設定したサブトレンチから出土した遺物で、黒褐色土VI層上半に包含されていたものである。8、9は体部破片で、器厚8mm前後で内外面ともに縄文(LR)が施されている。10は小波状を成す口縁部破片で胎土に繊維を含み、器厚は10~13mmである。結節の横位廻転による施文帯が口縁から11cmほどの幅で見られ、体部の縄文(LR)に連続する。施文順序は体部の縄文施文後に結節廻転が施されている。11、12は同一個体で胎土に繊維を含む器厚7~11mmの深鉢形土器の一部である。体部には二本一組の撚紐を間隔を空けて単軸に巻いた絡条体を横位に回転施文した撚糸文が施文されている。原体の絡条体は、L条右巻きとR条左巻きの二種類で施文されている。L条右巻きの絡条体は二本一組の条の幅が5mm以内でその間隔は8mm前後、条は約30°で右上がりに向き、4ないし5条で施文の一単位となっている。R条左巻きは条幅が5mmを越し間隔は7mm前後、条は20~30°で左上がりに向き、4条1単位で施文している。これら二種類の原体による撚糸文が一部で重複しながら施文されている。口縁部付近は結節廻転による綾絡文が幅5~8cmの横帯を成して施文されており、施文順序は体部の撚糸文施文後に綾絡文が施されている。13と14は同一個体の口縁部と体部破辺で、胎土に繊維を含み器厚は10~12mmである。口縁端はやや肥厚し、管条工具による幅5mmの平行沈線が4~7mmの間隔で二条横位に施されている。地文は特異なもので、左右撚りの異なる縄を組み合わせた原体「縄の束」が施文されたものとみられる。なお、類例は山田町沢田I遺跡4次調査RA211住居跡の埋土下位及び遺構外から出土している。

遺構外からの出土遺物は、縄文時代中期後葉の大木8b~9式、早期末から前期前葉の土器が見られ、VI層上半が早期末葉から前期前葉の遺物包含層であることが確認された。



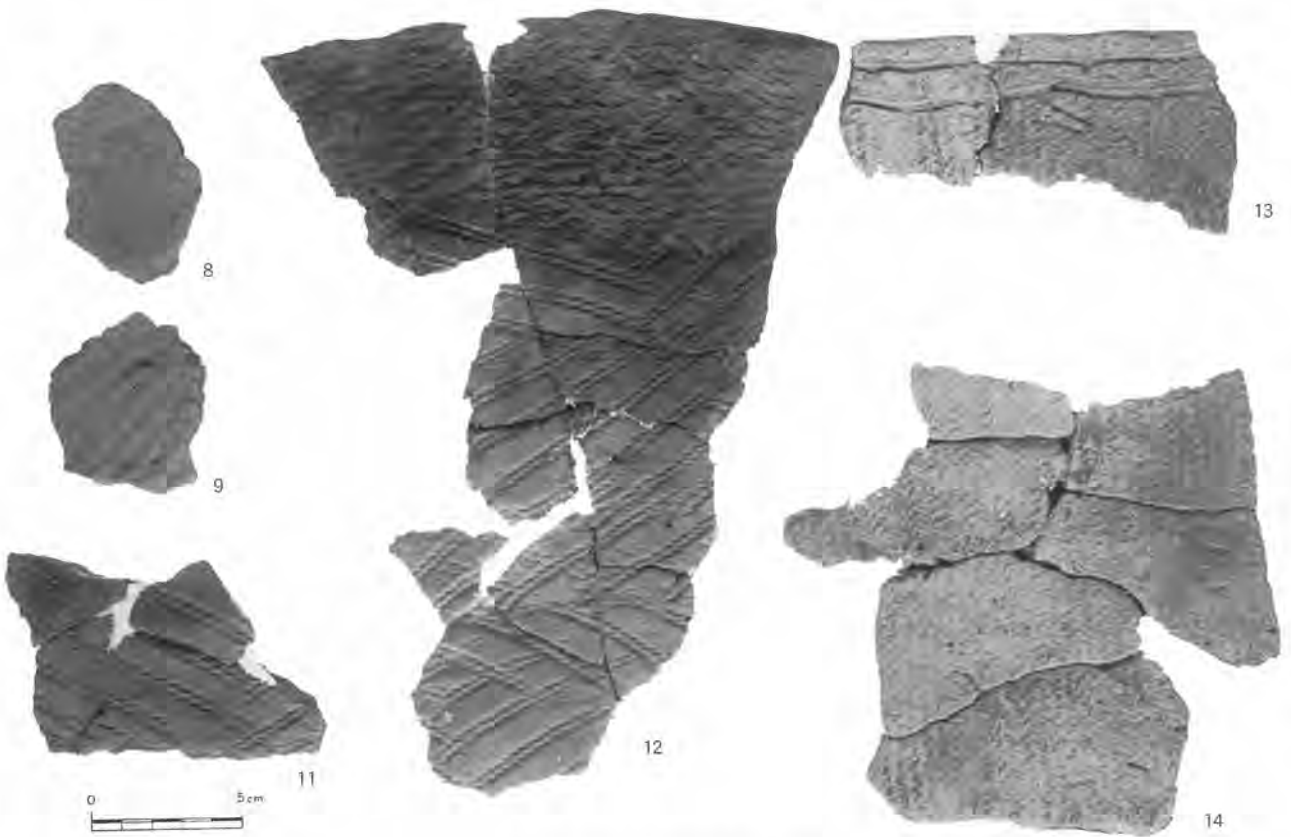
遺構外出土遺物

Fig.41
71



遺構外(VI層上半)出土遺物

Fig.42



遺構外(VI層上半)出土遺物

Photo.92

4 まとめ

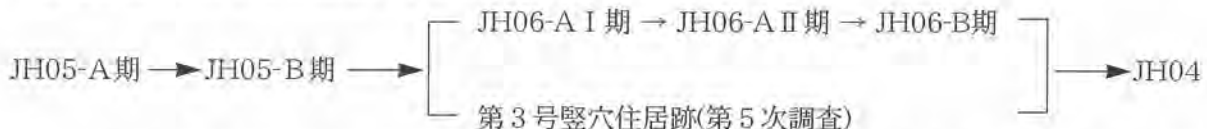
この調査では、土坑2基、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡3棟、早期末葉から前期前葉の遺物包含層が確認された。第7号土坑では1994年の第5次調査で大木2b式の土器が出土しており、今次の調査で完掘されたものである。

検出された住居跡は互いに重複しており、さらに各住居において柱穴、炉の配置変遷が見られる。住居跡の重複は、第4号竪穴住居跡(JH04)と第6号竪穴住居跡(JH06)、第5号竪穴住居跡(JH05)と第6号竪穴住居跡(JH06)で見られ、JH05は二期(A期→B期)、JH06では三期(AⅠ期→AⅡ期→B期)の変遷過程が見られる。

住居跡の時期はJH04が大木10式期、JH05(B期)が大木9式期、JH06(B期)は大木10式期であり、JH04とJH06は重複関係から、JH06の埋没後JH04が構築されておりJH06(AⅠ期→AⅡ期→B期)→JH04の過程をたどる。JH05とJH06とは攪乱により遺構の重複関係は確認できなかったが、出土遺物からJH05(B期)→JH06(B期)の変遷となる。JH05のA期とJH06のAⅠ期、AⅡ期との新旧関係については、明確な時期を特定する伴出遺物がほとんど見られず、AⅠ期の地床炉(焼土N)に大木9式ともみられる土器片があるのみで、これらの関係については判断できなかった。但し、JH05のA→B期、JH06のAⅠ→AⅡ期の変遷は、近接位置への柱の移動で各々連続性が強く、JH05B期廃絶後の遺物に大木8b式の大型破片が出土した状況からは、JH05のA期がJH06のA期に先行する可能性が想定される。

隣接する第5次調査地区では大木10式期の住居跡(第3号竪穴住居跡)が調査されている。この住居跡では埋土最下層のB1層から「3単位の逆U字文の下端を連結させた区画文と、2単位のU字文の上端を連結させた区画紋とで構成」された文様帯をもつ土器が出土している。文様構成から、この土器はJH04の床面出土の土器に先行する時期のものとみられる。

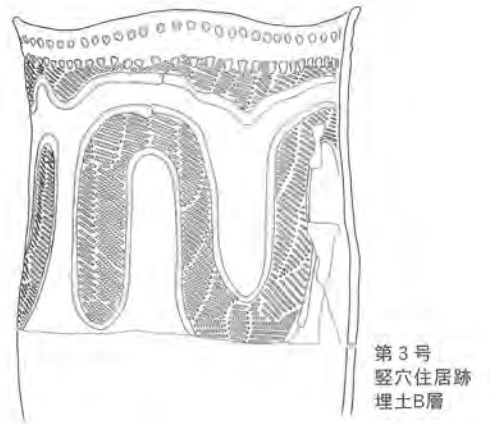
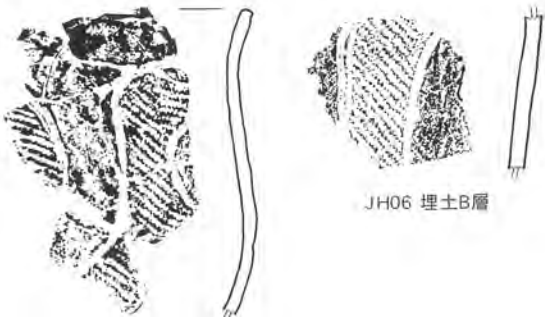
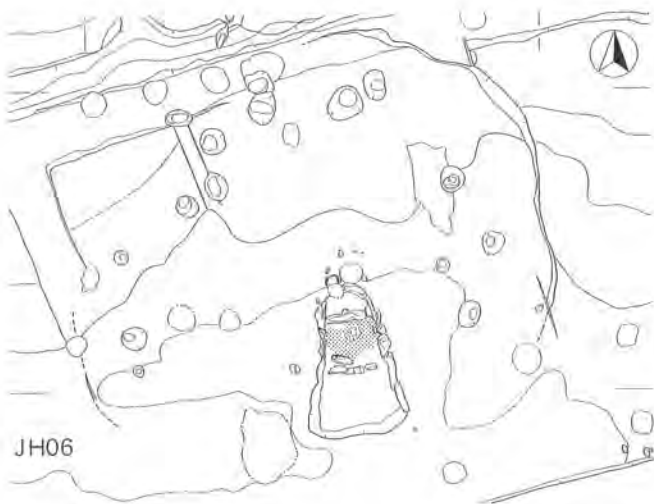
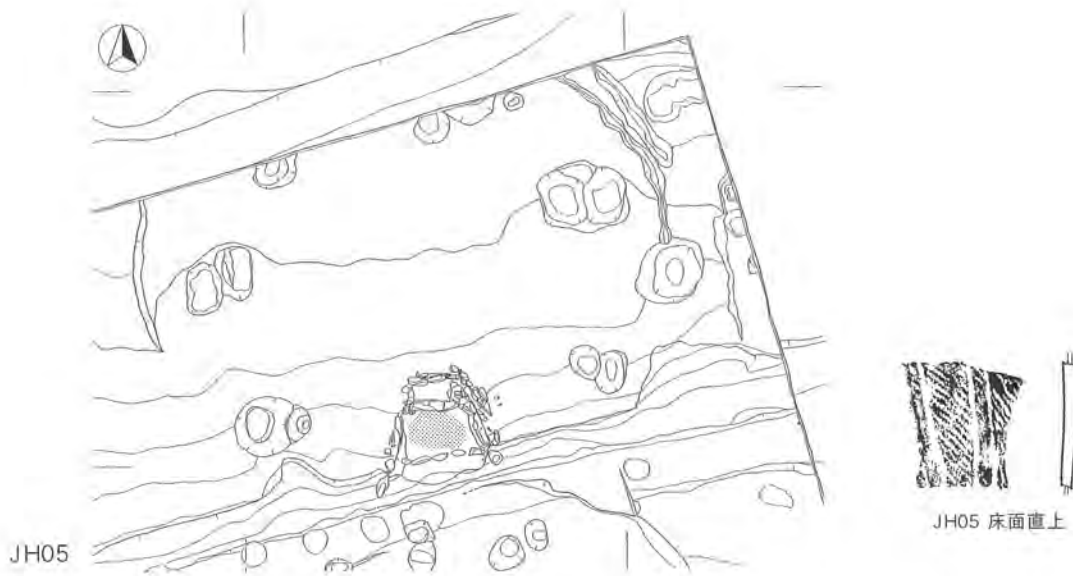
以上のことから、第5次調査の第3号竪穴住居跡も含め、これまでに調査された4棟の竪穴住居跡の変遷過程は次のように想定することができる。(Fig.43)



埋土中の遺物については、JH05の埋没後半期に位置するA層(遺物廃棄層)で多くの遺物が出土し、細分各層から大木9式、大木10式が混在した状態で出土している。遺物廃棄層の存在は、この住居跡の埋没過程において人為的な関与と廃棄行為の起因となる事象が存在していたことを示すものである。また、各細分層の遺物は廃棄時点の同一性を有している。(Fig. 44)

石器については剥片石器が少なく円礫を素材とした礫石器、特に加工具である磨石が多く出土している。片側縁または両側縁に磨面が見られ、磨面の幅は最小1.4cm、最大3.0cmで、厚さは4.5~5.6cm、幅6.4~8.9cm、重さは940~1,014gとなっている。JH05の複式炉構築面からは擦切磨製石斧が出土している。炉の構築面は早期末葉から前期前葉の遺物包含層(VI層上半)を掘り抜いており、構築時に掘り出された擦切磨製石斧を埋納したものと考えられる。

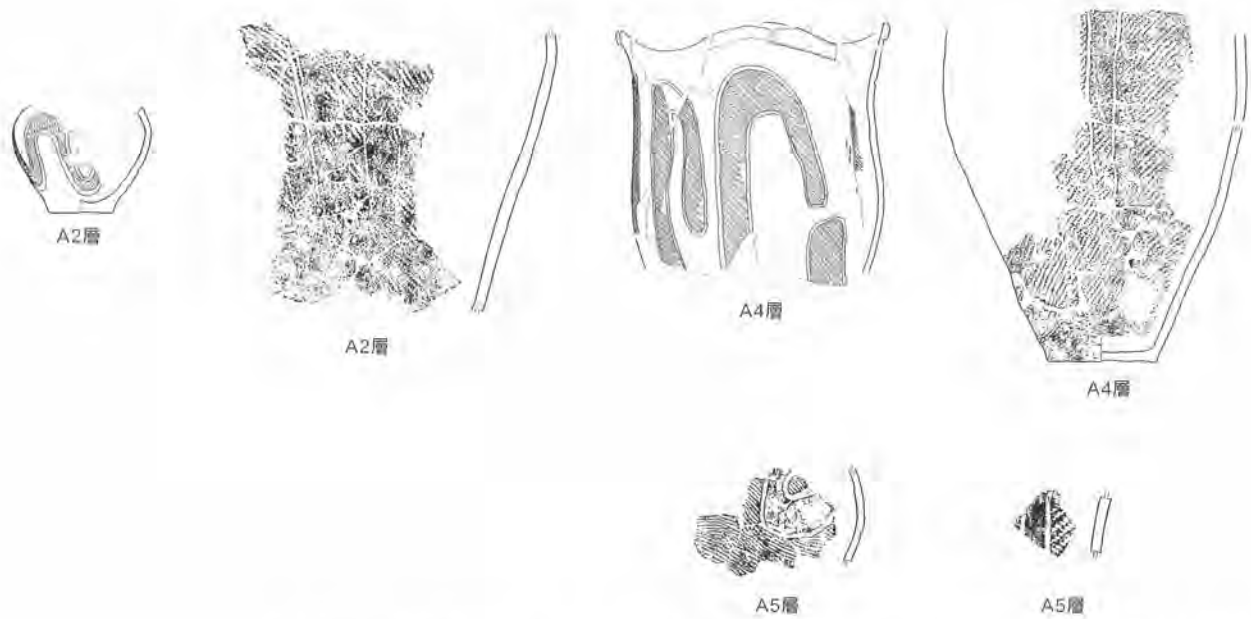
早稲栃Ⅱ遺跡ではこれまでに6次にわたる調査が行なわれ、縄文時代中期末葉大木9、10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡が調査され、当該期の集落遺跡となることが確認された。居住域は本次調査地区の周辺にさらに広がるものとみられ、南西の沢沿いには集落生活に関連する諸痕跡が残されている可能性が考えられる。また、大木2b式期の土坑や早期末葉から前期前葉の包含層は、この時期の住居跡が未調査地区に存在していることを示唆している。



住居跡平面図 S=1/100
土器実測図 S=1/6
土器拓影 S=1/3

竖穴住居跡の変遷図

Fig.43



第5号竪穴住居跡(JH05)埋土A2、A4、A5層出土土器 (S=1/6)

Fig.44

なお、宮古市内における縄文時代中期後半の遺跡の報告例は、白石遺跡(崎山地区)、トロノ木I遺跡(崎山地区)、上村貝塚(磯鶏地区)、千鶏IV遺跡(重茂地区)、小平I遺跡(山口地区)、崎山貝塚などがあり、複式炉をもつ竪穴住居跡の報告例は、以下のとおりである。

白石遺跡では6次にわたる調査が行なわれ、縄文時代中期末葉から後期前葉の集落遺跡であることが確認されており、大木10式期の住居跡が10棟調査されている。トロノ木I遺跡では、大木8b式の終末期の住居跡が調査されており、このうち2棟で複式炉が確認されている。上村貝塚では大木8式、9式期の住居跡11棟が調査されており、大木8b式期のA-8号住居で複式炉が検出されている。千鶏IV遺跡では、大木9式から10式期の住居跡が5棟報告されている。小平I遺跡では、中期後葉から末葉の複式炉を伴う住居跡が4棟調査されている。

また、この他に早稲栃Ⅲ遺跡、近内中村遺跡でも当該時期の住居跡が調査されており、今後これら諸遺跡の報告を基に、炉の形態・住居構造などの変遷について検討することを課題として報告を終える。

<参考文献・報告書>

山内清男	1979 『日本先史土器の細紋』 先史考古学会
宮古市教育委員会	1988 『崎山遺跡群Ⅱ-昭和62年度発掘調査概報-』 宮埋文報15
宮古市教育委員会	1989 『トロノ木I遺跡-第1次~第7次発掘調査報告書-』 宮埋文報17
宮古市教育委員会	1990 『崎山遺跡群Ⅳ-平成元年度発掘調査概報-』 宮埋文報23
宮古市教育委員会	1991 『崎山遺跡群Ⅴ-平成2年度発掘調査概報-』 宮埋文報26
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1991 『上村貝塚発掘調査報告書』 同センター報告書158集
宮古市教育委員会	1999 『千鶏IV遺跡-宮古市水産課千鶏地区漁港漁村総合整備事業関係-』 宮埋文報54
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1999 『小平I遺跡発掘調査報告書 県道宮古-岩泉線地方特定道路整備事業』 同センター報告書299集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2000 『沢田I遺跡発掘調査報告書-三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査-』 同センター報告書318集

報告書抄録

ふりがな	わせとち2いせき だい6じちようき							
書名	早稲栃Ⅱ遺跡 第6次調査							
副書名	市内遺跡発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	61							
編著者名	竹下将男							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL. 0193-62-2111 FAX. 0193-63-9119							
発行年月日	2003年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こざわ Ⅱ おおつえ 小沢Ⅱ大上	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 おにごえ 大字崎鉾ヶ崎 第7地割字 おにごえ 鬼越2番17	03202	LG24-0020	39°40'06"	141°57'10"	19970407 ~19970630	135.0㎡	個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
早稲栃Ⅱ	集落跡	縄文時代 中期末葉 前期前葉 早期末葉	竪穴住居跡 3棟 土坑 2基 遺物含有層	縄文時代中期末葉・早期末葉・前期前葉 土器 磨石、擦切磨製石斧				

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

- | | |
|---|--|
| 1 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 | 35 1992 『大付遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 |
| 2 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』 | 36 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅵ遺跡－農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 3 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書Ⅰ』 | 37 1992 『崎山遺跡群Ⅵ－平成3年度発掘調査概報－』 |
| 4 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書Ⅱ』 | 38 1993 『秋沢Ⅵ遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 5 1984 『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』 | 39 1993 『早稲栃Ⅵ遺跡－第1次・第2次発掘調査報告書－』 |
| 6 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書Ⅲ』 | 40 1993 『崎山遺跡群Ⅶ－平成4年度発掘調査概報－』 |
| 7 1985 『金浜館跡発掘調査報告書』 | 41 1994 『崎山遺跡群Ⅷ－平成5年度発掘調査概報－』 |
| 8 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書Ⅳ』 | 42 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 9 1986 『宮古市遺跡分布図－昭和60年度版－』 | 43 1995 『磯鷗館山遺跡発掘調査報告書』 |
| 10 1986 『中谷地・島田遺跡調査報告書』 | 44 1995 『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』 |
| 11 1987 『崎山貝塚・トノノ木Ⅳ遺跡調査報告書』 | 45 1995 『笹沢Ⅰ・加村・仲組Ⅲ・堺ノ神遺跡－市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 12 1987 『寒風・早稲栃Ⅳ遺跡調査報告書』 | 46 1995 『花原市遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 13 1987 『崎山遺跡群Ⅰ－昭和61年度発掘調査概報－』 | 47 1995 『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ 早稲栃Ⅵ遺跡・崎山貝塚』 |
| 14 1988 『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群(堀台館)－昭和62年度発掘調査報告書－』 | 48 1996 『大付遺跡－平成5年・6年度発掘調査報告書－』 |
| 15 1988 『崎山遺跡群Ⅵ－昭和62年度発掘調査概報－』 | 49 1997 『花原市遺跡－平成8年度発掘調査報告書－』 |
| 16 1989 『千鶴遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－』 | 50 1997 『白石遺跡－第6次発掘調査報告書－』 |
| 17 1989 『トノノ木Ⅰ遺跡－第1～7次発掘調査報告書－』 | 51 1998 『赤畑・天神山・山口館－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 18 1989 『崎山遺跡群Ⅲ－昭和63年度発掘調査概報－』 | 52 1998 『藤畑遺跡－平成9年度発掘調査報告書－』 |
| 19 1989 『高根遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 53 1999 『赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田・赤前Ⅴ柳沢・赤前Ⅵ釜屋ヶ沢・小堀内Ⅲ遺跡水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 20 1989 『狐崎Ⅵ遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 54 1999 『千鶴Ⅳ遺跡－水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 21 1989 『崎山トノノ木Ⅳ遺跡－昭和63年度調査報告書－』 | 55 1999 『崎山貝塚－第12次・13次内容確認調査概報』 |
| 22 1990 『狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』 | 56 2000 『木戸井内Ⅵ・木戸井内Ⅲ・上村Ⅲ遺跡－特別高压送電線沖工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 23 1990 『崎山遺跡群Ⅳ－平成元年度発掘調査概報－』 | 57 2002 『山口館跡－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 24 1990 『磯鷗館山遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 58 2002 『小沢Ⅵ大上遺跡－市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』 |
| 25 1990 『銀ヶ崎館山貝塚－平成元年度発掘調査報告書－』 | 59 2003 『大又沢Ⅵ遺跡－東北電力宮古へリポート移設工事関係発掘調査報告書－』 |
| 26 1991 『崎山遺跡群Ⅴ－平成2年度発掘調査概報－』 | 60 2003 『上根井沢Ⅰ遺跡、沼里遺跡－市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ－』 |
| 27 1991 『青猿Ⅰ・千徳城遺跡群－平成元年・2年度発掘調査報告書－』 | 61 2003 『早稲栃Ⅵ遺跡第6次調査－市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ－』 |
| 28 1990 『熊野町遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 62 2003 『下在家Ⅰ遺跡－平成14年度発掘調査報告書－』 |
| 29 1991 『弘川Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』 | |
| 30 1992 『金浜Ⅰ遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度)発掘調査報告書』 | |
| 31 1992 『重茂館遺跡群－第1次調査報告書－』 | |
| 32 1992 『黒森町Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』 | |
| 33 1992 『高根遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 | |
| 34 1992 『鯉沢遺跡群－平成2年度発掘調査報告書－』 | |

宮古市埋蔵文化財調査報告書61

わせとち2
早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査

－市内遺跡発掘調査報告書4－

2003.3

平成15年3月25日発行

発行 岩手県宮古市教育委員会

〒027-8501 宮古市新川町2番1号

TEL.0193-62-2111

印刷 株式会社文化印刷

〒027-0037 宮古市松山5-13-6

TEL.0193-62-4578

